石川県埋蔵文化財情報

第　15　号

巻頭図版（森ガッコウ遺跡）

平成17（2005）年度上半期の発掘調査から ……調査部長　湯尻　修平…（1）

発掘調査略報

国分尼塚遺跡 ……（3）

栄町遺跡 ……（4）

中川Ａ遺跡・太田ツツミダ遺跡・太田ニシカワダ遺跡 ……（6）

的場農業倉庫前遺跡 ……（8）

太田Ｂ遺跡 ……（9）

杉野屋専光寺遺跡 ……(10)

森ガッコウ遺跡 ……(11)

加茂遺跡 ……(13)

俵ニカヤマノヤマ丁場跡 ……(14)

末松遺跡 ……(15)

二ッ梨グミノキバラ遺跡 ……(16)

平成17（2005）年度上半期の遺物整理作業 ……(18)

環日本海交流史研究集会の記録

「中世日本海域の土器・陶磁器流通－甕・壺・擂鉢を中心に－」

はじめに ……所長　谷内尾晋司…(22)

発表概要　北部九州日本海域の中世土器・陶磁器－甕・壺・鉢を中心に－ ……徳永　貞紹…(23)

山陰における中世の土器・陶磁器流通－甕・壺・擂鉢を中心に－ ……榊原　博英…(26)

越前焼甕・壺・鉢（擂鉢）の生産・流通・消費 ……岩田　　隆…(29)

珠洲窯の概要 ……大安　尚寿…(32)

中世加賀・能登の甕・壺・鉢の生産と流通 ……岩瀬　由美…(35)

富山県における中近世の土器・陶磁器流通－甕・壺・擂鉢を中心にして－　宮田　進一…(38)

越後北部の中世陶器窯 ……鶴巻　康志…(41)

東北地方日本海側の陶磁器の様相 ……山口　博之…(45)

討論と展望 ……横山　　誠…(49)

調査研究・報告

北陸地域における渡来系遺物群の集成 ……新村いづみ・松尾　実…(50)

2006年３月

財団法人　石川県埋蔵文化財センター

森ガッコウ遺跡

写真１　遺跡近景

B 区北側から撮影したものである。

写真２　掘立柱建物

B 区北側で検出した、掘立柱建物群の一つである。２間×３間程の規模と考えられる。これらの建物は主軸方位を東西・南北方向にそろえて建てられており、律令体制下の特徴が見られる。

写真１　遺跡近景

写真２　掘立柱建物

平成17年度(2005)年度上半期の発掘調査から

調査部長　湯尻　修平

平成17年度（2005）は年度当初に23件31遺跡の調査を受託することとし、その面積総計は63,230㎡で計画をした。内訳は国土交通省等の国関係事業に伴う調査が４件、県農林水産部関係が７件、県土木部関係が11件、県総務部関係が１件である。今年度の特長は能登地域、特に七尾市を中心とした調査箇所が多く、金沢市、野々市町の各１件と小松市、津幡町の各２件の計６件を除くと、残り17件25遺跡は全て旧能登国に含まれている。

本書では４～８月に実施した11件の調査成果を主に紹介することとした。七尾市栄町遺跡は３年目の調査となったが集落域の端にあたり、遺跡の中心部にあった整然と配置され、板塀で囲まれるような建物群は認められなかった。同国分尼塚遺跡は七尾湾に臨む丘陵地に位置し、２基の前方後方墳から成る国分尼塚古墳群に連続した位置にあるため成果が期待されたが、縄文前期の竪穴２棟と弥生中期の建物外周溝と数基の円筒土坑が認められたのみであった。羽咋市的場農業倉庫前遺跡、同太田Ｂ遺跡、太田ニシカワダ遺跡も昨年度からの継続調査であり、古墳時代や古代の集落遺跡であったがいずれも遺跡の縁辺部にあたっていた。同地区は、ほ場整備事業でも調査を行っており、中川Ａ遺跡、太田ツツミダ遺跡、太田ニシカワダ遺跡の３遺跡で小規模な調査を実施している。

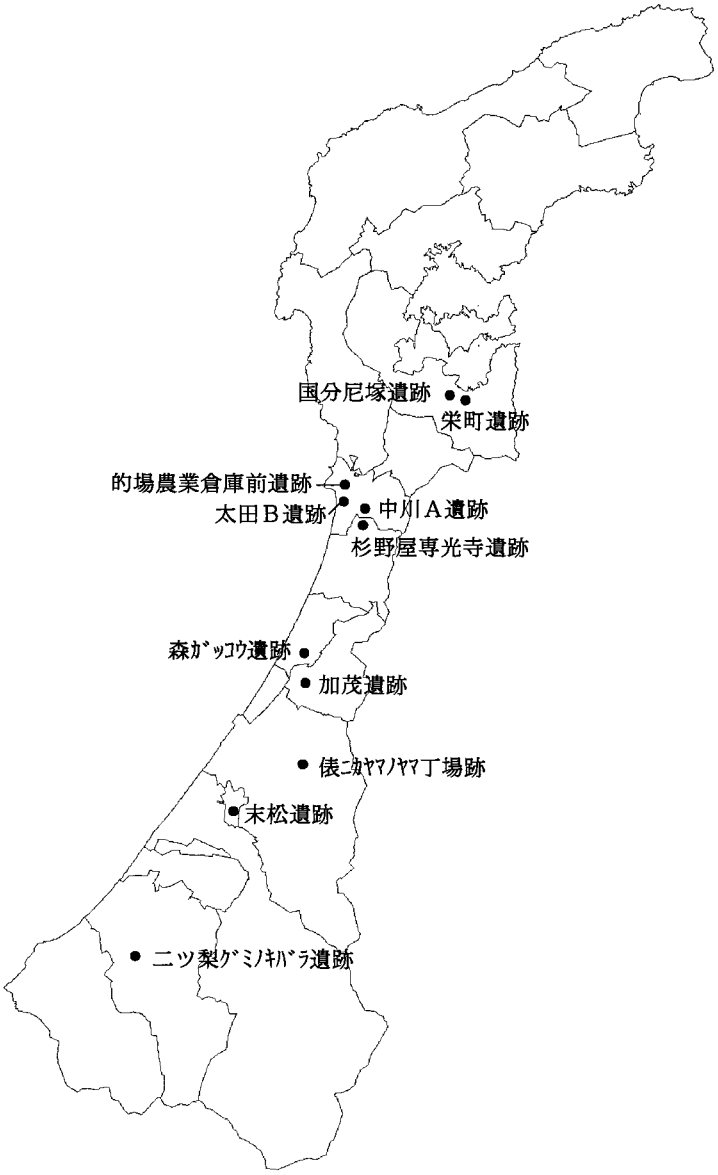
かほく市の森ガッコウ遺跡は奈良～平安時代前期遺跡で、主軸を東西・南北に揃えた掘立柱建物８棟以上と区画溝と中世の井戸３基などがある。出土遺物では土師器や須恵器が多く墨書土器や転用硯も含まれている。７月２日の現地説明会には約150人の参加者があった。津幡北バイパス関係の最終調査となる津幡町加茂遺跡の調査は、平成12年度調査で加賀郡牓示札が発見された古代北陸道の一部を高架下に保存することになり、脚台設置位置約100㎡を対象とした狭い調査区であった。古代、古墳前期、弥生後期の３遺構面の調査を実施した。

金沢市俵ニカヤマノヤマ丁場跡は、金沢城の石垣に使われた戸室石を採掘した丁場跡で、最近、金沢城研究調査室の調査により明らかとなってきている石切丁場跡の一つである。当センター担当では初めての丁場跡調査例となったが、３基の土坑が明らかとなり石材採掘坑の可能性が高い遺構と考えている。野々市町末松遺跡は国史跡末松廃寺に近く、奈良・平安時代の大きな集落跡である。今年度調査区は着手直前に施設予定箇所の変更が生じ、着手予定が遅れる事態もあったが、調査の結果は遺跡の縁辺部にあたり調査作業は順調に進行することができた。

小松市二ッ梨グミノキバラ遺跡は古墳時代から中世まで長い窯業生産が続けられた南加賀古窯跡群の一角に位置し、焼土坑４基と粘土採掘坑10を検出した。粘土採掘坑からは９世紀後半を主体とする須恵器、土師器が多く出土し、近くに存在する窯跡の焼成品が投棄された可能性がある。

調査が今年度下半期まで継続するため、本書では取りあげなかったが、国史跡能登国分寺跡の北に位置する七尾市古府・国分遺跡では平安時代前期の掘立柱建物群や大型の井戸が発見されており、国分寺に関係する遺跡であると今後の成果が注目されている。また、七尾城跡の調査箇所も鍛冶関係の工房跡や井戸跡などが発掘され、国史跡七尾城跡のふもとに広がる城下町の一部にあたると推定されている。これらの成果は次号で紹介する予定である。

平成17年度上半期発掘調査遺跡の位置図



調査課	関係機関		事業名	遺跡名	所在地	面積(㎡)
1課	国土交通省	金沢河川国道事務所	一般国道8号改築(津幡北バイパス)	加茂遺跡	津幡町加茂	300
		金沢河川国道事務所	一般国道159号改築(七尾バイパス)	古府・国分遺跡	七尾市国分町	8,900
		金沢河川国道事務所	一般国道470号能越自動車道	七尾城跡	七尾市古城町他	17,250
		金沢河川国道事務所	梯川河川改修	白江梯川遺跡	小松市白江町	2,600
2課	農林水産部	農業基盤整備課	広域営農団地農道整備　小松	二ッ梨グミノキバラ遺跡	小松市二ツ梨	1,300
		農業基盤整備課	一般農道整備　宇ノ気中央	森ガッコウ遺跡	かほく市森	1,870
		農業基盤整備課	ふるさと農道整備　米浜	米浜遺跡	志賀町米浜	900
		農業基盤整備課	広域営農団地農道整備　能登外浦3期	飯川谷製鉄遺跡	門前町飯川谷	800
		農業基盤整備課	県営ほ場整備　瀬戸町	瀬戸町遺跡	かほく市瀬戸町	520
		農業基盤整備課	県営ほ場整備　中川・太田	中川Ａ遺跡他2遺跡	羽咋市中川町・太田町	1,520
		農業基盤整備課	県営ほ場整備　鳥屋西部	大槻ブンゾ遺跡他3遺跡	中能登町大槻	1,270
3課	土木部	道路建設課	いしかわ広域交流幹線軸道路整備(一)七尾鳥屋線	東三階Ａ遺跡	七尾市東三階町	1,400
		道路建設課	一般国道415号　国道改築	杉野屋専光寺遺跡	宝達志水町杉野屋	190
		道路建設課	一般国道415号　国道改築	太田Ｂ遺跡他2遺跡	羽咋市太田町	5,190
		道路建設課	一般国道249号　国道改築	栄町遺跡他1遺跡	七尾市栄町・古府町・国分町	5,700
		道路建設課	安全・安心道路整備(一)花園藤野線	花園上田遺跡	七尾市花園町	600
		道路建設課	いしかわ広域交流幹線軸道路整備(主)七尾輪島線	渡合遺跡	輪島市三井町渡合	350
4課	土木部	道路建設課	いしかわ広域交流幹線軸道路整備(主)高松津幡線	加茂遺跡	津幡町加茂	9,390
		道路整備課	道路バリアフリー化促進(一)　芝原石引線	俵ニカヤマノヤマ丁場跡	金沢市俵町	400
		道路整備課	道路バリアフリー化促進(一)　七尾羽咋線	良川北遺跡	中能登町良川	520
		道路整備課	特定交通安全施設整備	下町マッチャマ遺跡	七尾市下町	400
		都市計画課	街路　(都)　春日通り線	飯田町遺跡	珠洲市飯田町	660
	総務部	総務課	大学整備連携インキュベータ整備	末松遺跡	野々市町末松	1,200
総計		23件		31遺跡		63,230

平成17年度調査計画（当初）

国分尼塚遺跡

所 在 地　七尾市国分町地内

調査面積　1,900㎡

調査期間　平成17年５月４日～同年６月27日

調査担当　澤辺利明　永下賢太

遺跡位置図（S＝１／25,000）

遺跡は、能登半島の中ほどに位置する七尾市街を北東に望む標高約22m の丘陵端に立地する。

周辺は、東方の低地部に昨年度当センターが調査を実施した国分遺跡や国分Ｂ遺跡が、鷹合川を挟んだ西方の丘陵上には国分高井山遺跡や高井山、岩屋山の古墳群が、また、遺跡ののる徳田丘陵上には国分尼塚１・２号墳を擁する国分・徳田古墳群などが営まれ、遺跡密集地として知られる地域である。

検出された主な遺構は、海に面した丘陵端で縄文時代前期前葉の竪穴住居跡１棟、弥生時代中期の住居跡１棟が、丘陵上の平坦面で縄文時代前期前葉の竪穴状遺構１基、弥生時代後期の円筒土坑２基などが、丘陵内部に向く南東半部の斜面に面しては長径約２～３m、深さ0.5～0.6m の不定形をなす風倒木痕４基が確認された。縄文時代の竪穴住居跡は一辺約3.5m の隅丸不定方形をなし、深さ約0.1m。斜面にかかる低位部は一部流失する。内部に６本柱を伴うとみている。炉跡や焼土面は確認されなかった。竪穴状遺構は直径約2.2m の隅丸方形をなし、深さ約0.2m。小径ながら内部に４本柱をもち、遺構の性格については今後検討を要する。竪穴住居跡に重複しては直径約13m のややつぶれた円溝が検出された。溝幅0.4～0.6m、深さ0.3～0.4m。斜面端の崖にかかり円溝の１／２近くが消失していたため全容を窺うことはできず、また、当地が長らく竹林であったことから、竪穴住居跡と同じく大幅な削平・撹乱を受け、円溝内部に柱穴等は確認できなかったが、溝内に弥生時代中期の土器を伴うことから当該期の住居跡周溝の可能性が高い。

遺跡全景（東から）

以上の検出遺構の分布からみて集落の中心は、既に削平された北あるいは北東方向に伸びていた丘陵先端部にあったとみられる。　（澤辺利明）

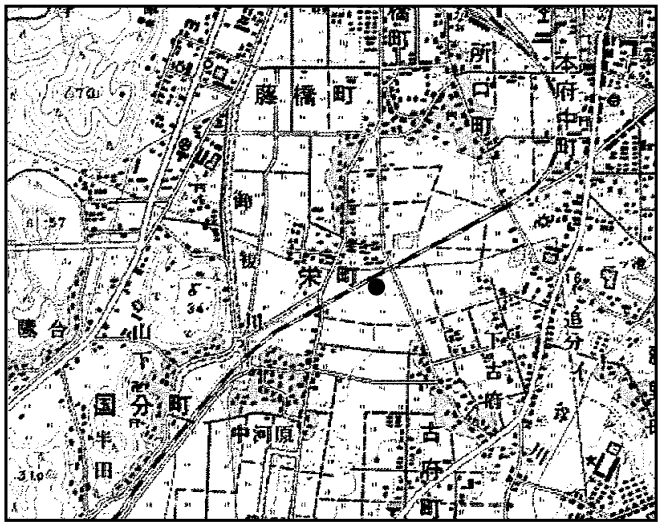
住居跡（縄文時代前期）

住居跡（弥生時代中期）

栄町遺跡

所 在 地　七尾市栄町・古府町地内　　調査期間　平成17年４月18日～同年８月19日

調査面積　2,900㎡　　調査担当　布尾和史　荒木麻理子　大西　顕



遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

- 古墳時代、古代、中世の集落跡である。
- 古墳時代は平地建物跡、土坑を検出。
- 古代は、掘立柱建物跡と土坑、耕作地に伴う平行溝群を検出。
- 中世は、掘立柱建物跡、井戸、耕作地を検出

遺跡は、碁石が峰山地に流れを発し北流して七尾湾に注ぐ御祓川の下流域に位置し、御祓川右岸の扇状地扇端部に立地している。発掘調査は、一般国道249号線改築工事に係るもので、平成15年・16年に引き続き今回で３次調査となる。調査区は１次・２次調査区の東側であり、間にJR七尾線の線路を挟む。線路の西側では古代の道路状遺構や塀に囲まれた建物群が検出されており、大規模な宅地が確認できることから、公的な施設かあるいは在地有力者の宅地の可能性が指摘されている。

今年度の調査では、古墳時代中期から中世にいたるまでの遺構と遺物が確認されている。出土遺物は収納ケースに13箱であり、遺構に伴うものは少ない。

古墳時代　平地建物の下部施設と見られる方形の建物周溝や土坑を検出した。平地建物跡周溝は２基確認されている。幅・深さ30㎝ほどの溝が略方形に回るもので、径は約５ｍである。遺物が伴わないので時期は不明だが、調査区から出土している資料から古墳時代中期頃と思われる。

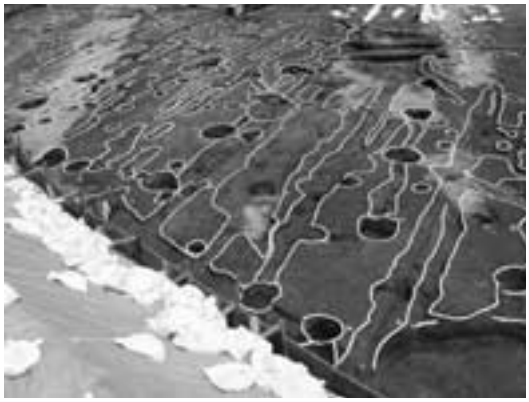
古　　代　現時点で６基の掘立柱建物跡が検出されている。すべて側柱タイプで、２間×３間が１基、１間×３間（２間）が３基、１間×５間が１基、１間×２間が１基確認できる。１次調査区で検出された板塀の続きは検出されないことから、JR七尾線をまたがずに北ないしは南方向に屈折するものと思われる。

耕作地に伴うと見られる平行溝群は調査区の広い範囲で検出されており、古代の掘立柱建物跡４基と重複する。同一確認面ながら遺構重複の前後関係は判然としないが、掘立柱建物跡群で２時期、平行溝群で３時期程度の重複が認められる。出土遺物は９世紀のものが多い。

中　　世　３間×３間の総柱タイプの掘立柱建物跡が１基、井戸が２基検出されている。井戸は木枠が一部残存するものと素掘りのものが見られた。素掘り井戸の内部からは、箸状木製品と共に白磁碗の底部片が出土した。井戸の覆土上層には、遺跡の遺物包含層の上位に堆積する褐色系の砂（質土）が入り込んでおり、調査区全体がこの時期に洪水等の影響により地中に没したことがうかがわれる。

包含層上部で部分的に確認された畝跡群も同様に砂を被っていることから、中世段階の畑跡であるものと推測される。　（布尾和史）

B１調査区



掘立柱建物跡

上層畑跡

平行溝群

B２調査区

平地建物跡

井戸出土遺物

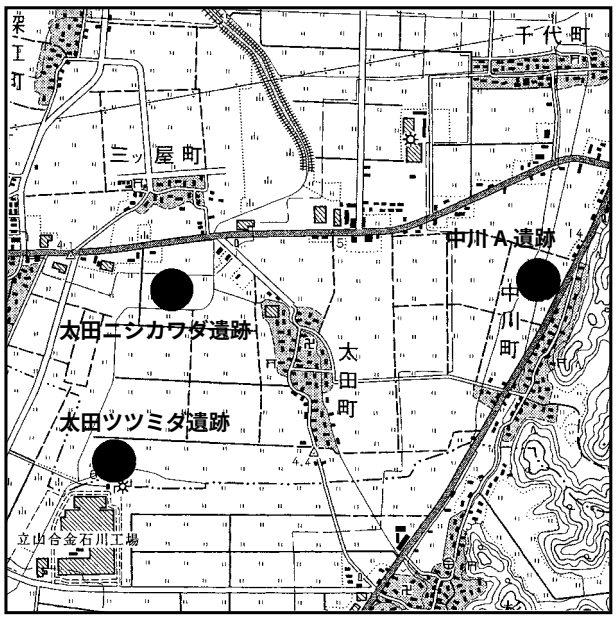
土層の堆積状況

中川A遺跡・太田ツツミダ遺跡・太田ニシカワダ遺跡

所 在 地　羽咋市中川町・太田町地内　　**調査期間**　平成17年５月17日～同年９月21日

調査面積　1,350㎡　　**調査担当**　西野秀和　松山和彦　稲垣淳平

（中川Ａ遺跡　570㎡　　太田ツツミダ遺跡　570㎡　　太田ニシカワダ遺跡210㎡）



遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

いずれも県営ほ場整備事業（中川・太田）に起因し、排水路・パイプライン部分を対象とする線的な調査である。なお、従来「太田ニシカワダ・ツツミダ遺跡」と呼称されていた遺跡は、別々の遺跡であることが判明している。

・中川Ａ遺跡
古墳時代の掘立柱建物、古代の掘立柱建物・井戸・溝などを確認した。

・太田ツツミダ遺跡
古代の溝などを確認した。

・太田ニシカワダ遺跡
古墳時代の掘立柱建物・溝などを確認した。

中川Ａ遺跡

羽咋市東部の丘陵山麓の緩傾斜地に立地する。昨年度からの継続であり、今年度は遺跡北部を対象に調査を実施した。年代としては①古墳時代（前期が中心）と②古代（８～９世紀が中心）の２時期がみられた。①は主に今年度調査域の南半に分布し、断片的ながら掘立柱建物が２棟検出されている。また、南西の杉野屋専光寺遺跡からのびる大規模な古代集落の北端部となる②についても、掘立柱建物２棟・井戸１基・土坑１基・溝７条などが検出されている。

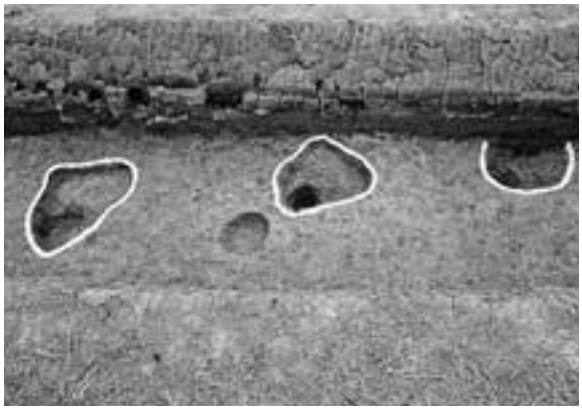
太田ツツミダ遺跡

羽咋市東部の平野部に位置する。包含層にあたる黒褐色粘土層中には一定量の古代遺物がみられたが、遺構としては細い溝が疎らに分布するのみであった。居住域とは異なる土地利用も想定できる。

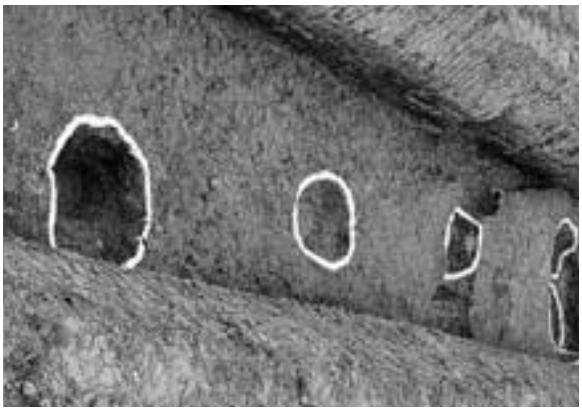
太田ニシカワダ遺跡

西方の子浦川水系と東方の吉崎川水系に挟まれた島状の微高地に立地すると想定されている。既往の市教委の調査において古墳時代前期の祭祀にかかわる漆工資料（黒漆塗り土器など）が出土し、注目されている。今回は集落域が確認され、礎板などが残存する柱穴群が検出された。　（松山和彦）

中川 A　調査風景



中川 A　掘立柱建物（古墳）



中川 A　掘立柱建物（古代）

中川 A　井戸

太田ツツミダ　完掘状況

太田ニシカワダ　調査風景

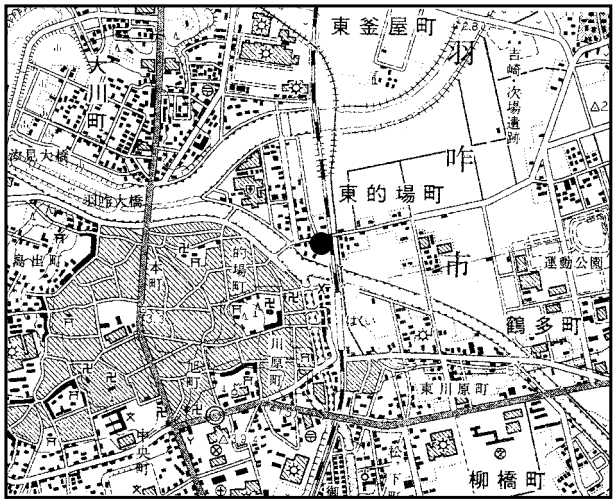
太田ニシカワダ　柱穴群

太田ニシカワダ　柱穴群

的場農業倉庫前遺跡

所 在 地　羽咋市的場町地内　　**調査期間**　平成17年７月25日～同年８月10日

調査面積　200㎡　　**調査担当**　宮川勝次　山田由布子



遺跡位置図（S＝１／25,000）

本遺跡は羽咋駅から北へ約500mの地点に位置する。発掘調査は平成16年度からの継続であり、今年で２年目を数える。平成17年度調査区は平成16年度の各調査区間の隙間を埋めるようにして設けられた。調査の便宜上、東側を１区、西側を２区に振分けて調査を実施した。検出した遺構は、土坑１基、溝２条、ピット等である。遺物は古代を中心とした土器が少量出土している。

検出した遺構の中には平成16年度調査で検出した、側面から底部にかけて粘土貼りを施した中世の東西溝（SD01）の続きやそれよりも時代の古い南北溝（SD02：弥生時代か）の続きも含まれる。今回検出した中世の東西溝は、昨年よりも粘土の貼りが弱く、また、その特徴は東側の１区へ行くほど顕著であった。出土遺物に関しても、昨年度よりも出土量が減少しており、古代のものが少量出土したに止まっている。これらのことから、平成17年度調査区は集落の縁辺部にかかっており、集落の中心はそれよりも西側にあったと推定される。また１区東側では、昨年度調査区から続く河跡の肩部を確認した。　（山田由布子）

１区南側　完掘状況（北西から）

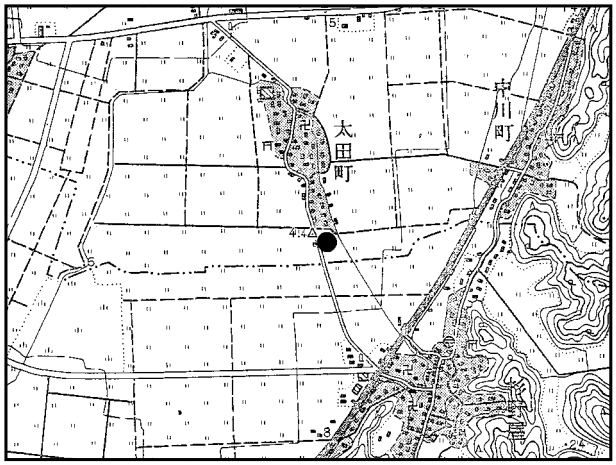
１区　南北溝（北から）

２区　中世の東西溝（西から）

太田（おおた）B遺跡

所 在 地　羽咋市太田町地内　　**調査期間**　平成17年５月９日～同年７月５日

調査面積　1,560㎡　　**調査担当**　宮川勝次　山田由布子



遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査は一般国道415号道路改良工事を原因とし行なわれ、古代と思われる掘立柱建物、時期不明の多数の溝、近現代の水道管などを確認した。掘立柱建物は調査区南東部において２間×４間以上、１間以上×３間以上のものを２棟確認し、出土遺物は土師器の小片しかないため時期は不確定であるが、建物に近接する小穴から古代の須恵器壺底部が出土していることから該期に属する可能性がある。溝は調査区のほぼ全体に広がりをみせる狭小な不規則な形をしたものや調査区東端部と中央付近西寄りで確認した両肩に沿って杭が打ち込まれているものがある。

いずれも時期不明であるが、前者は形状・覆土などから人為的なものというより、河川洪水氾濫を起因とする自然的要因が考えられる。その他には、昭和20年前半頃まで使用していた竹製の水道管やそれの入れ替えに使用された土管のものを確認した。これら水道管は隣接する宝達志水町杉野屋に所在する清水から、直線にして約１km の距離を、太田集落に水を引いてきたものであり、先人達の苦労を偲ばせる太田町にとっての貴重な歴史的遺産であろう。

今回の調査区は遺構・遺物ともに少ない状況であることから遺跡の縁辺部と考えられ、隣接する太田A遺跡、太田ツツミダ遺跡などとの関連性をふまえることで、遺跡一帯の状況がつかめるものと期待する。

（宮川勝次）

遺跡完掘状況

掘立柱建物跡（西から）

水道管完掘状況（北から）

水道管ジョイント部分（南東から）

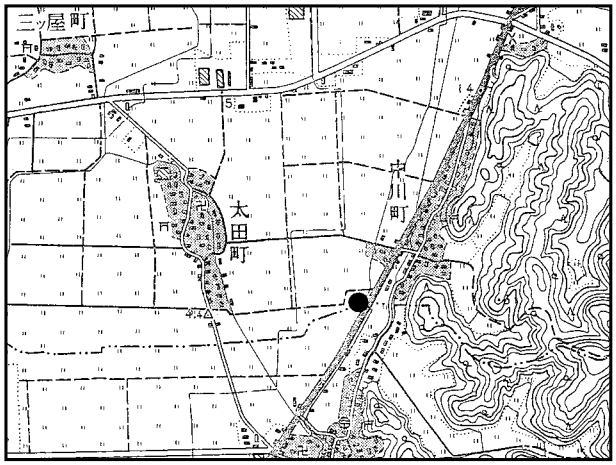
杉野屋専光寺遺跡

所 在 地　宝達志水町杉野屋地内

調査面積　190㎡

調査期間　平成17年６月１日～同年６月15日

調査担当　宮川勝次　山田由布子



遺跡位置図（S＝１／25,000）

杉野屋専光寺遺跡は一般国道415号道路改良工事を原因として、過去にも町教育委員会や当センターで調査が行なわれ、平安時代前期を中心として、１間×８間以上の大型掘立柱建物、「東院寺」等の墨書土器、軒丸瓦等の寺院関連遺物が出土している。今年度調査では調査区東部において該期に属すると思われる掘立柱建物や溝等を確認し、西部にかけては遺構が希薄になる状況である。過去の調査成果からも東方にかけて遺構が集中しており、近接する中川Ａ遺跡の遺構群をも含めて、関連性が注目される。

（宮川勝次）

遺跡遠景（西から）

遺跡近景（西から）

掘立柱建物跡（西から）

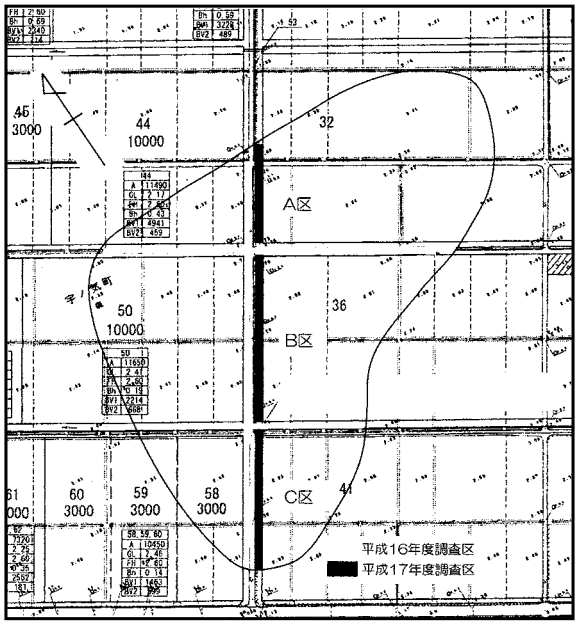
調査区西部　完掘状況（東から）

森（もり）ガッコウ遺跡

所 在 地　かほく市森地内
調査面積　1,650㎡

調査期間　平成17年４月26日～同年８月４日
調査担当　安中哲徳　森　由佳

遺跡位置図（S＝１／25,000）



調査区配置図（S＝１／4,000）

調査成果の要点

- 沖積平野に立地する、奈良・平安・鎌倉時代の集落遺跡。
- 古代の主軸方位を東西・南北にそろえた掘立柱建物を７棟以上と区画溝、中世の井戸３基を検出。
- 須恵器･土師器･墨書土器･斎串のほか縄文土器･弥生土器･珠洲焼･銅銭などが出土している。

森ガッコウ遺跡は、かほく市森地内の、森集落から約200m 北側の水田中に立地する。本遺跡は平成16年度の県営ほ場整備事業に伴う排水路・パイプライン敷設工事による調査（820㎡）に先立って行われた、平成15年度の試掘調査により発見された新しい遺跡であり、その範囲は南北約250m、東西約100～150m に及び、微高地上に展開する。遺跡の周囲には、北東側の丘陵上に鉢伏茶臼山古墳、南東側の丘陵上に国指定史跡である上山田貝塚、南側に中世の森城跡など、多くの遺跡が分布する。

平成17年度は一般農道整備事業に伴い、平成16年度の南北調査区の東側に併走する1,650㎡を調査した。調査区は平成16年度の調査後に東西方向に敷設された排水路・パイプラインにより、３区に分断されており、北からＡ区・Ｂ区・Ｃ区とした。

Ａ区からは多くの溝が検出された。中央～南側の溝からは縄文土器や古墳時代の土師器も少量出土しており、周辺遺跡から流れ込んだものと考えられる。中央付近で礎板や柱痕の残る柱穴を検出したが、どのような規模の建物であるかは不明である。南端からも柱穴を多く検出し、丸木を半切した状態で使用された柱痕が出土している。これらの柱穴はＢ区北側の掘立柱建物群の北端と考えられるが、Ｂ区とはやや離れるため、規模等はわからなかった。また東側の調査区外からも多くの土師器・須恵器などを表採で取り上げた。

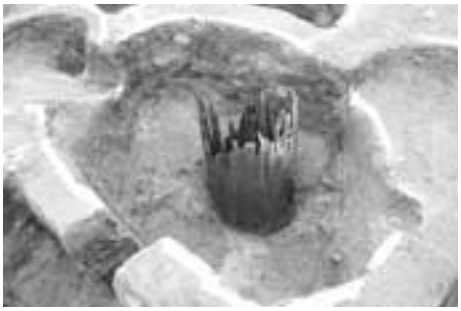
Ｂ区では、北側で古代の掘立柱建物を少なくとも５棟検出した。これらの建物群は何度か立て替えを行いつつ、主軸方位を東西・南北方向にそろえて配置されていた。建物群の南端には２間×２間規模の総柱の建物が検出され、南側で検出された東西方向に走る溝により区画されていることが確認された。中央付近からは中世の井戸３基を検出し、珠洲焼や宋銭が出土している。南側では、Ｃ区北側にかけて掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴や、南北方向に走る溝を検出した。

C区では、北側から１辺が１ｍを超える柱穴をもつ、２間×２間規模と考えられる掘立柱建物を検出した。平成16年度の調査でも、この建物の東側に１辺約90cmの柱穴を持つ、掘立柱建物が１棟確認されており、このあたりに大型の建物群が存在していた可能性が考えられる。またＢ区南側で検出された南北方向の溝は、これらの建物の間を走っており、区画溝と考えられる。中央以南では遺構密度が低く、柱穴等はみられなかった。

まとめ　平成17年度の調査では、古代（奈良時代～平安時代前期）の掘立柱建物７棟以上と区画溝等を検出し、中世の井戸３基を検出した。遺物は土師器・須恵器を中心に縄文土器・弥生土器・珠洲焼・陶磁器が出土し、他に墨書土器（「田中」）・転用硯・斎串・曲物・宋銭・石鏃なども出土している。

墨書土器・転用硯など文字関係資料の出土や、律令体制下の遺跡で多く見られる、主軸方位を東西・南北にそろえた建物群や溝は、周辺の低地水田を新たに開発し維持にあたった人々が住んだ集落であろうと考えられる。官人あるいは有力者の居宅が存在していた可能性も考えられる。

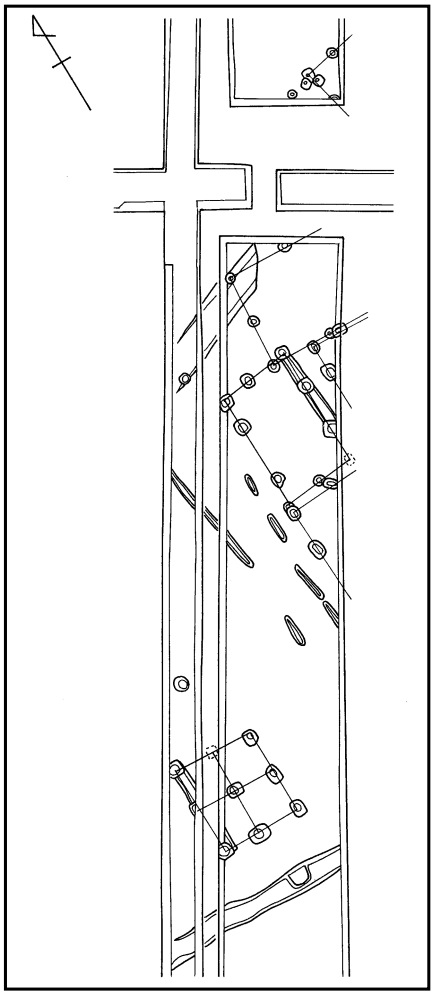
今回検出された古代の建物や溝の示す方位が、現在の水田地割の方位とは大きく異なることから、今後中世段階での地割方位が明らかになれば、当地における土地区画の変遷についてより理解が深まるものとみられる。　（森　由佳）



Ａ区　柱痕

Ｂ区　総柱建物・区画溝

Ｃ区　掘立柱建物

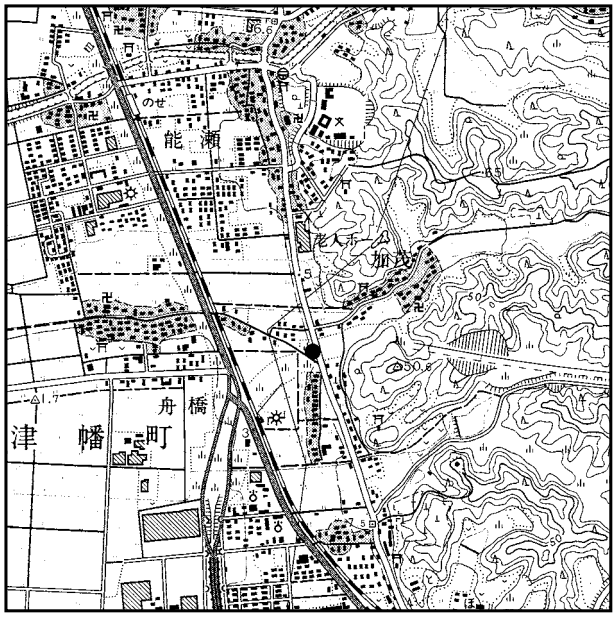


Ｂ区掘立柱建物群配置図（Ｓ＝１／400）

加茂遺跡

所 在 地　河北郡津幡町加茂地内　　**調査期間**　平成17年６月27日～同年８月10日

調査面積　300㎡　　**調査担当**　柿田祐司　竹田麻里子



遺跡位置図（S＝１／25,000）

津幡北バイパス関連で行われてきた加茂遺跡の発掘調査は、今回で第11次を数える。調査対象となったのは、橋脚を建設する部分である。

調査区は矢板で囲まれた100㎡で、これまで行われてきた調査から、３面の遺構検出面が存在することが予想された。そこで、当初より遺構検出面３面の都合300㎡の調査を計画し調査を開始した。

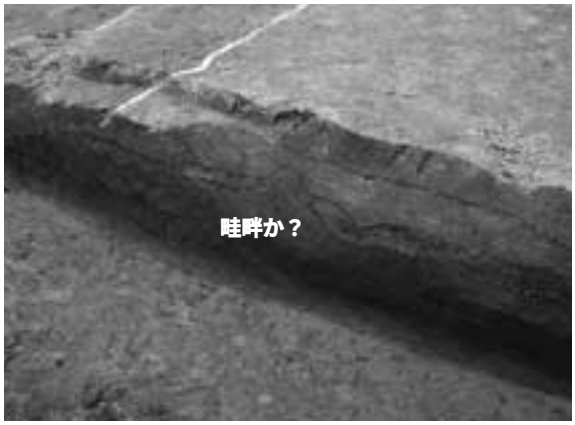
第１面は、古代以降の遺構検出面であり、調査区北部では畝溝群を検出した。さらにそれを切って、水田の区画と推定される落ち込みを検出した。中央部では、浅い溝状の遺構を検出したが、これも水田に関係する可能性がある。南東部では、柱穴を２基検出した。いずれも柱根が遺存し、掘立柱建物が調査区外に展開していると考えられる。ただし、両柱穴が同一建物になるかは不明である。

第２面では、溝を３条検出した。いずれも古墳時代に属すると考えられる。その内の２条は中央部で、もう１条は北部で検出した。

第３面は、南部で水田の畦畔と見られる盛り上がりをわずかながらに確認した。水田であれば、弥生時代に属すると考えられる。また第３面に至る過程で、４条の溝を中央部で検出した。　（柿田祐司）

第１面　完掘状況

第１面　土坑内遺物出土状況

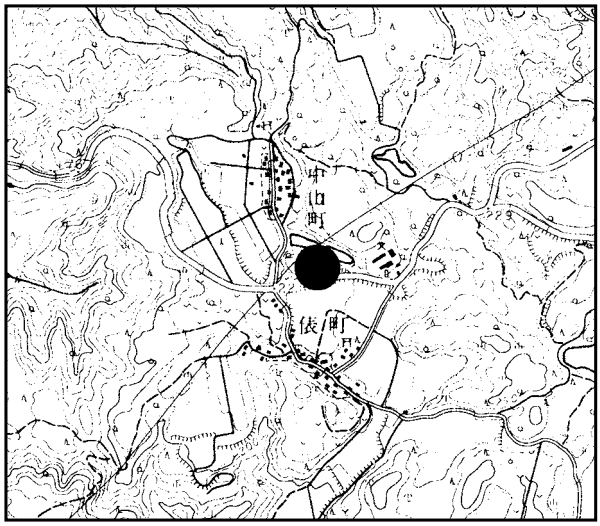


調査区西側断割断面

俵（たわら）ニカヤマノヤマ丁（ちょう）場（ば）跡

所 在 地　金沢市俵町地内　　**調査期間**　平成17年４月27日～同年５月27日

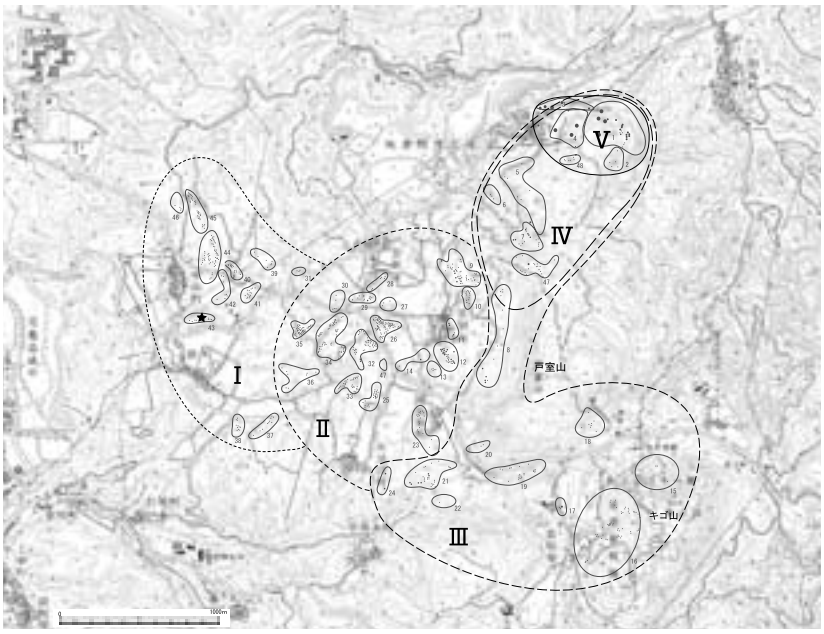
調査面積　400㎡　　**調査担当**　和田龍介　伊藤さやか



遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査区全景　東から

今回、道路バリアフリー化促進工事芝原石引町線に係る調査がおこなわれた俵ニカヤマノヤマ丁場跡は、金沢市の南東に位置している（下図中、★印）。本遺跡を含む金沢城の石垣普請に伴う石切場は、戸室石切丁場と言われ、主に金沢城研究調査室によって調査が行なわれている。今日までに約700地点の採掘跡が判明しており、丁場の石材や刻印と金沢城の石垣との比較研究などが行われている。採掘域の変遷を捉えたことなどが成果として挙げられ、本遺跡は近世初期の石切丁場と考えられている。採掘は、地表で確認できるもの、あるいは表層中の原石を露天掘りし、その場で割り加工するという順に行われていた。中でも近世初期の採掘方法は、地表面で確認できた適当な大きさの石の周囲の土を除去し、１地点につき１～数個の原石を掘り出すという一本釣りに近い形態をとっていたと想定されている。



戸室石切丁場の分布（ドットは採掘坑、ドット囲み線は埋蔵文化財包蔵地）

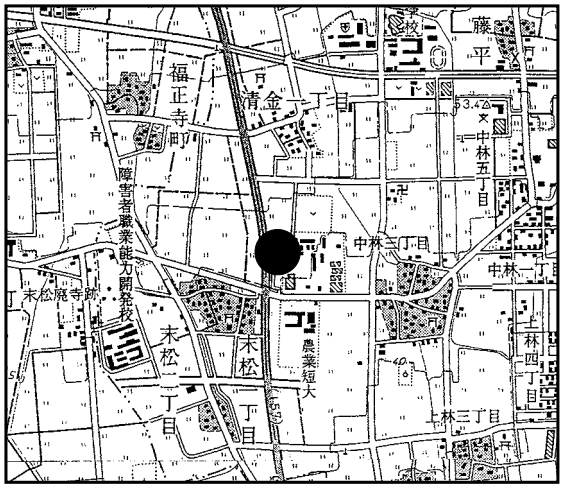
調査の結果、尾根の緩斜面に径約３～５ｍの３基の土坑を確認した。この内２基については、土坑内や周辺で出土した石に矢穴などの加工痕は認められなかったが、他箇所では見られない大型の石が土坑内や周囲に分布していたことから、石材採掘坑の可能性が高いと思われる。

また、縄文土器が出土していることから、近隣に縄文時代の集落等が存在している可能性がある。（伊藤さやか）

末松（すえまつ）遺跡

所 在 地　石川郡野々市町末松地内

調査面積　1,200㎡



遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査期間　平成17年６月７日～同年８月17日

調査担当　巻　久茂　西田昌弘

末松遺跡は手取川扇状地の扇央部に立地しており、標高35～42mを測る。西約500mには国指定史跡の末松廃寺跡があり、現在は史跡公園として整備されている。

今年度は大学連携インキュベータ整備工事に伴う発掘調査であり、国道157号線と県立大学附属研究所における過年度調査区に挟まれた箇所で調査を実施した。

調査区北半部では、奈良～平安時代の河跡が確認でき、その両岸では小穴・土坑を多数検出している。柱穴は確認されなかったものの、炭化物と焼土を含む一辺約80cmの隅丸方形を呈する小穴を確認した。

また、南半部では既調査区で確認されていた道状遺構に伴う側溝部の続きが確認できた。今回確認できたのは側溝の片側１条のみであり、路面や対となるもう１条の側溝は確認されなかったものの、研究所における既調査区との位置関係やその成果から、畝状遺構が確認された畠地に向かう道状遺構が、本調査区にまで延びていたものと想定される。（西田昌弘）

調査区より末松廃寺跡を望む（北東から）

調査区南半部完掘状況（北から）

道状遺構周辺完掘状況（北西から）

調査風景（西から）

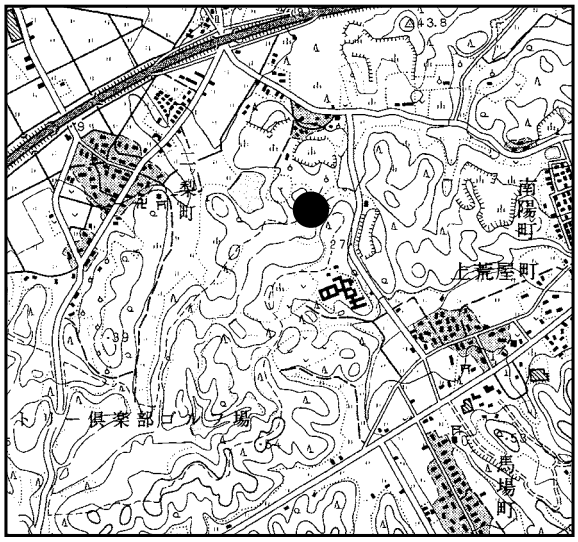
二ッ梨（ふたつなし）グミノキバラ遺跡

所 在 地　小松市二ッ梨町地内

調査面積　1,300㎡

調査期間　平成17年４月26日～同年６月24日

調査担当　白田義彦　谷内明央　稲垣淳平



遺跡位置図（S＝１／25,000）

調査成果の要点

- 本調査は広域営農団地農道整備事業小松地区に係る発掘調査である。
- 本遺跡は低地に面した標高20～30m の低丘陵地帯に立地する。
- 古代の焼土坑４基、粘土採掘坑群、溝やピットを検出した。
- 須恵器や土師器が多量に出土し、時期は９世紀後葉が主体である。
- 調査区近辺で須恵器の窯や土師器の焼成坑が確認されており、今回検出した遺構・遺物もそれに伴うものと判断される。

谷を挟んだ調査区となっており、西側斜面中腹から裾部にかけて焼土坑４基を、裾部で粘土採掘坑群を検出した。調査区北側の斜面から裾部にかけては、規則的に配置された土坑状の遺構を多数検出しているが、調査の結果、隣接するブドウ園に伴うものであることが判明した。

焼土坑

焼土坑１の平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.6m・短辺1.5m を計測する。壁面は被熱していた。

焼土坑２の平面形態は隅丸方形を呈し、１辺70cm を計測する。壁面は被熱していた。

焼土坑３の平面形態は円形を呈し、径3.7m を計測する。

焼土坑４の平面形態は隅丸方形を呈し、長辺1.2m・短辺１m を計測する。

焼土坑１～４はいずれも炭化物層や炭層を含んでおり、何らかの火焚き行為が行われていたことが窺える。いずれも遺物は出土していない。深さは10～20㎝を計測する。

焼土坑１・２の壁面の被熱は検出時に捉えることができ、当初は土師器焼成坑と考えていた。土師器焼成坑は燃料を燃やし尽すことが必要なため床の焼土化を想定できるが、調査の結果、床面に焼土化の痕跡を確認することはできなかった。したがって低い温度を保ち燃料を燃やし尽くす必要がなく比較的被熱傾向が弱いと考えられる製炭土坑の可能性が高いと判断した。

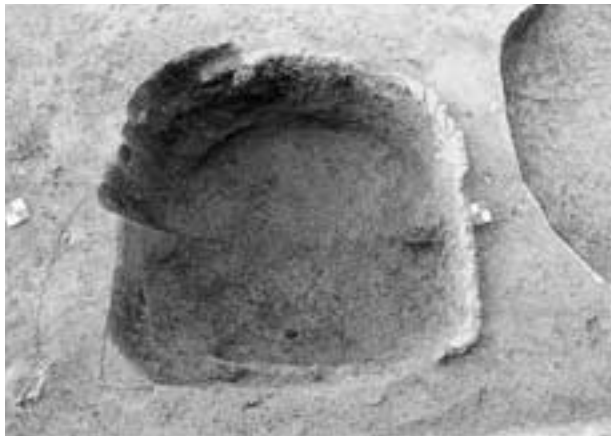
粘土採掘坑群

粘土採掘坑群は10×９m の範囲に密集して構築されていた。底面がかろうじて確認できるものを対象としているため、検出した土坑数を計上するというよりはむしろ群として一括するのが妥当と判断した。底面残存部の平面形態は円形を基調としている。土層断面を観察した結果、一度下方向に掘削した後、横方向に掘り広げていた状況や、ある一定の方向に向けて採掘坑を構築しているわけではないことが判明した。地山は灰白色のサラサラした質感の粘土であり、採掘坑はいずれもこの層まで掘り抜かれていた。

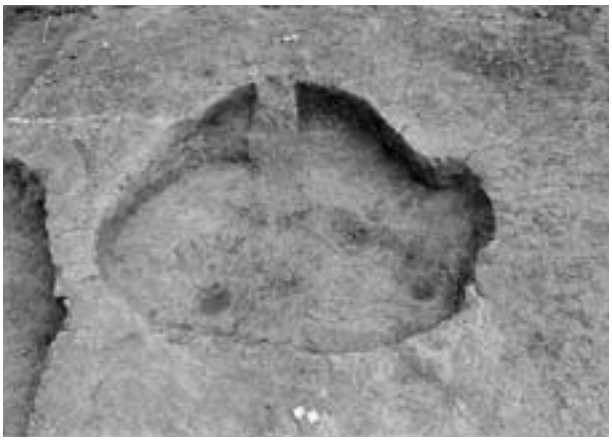
採掘坑群周辺から須恵器・土師器が多量に出土した。斜面裾の谷部に位置していることが主因と考える。時期は田嶋編年Ⅵ期、９世紀後葉が主体と理解している。焼台など窯道具も多数出土した。

（谷内明央）

焼土坑１（東から）



焼土坑２（南から）



焼土坑４（東から）

粘土採掘坑（東から）

調査区全景（東から）

平成17（2005）年度上半期の遺物整理作業

企画部整理課

１班

上半期は、栄町遺跡（七尾市、平成15年度調査）から始まり、北河内マツリダ遺跡（能登町、平成15年度調査）、代田遺跡（志賀町、平成16年度調査）、粟津カンジャバタケ遺跡（珠洲市、平成15・16年度調査）などの作業期間の短い遺跡の整理作業を終え、７月からは加茂遺跡(津幡町、平成11年度調査）の出土品整理作業を行った。加茂遺跡は６班と分担して整理作業を行い、土器ではＢ・Ｃ地区下層、最下層から出土した多量の弥生土器が、主に私達の班の担当であった。記名・分類・接合作業後、有段口縁や「くの字口縁」の甕を中心に壺、器台、高杯、鉢、椀、蓋などの土器の実測を行った。私にとっては久しぶりの弥生土器の実測で、戸惑いながらも様々な遺物に触れることができ、あらためてこの時代の特徴を学ぶことができた。（中條倫子）

１班　瓦製品の実測

２班

新庄遺跡（中能登町、平成16年度調査）、北吉田ノシロタ遺跡（志賀町、平成16年度調査）の整理作業後、金沢城跡（宮守堀跡）（金沢市、平成16年度調査）の実測・トレース作業を行った。金沢城跡は瓦の種類が多く、破片から全体を推測するのがとても困難であった。とくに鉛瓦は、木質部も残っている物が多く、担当の土田さんから金沢城の鉛瓦取付工事時の写真のコピーをもらい、参考にしながら実測を進めた。資料を片手にしての大変な作業であったけれど、金沢城跡を身近に感ずることができた。また森本Ｃ遺跡（宝達志水町、平成16年度調査）では、川跡から出土した珍しい人面墨書土器や、田下駄、木鉢などを実測することができ、有意義であった。（黒田和子）

２班　木鉢の実測

３班

上半期の整理作業は、まず森ガッコウ遺跡（かほく市、平成16年度調査）の記名・分類・接合作業および実測を行った。出土品には、須恵器の坏、蓋、碗、転用硯、墨書土器等、土師器では小型甕、長胴甕、土錘等があり、縄文土器もあった。木器には大型の床板があり、縮小して図化した。他にクレ材や少し小型の板尺があった。この板尺は、一定間隔に異なる削りが何種類かつけられ、用途により長さの使い分けられた様に思われる。その後は専光寺養魚場遺跡（金沢市、平成15年度調査）正友じんとくじま遺跡（宝達志水町、平成16年度調査）など短期間の整理作業が続いた。（池田くみ子）

３班　床板の実測準備

４班　得田氏館跡の接合

４班

四柳白山下遺跡第７次調査（羽咋市、平成12年度調査）の整理作業を行った。遺物の中で一番心に残ったのは、縦横４cm 厚さが1.3cm の丸い顔をした土偶だ。眉だと思っていた刺突は刺青を、少し開いた口には抜歯が表現されていた。抜歯にはどんな意味があるのだろうか。この頭にどんな体がつくのだろうか。いろいろと想像してみるが、どうにも漫画になってしまうのが情けない。その後は、得田氏館跡（志賀町、平成16年度調査）と三室トリＣ遺跡（七尾市、平成16年度調査）ほかと短期間の整理作業が続き、三室トリＣ遺跡ではバラバラになった遺構図をつなぎ合わせてトレースするのに苦労した。そして四柳白山下遺跡第５次調査の分類・接合作業に入った。　（北　寿栄）

５班

上半期では、まず観法寺古墳群（金沢市、平成10～12年度調査）の整理作業を行った。この遺跡では、土器に記名が出来ない程の土師器の小片が多数見られ、分類時も一袋ずつ小箱に入れる作業となり、机一面大量の小箱数となった。同一個体を見つける事も困難な状態だった為、依存度の低い実測遺物となった。その他、砥石や石鏃などの石製品の実測、遺構図のトレース作業を行った。

５班　井戸板の採拓

続いて小島西遺跡（七尾市、平成14～16年度調査）では、木製品の分類・データ作成と実測作業を行った。前年度に比べて平成16年度調査分は、斎串、人形、馬形などの祭祀具が比較的少なく、井戸枠の横桟柱などの大型木製品や、櫂、アカスクイ、農具、杓子などの祭祀具以外の木製品が主となった。未完成の木製品や、何に使用されていたのか用途が解らない製品も多くみられた。井戸枠の板材には、ノコギリ痕が多数残ることから拓本を採る作業となった。土器などとは違い、木製品は水分を多く含んでおり、画仙紙の乾きが悪く、墨がきれいに付かないという困難も生じた。木が腐敗して柔らかくなっている事もあり、取り扱いには十分配慮しなければならなかった。　（中尾望穂）

６班

加茂遺跡（津幡町、平成11年度調査）出土品の整理作業を行った。加茂遺跡は、上層（奈良・平安時代）、下層（弥生後半～終末期）および最下層の遺構も確認されているが、今回整理したのは、その内上層にあたる遺構、その大半は大溝と道路状遺構より出土したもので、須恵器が主であった。ぎっしり詰まった127箱のパンケースにファイトが湧き、大甕、壺、瓶、坏、蓋などの遺存率が比較的高く、分類・接合の作業は順調に進み、実測へと入ることが出来た。実測では胎土、形状等などからの生産窯場の特定方法を教えて貰ったが、これはまだまだ今後の課題である。愛らしい鳥形土器も殆んど無疵で出土している。墨書土器の多いことも特徴であるが、「千」「正月」「真継」「茂」といった比較的読みやすいものから、どうしても読み取れないものまでと苦労した。（戊亥久美子）

６班　須恵器の実測

７班

加茂遺跡（津幡町、平成12年度調査）は、県道宇ノ気津幡線西側（Ⅰ～Ⅲ区）と県道東側水田部分（Ⅳ区）、丘陵部分（マメダン山地区）である。１年間を通しての整理であることから、上半期は遺物の分類、選別、土器の実測を行った。マメダン山地区からは、竪穴住居跡より弥生時代後期の甕、壺、高坏などが多数出土していた。ほぼ完形になるのだが、破片が細かく捜して接合するのに苦労を要した。またⅠ区の第４次調査で発見された古代北陸道に接続する大溝からは、注目を集めた全国初となる牓示札、過所様木簡などが出土していた。それで最初は木製品の実測が多いかと予想したが、木製品は40点位で、石製品の出土の方が目立った。文字が鮮明に書かれた墨書土器や転用硯の実測もあり、加賀郡牓示札に書かれていた言葉を思い出しながら、当時の庶民の生活を思い描くことができた。（正木直子）

７班　木製品の実測

８班

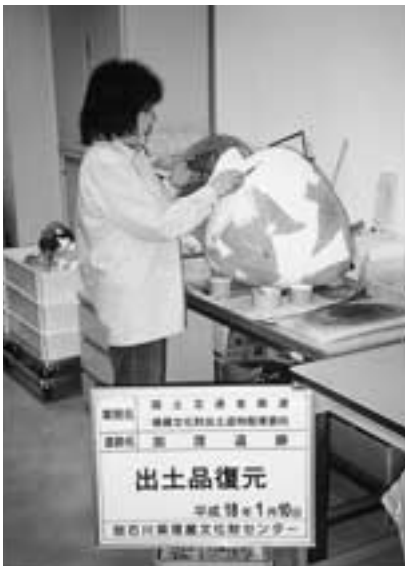
加茂遺跡（津幡町、平成13年度調査）の記名、分類、接合作業および土器の実測作業を行った。年度を通して当遺跡の整理作業であるため、上半期においては、念入りな接合作業が要求された。遺物は、須恵器、土師器、弥生土器を中心とし、特に土師器

８班　弥生土器の接合

の高坏や甕が多量に見られた。しかし、残念なことに全体的に磨耗が激しく、接点が分かり辛いため、形になりにくく大変苦労した。涙形の透かしがある豪華な弥生の装飾器台も、破片が少ないため、図上復元で全体像を推し測るにとどまった。他に興味深かったものとして、縄文土器の外面に網代状の物を押し当てたと思われる破片が一点出土していた。　（下村　薫）

復元

平成17年度上半期の土器の復元・修復作業は、四柳白山下遺跡はじめ十数遺跡、約200点の土器復元、補強作業を行った。加茂遺跡は、調査年度によって違いがあり、平成11年度は長頸壺、双耳瓶、大甕などの須恵器が多くみられ、土師器の壺や甕などもあった。平成12・13年度は土師器が多くあった。遺存の度合が低い土器では、まず石膏で補修して、実測図を見ながら完形に近い土器へと仕上げる。なかには長年の土圧で、押しつぶされ、もろくなった須恵器も出土していることから、接合すると多少かみ合わないこともあった。遺存度が低い土器を見ると、元はどんな形をしていたのか疑問に思う。　（小間博文）



復元班　須恵器大甕の復元

洗浄

平成17年度上半期の洗浄作業では、前年度調査の小島西遺跡、中川Ａ遺跡他２遺跡、加茂遺跡を終えてから、今年度の二ッ梨グミノキバラ遺跡を洗った。小島西遺跡では土器の量がとても多く、それを半年間かけて洗ったが、今までこのような事が無かったので、とても大変だった。中川Ａ遺跡他２遺跡は、粘土質の土が須恵器にかなり付いていて、竹串を使って土を取り除く洗浄となった。墨書土器が多く出土しており、数字の墨書なども有り珍しかった。また、加茂遺跡は、縄文土器の量が多く、柔らかくてくずれやすい上に、時おり粘土質の土が付くなど、洗浄の作業は大変なものだった。そして、二ッ梨グミノキバラ遺跡の土器については、取れにくい黄色の粘土が付いた須恵器が多く、大きな破片については、かなりの力を入れて洗浄し、また細かい須恵器の破片はハブラシを併用しての洗浄であった。あまりにも細かい物の洗浄は、まるで指先を磨くようだった。このように、上半期は４遺跡の洗浄を行なった。

（竹内秋子）

洗浄　洗浄室の風景

環日本海交流史研究集会の記録

「中世日本海域の土器・陶磁器流通－甕・壺・擂鉢を中心に－」

所長　谷内尾　晋司

はじめに

石川県はもとより、日本海沿海域各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次でおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、基礎的な調査研究を進めるとともに、沿海域各地の研究者にご参集いただき、年１回「交流史研究集会」を開催しているところであります。

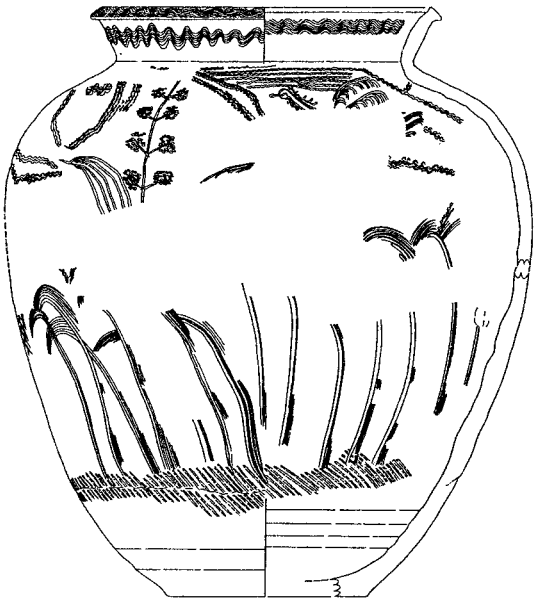
平成17年度は「中世日本海域の土器・陶磁器流通」をテーマに開催いたしました。

中世になると経済活動の活発化と流通ネットワークの発達により、国内外で生産された様々な商品が各地で消費される時代を迎えます。中でも今回中心テーマとして取り上げました甕、壺、擂鉢は、日常物資として最も普遍的に消費された焼き物であり、東海、瀬戸内、そして北陸地方などを生産拠点に各地に流通圏を確立していたことが、集落や墳墓遺跡の発掘調査等で明らかにされつつあります。能登の珠洲焼、福井の越前焼は北陸の代表的な中世陶器として、主に北東日本海沿岸地域を中心に広く流通したことが知られ、窯跡など生産遺跡の調査も積極的に進められております。

このような状況を踏まえ、今回の研究集会では、生産と消費の視点から、日本海沿岸域における中世土器・陶磁器の技術系譜・伝播および流通システムについて焦点を当てました。北部九州地方については佐賀県の徳永貞紹氏、山陰地方については島根県の榊原博英氏、北陸地方については福井県の岩田　隆氏、当センターの岩瀬由美氏、珠洲市の大安尚寿氏、富山県の宮田進一氏、新潟県の鶴巻康志氏、東北地方については山形県の山口博之氏にお願いし、各地域の実態や状況をご報告いただき、研究討議をおこないました。

各地域における広域窯、地域窯の消長、技術的系譜やその伝播経路、地域社会との関わり方、生産地と消費地に集散地や輸送手段を含めた広域流通システムのあり方など、多岐にわたる問題や課題について討議され、相互理解を深めるとともに共通認識が得られたことは大変有意義でありました。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年１回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。皆様のご協力をお願いいたします。



三引遺跡出土の珠洲焼刻画文（飛禽草樹文）壺

北部九州日本海域の中世土器・陶磁器－甕（かめ）・壺（つぼ）・鉢（はち）を中心に－

徳永　貞紹（佐賀県教育庁）

北部九州の日本海域は、関門海峡から平戸島までの響灘・玄界灘一帯と壱岐・対馬を含む朝鮮海峡までの範囲で捉えられる。大陸との西の接点という地理的特質は、人や物が東アジア規模で動いた中世にあって殊に重要な意味を持った。

本地域は、主に煮炊具の様相と在地系土器生産の状況から東半部の豊前北部・筑前と西半部の肥前北部・壱岐・対馬に二分することができる。東半部・西半部とも貿易陶磁の普及率が高いという点で一致するが、西半部は土器生産が低調で搬入品に依存するという独自性が見られる。

北部九州における中世前期～近世初期の貯蔵具（甕・壺）と調理具（捏鉢・擂鉢）

中世前期の貯蔵具は、中国陶器を主体とし、朝鮮無釉陶器、知多（常滑）窯陶器、樺番城（かばぼんじょう）・亀山窯系・東播諸窯の須恵器系陶器などが少量ある。博多・大宰府では豊富な種類の中国陶器が多数遺されており、他地域でほとんど出土しない大型甕・壺の存在が特記される。調理具（捏鉢・擂鉢）も中国陶器が定量用いられるが、12世紀後半以降は東播諸窯捏鉢の搬入量が増加し、調理具の中心となる。

中世後期の貯蔵具は、備前窯陶器が急増し、中国陶器・知多窯陶器に取って替わる。調理具は、擂鉢が主体となり、備前窯擂鉢と在地系・防長系瓦質擂鉢が急増する。備前窯陶器の増加は備前Ⅳ期に顕著であり、知多窯甕・東播諸窯捏鉢から備前窯甕・擂鉢への転換という汎西日本的傾向と一致する。

近世初期（16世紀末～17世紀前半）には肥前陶器（唐津（からつ））・肥前磁器（伊万里（いまり））の生産開始と大量流通によって食器様式が大きく変化し、土器・陶磁器流通の上でも画期を成す。貯蔵具・調理具はいずれも急激に肥前陶器へ移行する。

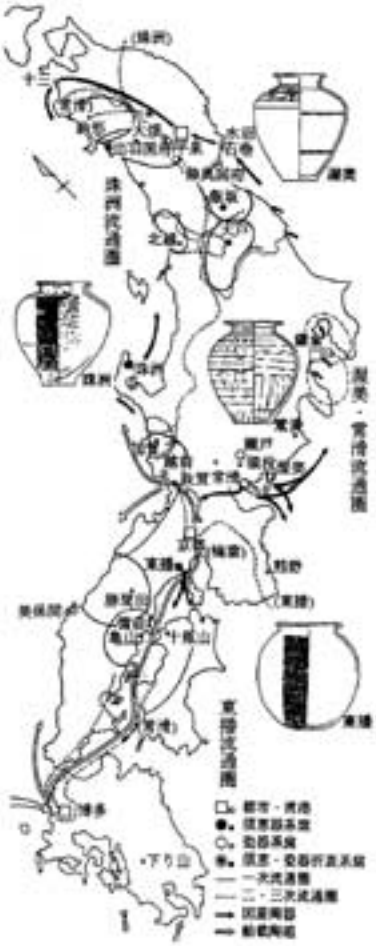
中世から近世初期の日本海流通－北部九州と北陸との関係－

中世前期に北東日本海域に広く流通した珠洲窯の製品は、現在までの知見では北部九州に達しておらず、逆に九州地域で生産された広域流通品である滑石製石鍋は北陸地域にほとんど広がっていない。出土品としての食器に見る限り、中世前期における北部九州は、北陸との関係が希薄であり、むしろ瀬戸内海から畿内までの流通圏と太く繋がっている。

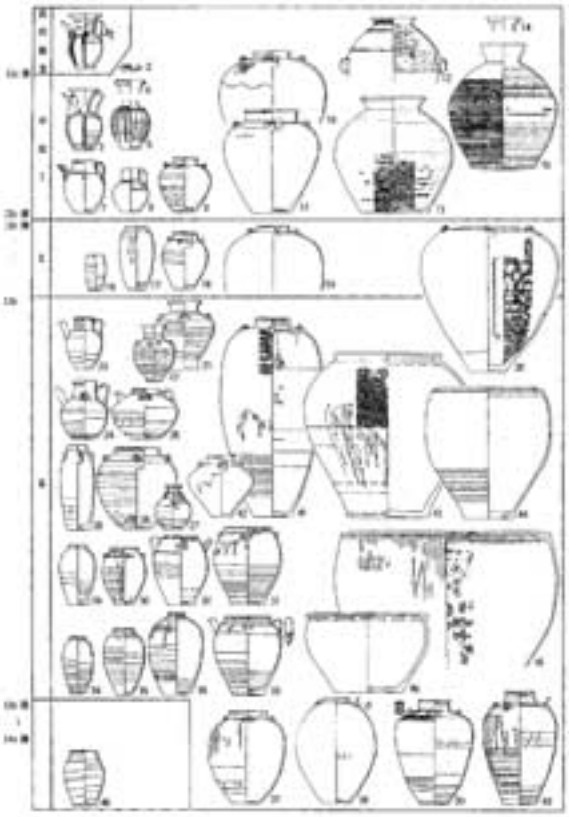
しかし、中世後期には日本海域の各地を繋ぐ広域な物資流通網・交通網が形成されたようで、14世紀後半～15世紀前半に若狭日引石製の石塔が日本海から東シナ海沿岸の主要港湾を中心に、北は十三湊から南は坊津まで広域に分布している。また、豊前小倉城跡から出土した越前窯擂鉢は、人の移動に伴うか他の物資に付随するかしてもたらされた副次的搬入品として位置づけられ、北部九州と北陸との隔地間流通を裏付けるものである。

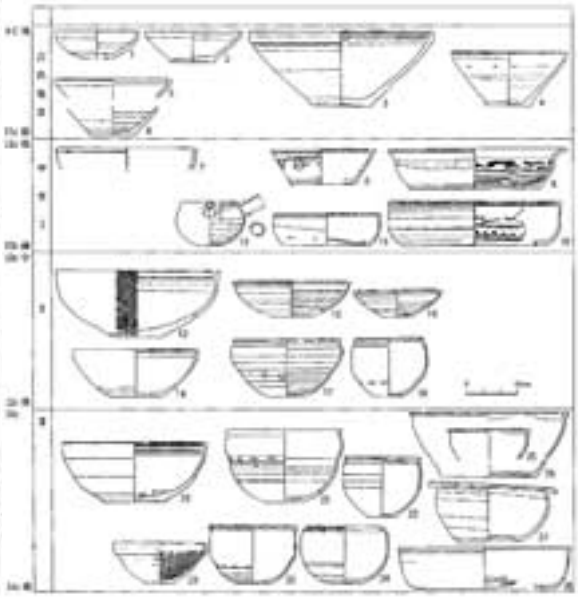
近世初期に肥前陶器（唐津）、続いて肥前磁器（伊万里）の生産が開始されると、その製品はたちまち全国的に広がり、とりわけ日本海沿岸域では安定した流通状況をみせる。このような日本海域の広域流通網は、中世後期において萌芽していたと言えるが、中世末までは北部九州との流通・交通を示す史・資料が、山陰からせいぜい若狭・越前あたりまでの範囲でしか確認できず、加賀・能登以北と北部九州との行き来は近世初期の豊臣政権による全国統一以降のことであろう。

中世から近世初期の主な港湾・都市（北部九州）



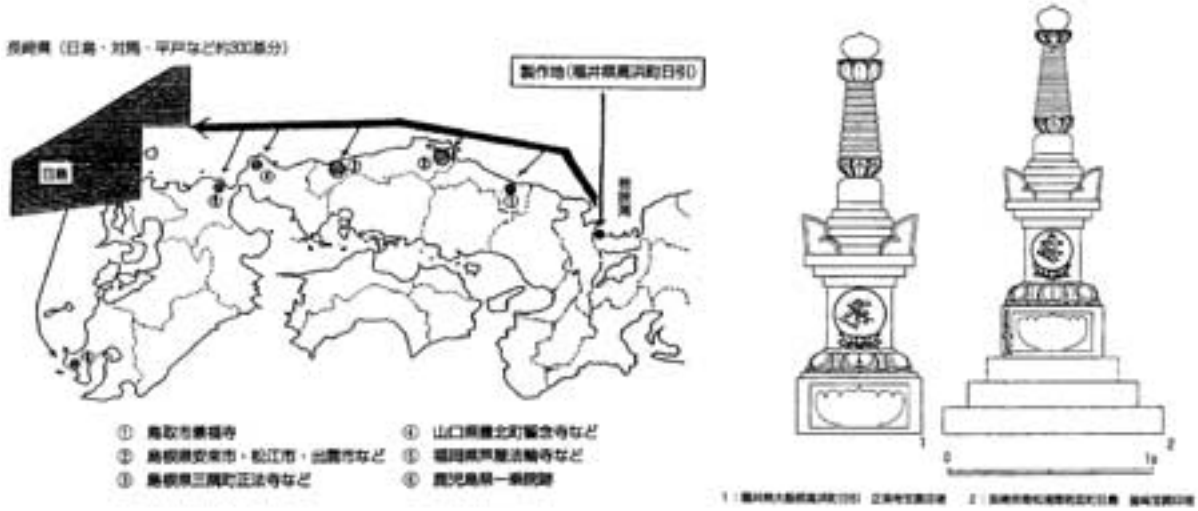
12世紀中葉～13世紀前半の都市と陶磁器流通圏
（吉岡康暢　1997「新しい交易体系の成立」
『考古学による日本歴史９　交易と交通』）





北部九州出土貿易陶磁甕・壺・鉢の編年
（山本信夫・山村信榮　1997「中世食器の地域性　10　九州・南西諸島」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集）

中国陶器大型甕・壺の分布
（足立拓朗　2001「中世前期の大型褐釉陶器の流通経路」『青山考古』第18号）



西日本における日引石製石塔の分布、若狭と肥前の日引石製石塔
（大石一久　2001「日引石塔に関する一考察」『日引』第１号）

小倉城跡出土の越前窯擂鉢
（北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1997『小倉城跡２』）

山陰における中世の土器・陶磁器流通－甕・壺・擂鉢を中心に－

榊原　博英（島根県浜田市教育委員会）

山陰地域は東から因幡（鳥取県西部）・伯耆（鳥取県西部）・出雲、隠岐（島根県東部）・石見（島根県西部）に分けられている。近年、山陰では中世須恵器や貿易陶磁器の集成が行われているが、遺跡内の中世土器の産地・器種別の組成が詳細に示されたものはあまりない。

中世前期は東播系須恵器がほぼ全域で出土し、常滑焼などが少量みられる。14世紀中頃からは備前焼が多くなる。西の石見では博多方面からの中国陶器が少量みられる。山陰の在地系須恵器には岡山の亀山・勝間田系須恵器が強く影響を与えているが、亀山・勝間田の製品自体は因幡・伯耆に出土例が多い。越前焼は常滑焼などと十分に区別されていないが、中世後期には因幡・伯耆・出雲まで確認されている。

東播系須恵器は擂鉢を中心に山陰全体に多く出土例があり、甕も出土している。沿岸部の平野の遺跡にとどまらず、山間部まで幅広く分布が見られる。

備前焼は間壁編年Ⅰ～Ⅱ期（12世紀末～13世紀代）は鳥取県東部（因幡）に少量みられ、Ⅲ期（13世紀代後半～14世紀後半）には島根県でも出土する。間壁編年Ⅳ期（14世紀末～16世紀初頭）には出土量・遺跡密度が増え、特に擂鉢が目立つ。間壁編年Ⅴ期（16世紀初めから17世紀初め）にはⅣ期に続き、城館遺跡を中心に壺・大甕・擂鉢に加え、さまざまな器種が流通するようになる。Ⅵ期（17世紀前半頃）にはⅤ期に比べ量がやや減るが、富田川河床遺跡や石見銀山遺跡など都市遺跡では増えている。

常滑焼は常滑編年２～４型式（12世紀中葉～後葉）の古い段階の甕が島根で少量見られる。その後の時期も出土量は少ないが、山陰全体に出土が見られる。

越前焼は中世後期以降に因幡・伯耆・出雲で鉢、甕が少量出土しているが、石見では確認されていない。常滑焼と区別されず瓷器系と表現される場合が多い。出雲市青木遺跡では多くの越前焼（常滑・産地不明も多い）が出土している。

貿易陶磁器の壺（耳壺類）は経塚や集落遺跡で比較的出土例がある。甕・鉢は量的には少ないが石見を中心に点的に沿岸部の流通拠点や国府（府中）で出土する。

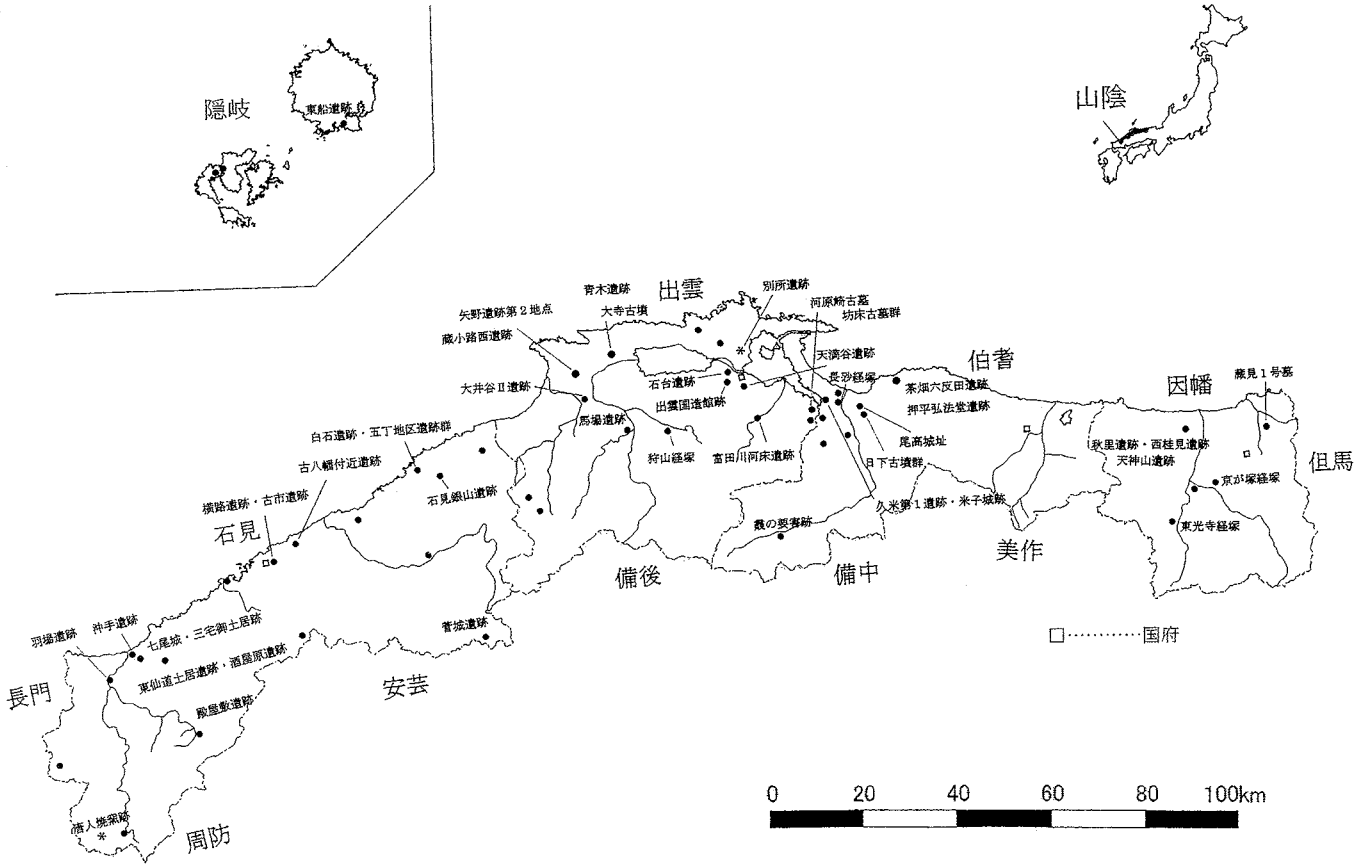
亀山・勝間田系須恵器は甕を中心に因幡・伯耆・出雲ではやや多く出土し、石見は少ない。地理的に近いためか、鳥取では出土例が目立つ。

在地系土器は松江市別所遺跡では焼け損じたような軟質のものや二次焼成をうけたものが多く出土し、近くで亀山・勝間田系の影響がある土器を焼いた可能性がある。器種は鍋・鉢・甕がみられ、軟質で外面格子叩き、内面は同心円叩きのちナデやハケ調整されるものが多い。在地系須恵器を中心とした胎土分析も行われている。

なお、山陰の西側、防長地域では山口市陶の（仮称）動物センター窯跡などで備前焼間壁編年Ⅲ期前半（13世紀後半～14世紀前半）に類似する壺・擂鉢が焼かれていた可能性がある。また、萩市大井の上七重窯跡では常滑焼中野編年６b～７期（13世紀第４四半期～14世紀前半）に類似する甕が焼かれている。

北陸の様相と対比すると、東播系須恵器・備前焼の出土量など大きく異なっているが、越前焼や日引石製石塔など北陸方面からの流通がわずかにみられる。山陰はおおまかに京都・小浜あたりから西への流通が多い「因幡・伯耆・出雲」と西・東からの流通がみられる「石見・隠岐」に分けられる。

参考文献
伊藤晃・乗岡実・石井啓・重根弘和・上西高登2004「中世陶器の物流－備前焼を中心にして－」
『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』同大会実行委員会
岩崎仁志2000「防長地域の中世陶器窯」『陶塤』第13号　財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター
木原光2005「益田市沖手遺跡と出土陶磁器」『日本貿易陶磁研究集会第26回研究集会資料集』
山陰中世土器検討会2003『中世須恵器の生産と流通－山陰地方を中心に－』
島根県教育委員会2004『青木遺跡（中近世編）』
（財）鳥取県教育文化財団1998『米子城跡21遺跡』
（財）鳥取県教育文化財団2002『鳥取県西伯郡名和町茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡、大山町富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』
中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
永原慶二編1995『常滑焼と中世社会』小学館
日本貿易陶磁研究会2002『中世後期における貿易陶磁器の様相』
乗岡実2005「備前焼の編年と流通」『島根県埋蔵文化財調査センター専門研修資料』
間壁忠彦1991『備前焼』ニューサイエンス社
松江考古学談話会1992『松江考古』第８号
松江市教育委員会1988『薦沢Ａ遺跡　薦沢Ｂ遺跡　別所遺跡』



甕・壺・擂鉢の組成

	古市遺跡(石見)			横路遺跡(石見) (土器土地区、原井ヶ市地区の合計)		
東播	9	9.9%	鉢	5	10.6%	鉢
常滑	12	13.2%	口縁2			
備前	18	19.8%	擂鉢Ⅳ期5、Ⅴ期7	10	21.3%	擂鉢Ⅲ期1、Ⅳ期2
亀山	8	8.8%	同一個体？			
中国陶器鉢	15	16.5%	鉢口縁9、破片8、	2	4.3%	
中国陶器甕	1	1.1%		9	19.1%	同一個体？
土師質	6	6.6%	擂鉢など	4	8.5%	擂鉢など
瓦質	14	15.4%	擂鉢、鍋など	11	23.4%	擂鉢、鍋など
滑石製鍋	8	8.8%	長崎産？	5	10.6%	長崎産？
瀬戸				1	2.1%	卸皿
計	91	100.0%		47	100.0%	

	大井谷Ⅱ遺跡(出雲・寺院跡)			矢野遺跡第2地点(出雲)		
土師質摺鉢	12	7.3%		27	11.0%	
土師質鍋	2	1.2%				
瀬戸美濃	29	17.7%	燭台・椀・瓶など	3	1.2%	皿
瓦質鉢類	23	14.0%		38	15.5%	
瓦質鍋	34	20.7%		15	6.1%	
備前	14	8.5%	擂鉢12、甕2	4	1.6%	擂鉢3、壺1
瓷器系鉢	15	9.1%		1	0.4%	
瓷器系甕	21	12.8%		150	61.2%	
亀山系	11	6.7%	甕			
東播	3	1.8%	鉢	7	2.9%	鉢
計	164	100.0%		245	100.0%	

	喜時雨遺跡(石見)			殿屋敷遺跡(石見)		
土師質・鍋釜	142	24.0%		16	34.0%	
土師器・鉢	48	8.1%				
瓦質鍋	275	46.5%		19	40.4%	
瓦質鉢	79	13.3%				
常滑系	8	1.4%		5	10.6%	甕
瀬戸美濃	2	0.3%	天目など	1	2.1%	鉢
東播	15	2.5%	擂鉢			
備前	23	3.9%		6	12.8%	擂鉢
計	592	100.0%		47	100.0%	

	富田城　本丸・二ノ丸・三ノ丸(出雲)			浦の谷Ⅱ遺跡・外浜遺跡(隠岐)		
備前	2,200	98.4%	甕、壺、徳利等			
瀬戸美濃	23	1.0%	天目、瓶など	3	7.3%	皿など
越前	7	0.3%				
常滑系	2	0.1%		20	48.8%	
瓦質鍋・鉢	2	0.1%	鍋	11	26.8%	鉢
瓷器系	2	0.1%				
土師質鉢				3	7.3%	
東播				4	9.8%	鉢
計	2,236	100.0%		41	100.0%	

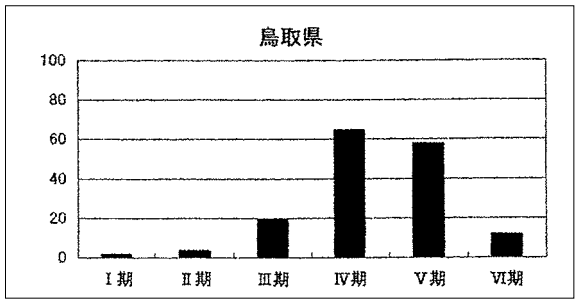
	七尾城(石見)			三宅御土居跡(石見)		
備前	32	12.7%		83	11.6%	
瀬戸美濃	12	4.8%	天目、瓶子など	7	1.0%	卸皿など
常滑		0.0%		17	2.4%	
瓦質土器	52	20.6%		360	50.3%	
土師質鉢・鍋	156	61.9%		215	30.0%	
東播				33	4.6%	鉢
中国陶器鉢				1	0.1%	
計	252	100.0%		716	100.0%	

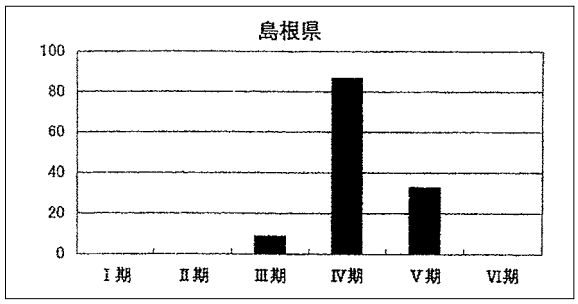
	米子城跡21遺跡(伯耆)			茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡(伯耆)		
土師質土鍋	135	9.4%				
土師器・甕	1,229	85.3%				
瀬戸美濃	3	0.2%				
常滑	1	0.1%		13	16.5%	
土師器・鉢	34	2.4%				
信楽	1	0.1%				
越前	1	0.1%		5	6.3%	
備前	11	0.8%		17	21.5%	
焼締陶器	17	1.2%				
土師器・瓦質	9	0.6%				
勝間田系				44	55.7%	
計	1,441	100.0%		79	100.0%	

	沖手遺跡(石見)		
土師質・鍋	30	4.7%	足鍋1
土師器・鉢	63	9.8%	擂鉢46、鉢17
瓦質鍋	82	12.7%	足鍋15
瓦質鉢	158	24.5%	鉢69、擂鉢89
常滑系	19	2.9%	甕16、壺3
瀬戸美濃	42	6.5%	椀、天目など
東播	15	2.3%	鉢
備前	105	16.3%	擂鉢42、壺29など
瓷器系	53	8.2%	擂鉢12、甕10など
中世須恵器	65	10.1%	鉢13、甕25など
石鍋	13	2.0%	
計	645	100.0%	

各遺跡の報告書、日本貿易陶磁研究会2002より榊原作成
甕・壺・擂鉢のみを集計し、分類の表現は統一していない。

備前焼出土数





伊藤晃ほか2004・乗岡2005から

越前焼甕・壺・鉢（擂鉢）の生産・流通・消費

岩田　隆（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

１．越前焼の系譜と消長

越前焼は12世紀末ごろ東海地方からの瓷器系の技術を導入して成立する。当初は須恵器を生産していた天王川の東部の丘陵に越前焼の窯が営まれたが、鎌倉前期にはより耐火度の高い粘土を求めて天王川西部の丘陵の谷に越前焼の窯が築かれ始め、鎌倉中期には西部丘陵全面に展開するようになった。室町時代になると窯数が減少し始め、戦国時代後半から窯が大型化するとともに窯数をさらに減少させ、平等の谷周辺に収束する傾向が強まる。越前古窯址の範囲と分布については、丹生郡旧織田町、宮崎村の天王川を挟んだ丘陵に東西３㎞、南北６㎞の広い範囲に約200基が確認されている。

２．流通状況

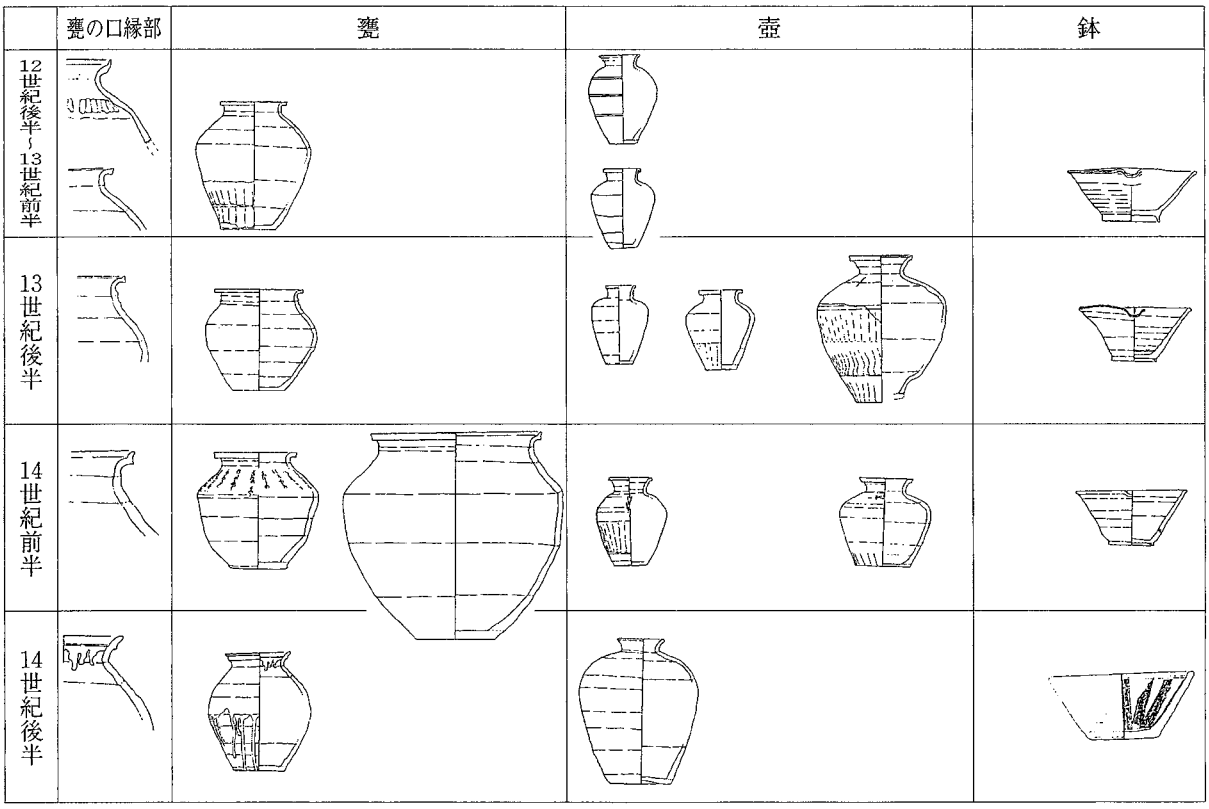
越前国内における12世紀後半の越前焼の商圏は、敦賀市深山寺経塚群に越前焼がみられないように南は木ノ芽峠を超えることは出来ず、北へのそれはおそらく越前国内にとどまるであろう。逆に江波経塚群のように越前焼生産地近くまで、常滑焼や珠洲焼が流入してきている。13世に入っても前半まではこの状況が大きく変ることはなかった。越前焼の生産地から20km と離れていない鯖江南屋敷中世墳墓群でも加賀焼が出土している。しかし、後半にはいると加賀南部の三木だいもん遺跡では越前焼の鉢が出土しており、すこしずつ生産も上がっていたらしくその販路を拡大していった。14世紀になると平泉寺など九頭竜川以北でもそのほとんどが越前焼で、加賀焼・珠洲焼が僅かに残るだけとなり、15世紀には全て越前焼となる。

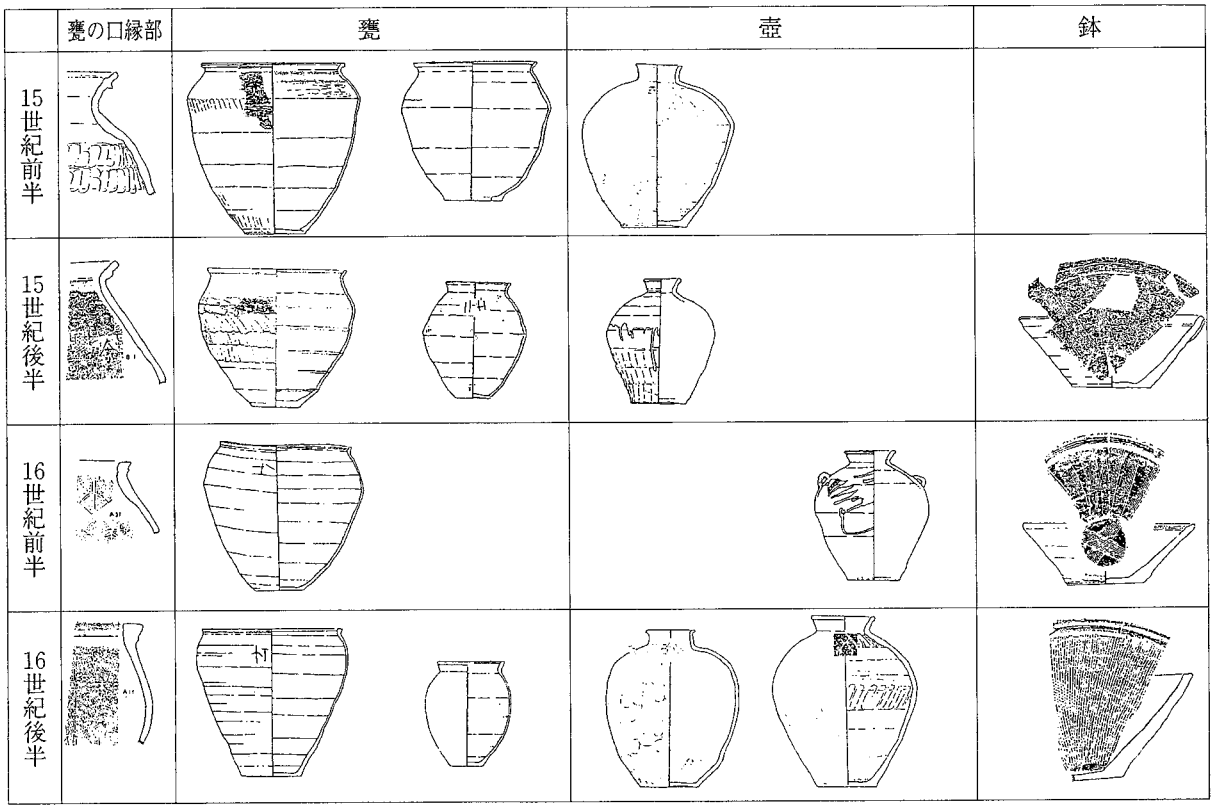
北部日本海側では14世紀半ばには北海道志海苔館の銭亀遺跡のように北海道にまで越前焼がみられるようになる。十三湊でも越前焼が出土している。この時期の越前焼と珠洲焼との比は１：４で、鉢類にいたってはそのほとんどが珠洲焼である。同じ湊町でも越前に近い普正寺遺跡の場合は、越前焼と珠洲焼がほぼ拮抗している。15世紀半ば以降、能登半島でも越前焼が流入するようになる。外浦に位置する道下元町遺跡では15%以上越前焼が占めるようになり、内浦にある西川島遺跡群でも15世紀後半には越前焼が搬入されているようである。普正寺遺跡では珠洲焼と越前焼の出土量が逆転し、甕類は珠洲焼が激減する。珠洲焼は15世紀中葉から甕・壺の生産を減少させ鉢類に特化していく。これに対して越前焼は生産地を平等谷に集中させるとともに窯を大型化し、甕・壺・鉢という基本三種は維持しながら、それぞれ形のバラエティーとサイズを増加させ、需要に応えていった。

16世紀になると北部日本海側では越前焼は珠洲焼に完全に取って代わる。生産におけるその象徴が岳の谷古窯跡群である。全長30m 近い大窯を計画的に築造し、製品や燃料を１箇所に集中して生産の効率を上げていったものと推定される。それはおそらく劔神社の指導のもと惣村規模で共同窯を運営し、その流通には敦賀あたりの新興回船業者が介在していたと想定される。こうした新しい結びつきこそ越前焼が15世紀後半以降その販路を急速に拡大し、16世紀には珠洲焼を駆逐して北東日本海側を一円的に制覇した原動力であったと推定されている。

西日本側の越前焼の流通状況については、若狭国では田烏元山谷経塚群や山田中世墓群に見られるように13世紀後半以降越前焼の商圏に入っているらしいが、常滑焼や丹波焼、東播系の製品も流入してきている。14世紀には由良川河口出土と伝えられる「嘉元四年」（1306）の甕が著名で、この付近までは越前焼の商圏に含めることが出来るよう。

図1　越前焼　編年表





（「越前名陶展」の編年表を基に一乗谷出土遺物に置き換え）

第１表　陸奥国　十三湊遺跡

	14C	14C 後半～15C 前葉	合計
越前　甕・壺	215	359	574
鉢	2	1	3
合計	217	360	577
珠洲　甕・壺	447	257	704
鉢	302	345	647
合計	749	602	1351

榊原繁高　2004　「十三湊の都市構造と変遷」より

第２表　越中国　梅原胡摩堂遺跡

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ		合計
	12C 後半	13C 前半	13C 後半	14C	15C 前半	15C 後半	16C 前半	16C 後半	
越前　甕				2	1		9	7	19
壺				2			1	1	4
鉢								3	3
合計				4	1		10	11	26
珠洲　甕	21	10	22	42	41	10			146
壺	16	5	16	11	2				50
鉢	45	27	8	29	41	7			157
合計	82	42	46	82	84	17			353

「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告」遺物編から作成

第３表　加賀国　普正寺遺跡

	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ・Ⅵ	合計
	13C	14C	15C	
越前　甕・壺	1	11	12	24
鉢	2	3	7	12
合計	3	14	19	36
珠洲　甕・壺	1	8	1	10
鉢	2	4	13	19
合計	3	12	14	29
加賀	4	2	0	6

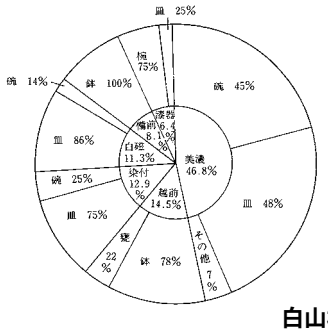
吉岡康暢　1989　「日本海域の土器・陶磁」（中世編）より

第４表　加賀国　白江梯川遺跡・三木だいもん遺跡

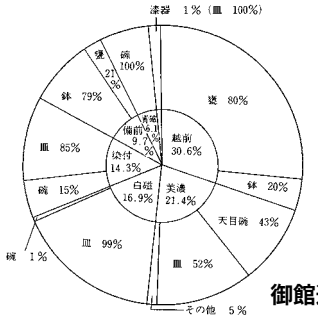
	三木だいもん遺跡	白江梯川遺跡	合計
	12C～13C	14C～15C	
越前　甕	5	22	27
壺	1	6	7
鉢	13	49	62
合計	19	77	96
加賀　甕	72	23	95
壺	3	8	11
鉢	15	9	24
合計	90	40	130
珠洲　甕	36	14	50
壺	31	1	32
鉢	7	24	31
合計	74	39	113

藤田邦雄、宮下幸夫1989
「北陸における越前陶の諸問題」より

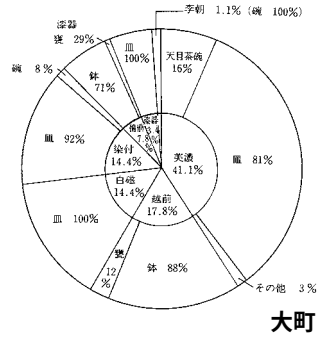
第５表　能登国　西川島遺跡群（16世紀）



白山橋遺跡



御館遺跡



大町・縄手遺跡

珠洲窯の概要

大安　尚寿（珠洲市教育委員会）

珠洲窯は、基本的な製作技法（叩き成形、櫛目施文、還元焔焼成、窯形式など）は、須恵器系（東播系窯）の技法をとっているが、押印による装飾や器種・器形に、瓷器系（渥美・常滑窯）の影響も色濃い。創業に際して、その分布域と成立時期が若山荘にほぼ重なることから、荘内産業振興を意図した領主の関与があったと目されている。窯跡は、これまでに４支群12小群約40基が発見されている。

・三崎支群　寺家クロバタケ窯（三崎町寺家）　大屋ヒヤマ窯（三崎町大屋）

・馬縄（まつなぎ）支群　馬縄カメガタン窯（馬縄町）

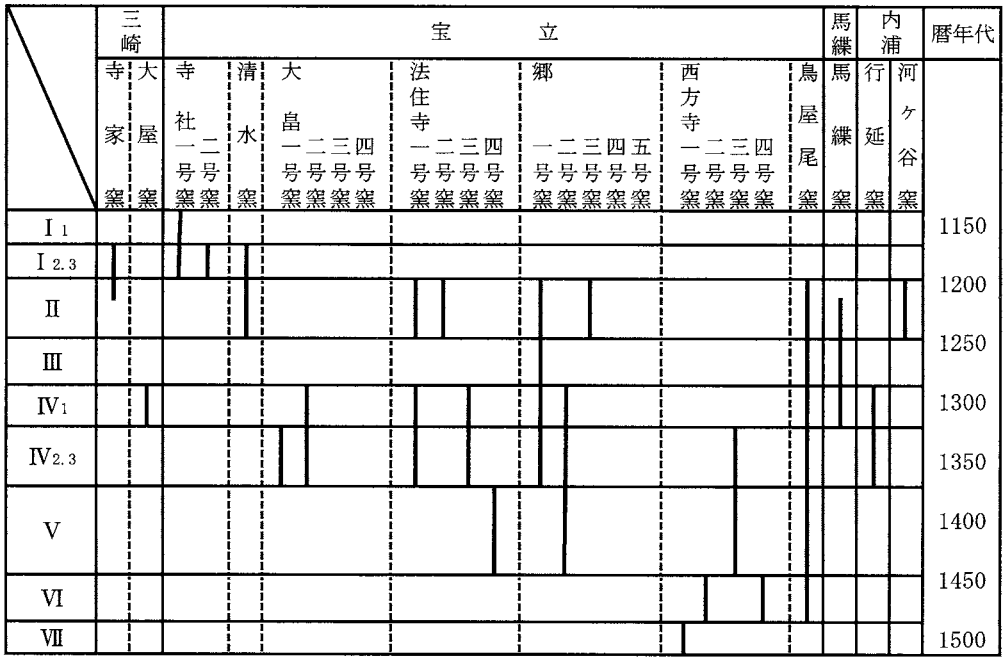
・宝立（ほうりゅう）支群　寺社カメワリ坂窯（上戸町寺社）　清水（きよみず）窯（上戸町寺社小字清水）　大畠（おばたけ）窯（宝立町春日野小字大畠）　法住寺窯（宝立町春日野小字法住寺）　郷（ごう）カマノマエ窯（宝立町柏原小字郷）　西方寺窯（宝立町柏原小字西方寺）　鳥屋尾（とやお）窯（宝立町柏原小字鳥屋尾）

・内浦支群　行延（ゆきのべ）窯（鳳珠郡能登町行延）　河ヶ谷（かがたん）ミソメ窯（鳳珠郡能登町河ヶ谷）

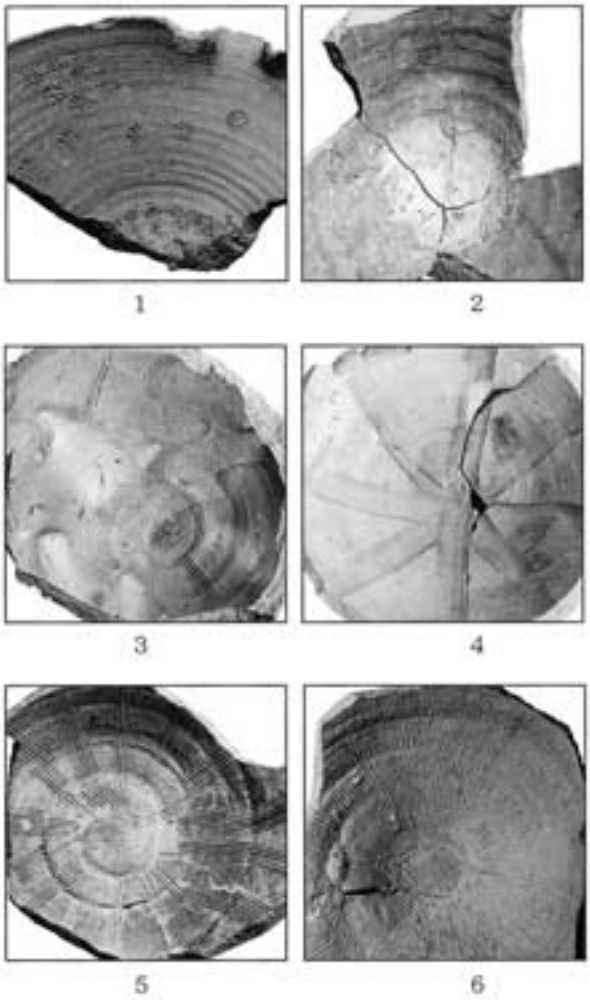
窯本体の調査例は、寺家１～５号、大畠１・２号、法住寺３号、西方寺１号の９基のみだが、そこから知られた特徴は、温度ムラを防ぐため全長を10m程度に抑制し（Ⅶ期の西方寺１号窯は例外とする）、かわりに幅を徐々に拡大した、ずん胴型の窯体であった。また幅の拡大とともに器種の配列を工夫し甕を火前に、鉢を窯尻に置くことで、歩留まりの向上を図っている。この結果、Ⅰ期の寺家３号窯では、甕16・壺11・鉢13の計40個を窯詰めしたとみられるが、Ⅳ$_3$期の大畠２号窯では、甕20・壺20・鉢70の計110個に増加したと復元された。これに歩留まりの向上を勘案すれば、１回の焼成で得られる製品は３倍以上に増加したと考えられる。13世紀を通して拡大を続け、14世紀に最大の流通圏を確保するに至った。しかしⅤ期には、甕の減産と越前窯を意識した研磨壺の増加に、衰退の兆候があらわれる。15世紀後半には、鉢への生産集約と粗造化が進行し、やがて廃窯へと至る。

珠洲窯は、吉岡康暢氏の精力的な研究によってその概要が明らかにされてきた。しかしまだ多くの問題が山積し、その実像に迫るには極めて困難な状況にある。ひとつに、まず発見されている窯数と流通量の不釣合いがある。今後、窯跡が発見されたとしても100基程度と見込まれ、他の広域窯に比べてあまりに少ない。灰原出土陶片の編年観から各窯跡の使用年限を計算すると、１基あたり25年以上と類をみない長い耐用年数となる。それに比べて少ない灰原の堆積量から、焼成回数がそれほど多くなく（年２回程度）、長期使用が可能だったと見ることもできる。製品の形状、特に編年の指標となる口縁形態がバラエティに富むという傾向が、生産・技術伝承が、専門化・組織化されていなかったことを示唆すると考えれば、長期使用とも符合するが、絶対的な生産量の問題が残る。瓷器系の様式への強い志向を見せながら、なぜ須恵器系の製作技術を採用したのかという理由も、年間焼成回数の少なさから、技術習得の容易さ、失敗の少なさからという面があったとも考えられる。だが、東播系窯から直接的な技術伝習によって、そうした珠洲独特の様式を創業初期からなし得たとも考えにくい。

最後に、すり鉢の問題にふれておきたい。中世陶器の基本三種である片口鉢は、珠洲窯のオリジナルでないことは言うまでもないが、卸し目施入に関しては他産地に先行し普及すると考えられている。櫛目が須恵器の伝統的施文法であるというベースはあるものの、初期の波状文は中国磁器の劃花文の影響が予想される。この櫛目文と印花文による装飾から定型的な卸し目へという変遷は、非実用から実用へという通常とは逆の過程をたどったことになり、日本海側ですり鉢が急速に普及した理由とあわせて、なお検討の余地があろう。

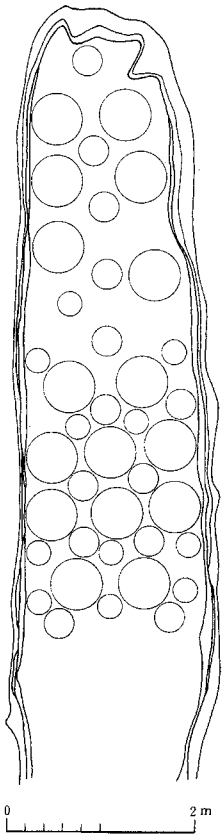


珠洲窯跡群構成表

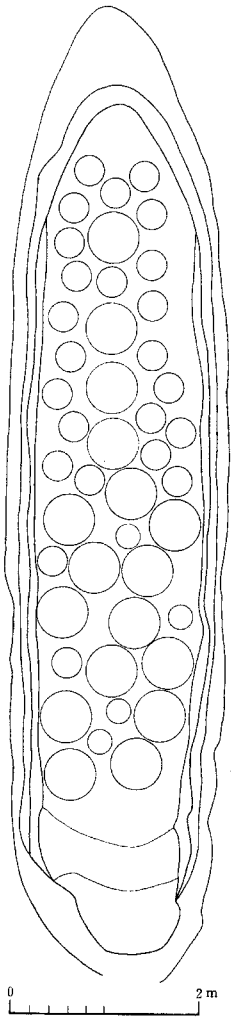


すり鉢施文変遷
1～4．法住寺２号窯　5．馬繰窯　6．西方寺３号窯

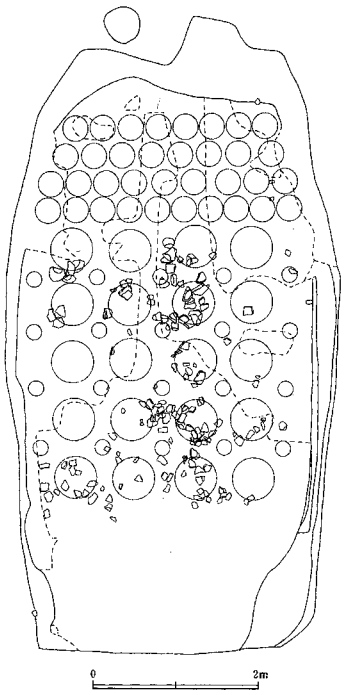
珠洲窯跡分布図
※珠洲郡内浦町、鳳至郡柳田村、能都町は、平成17年３月１日合併し鳳珠郡能登町となっている。



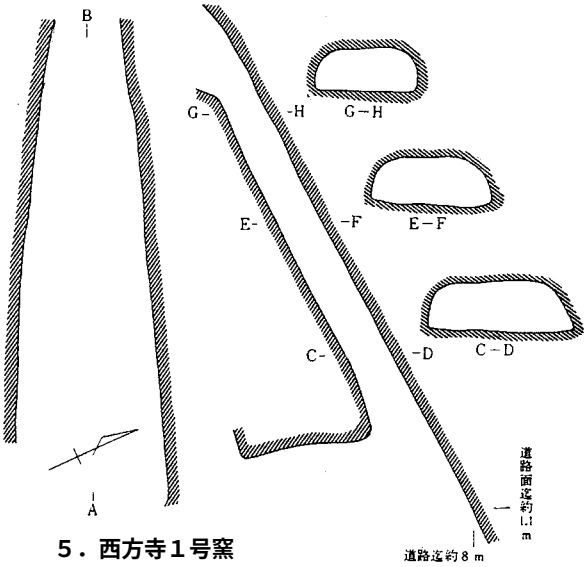
1．寺家クロバタケ３号窯



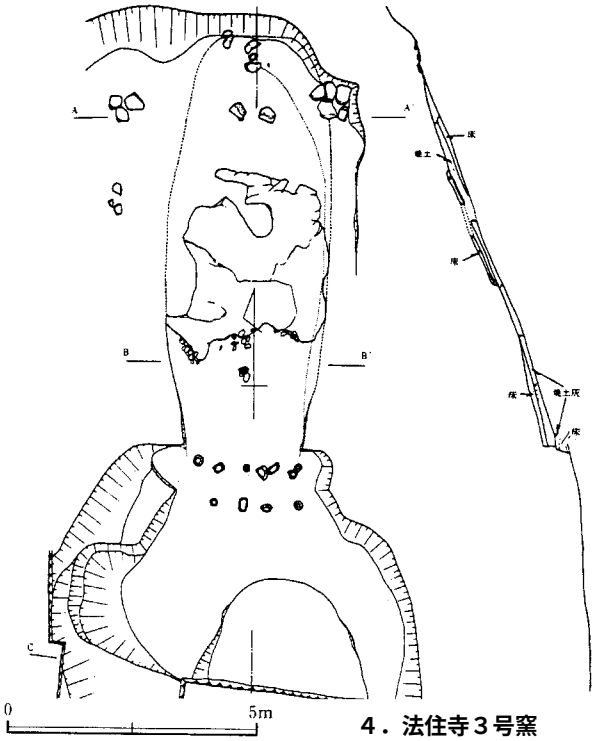
2．寺家クロバタケ１号窯



3．大畠２号窯



5．西方寺１号窯



4．法住寺３号窯

中世加賀・能登の甕・壺・鉢の生産と流通

岩瀬　由美（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

生産の様相

石川県内には能登国に珠洲窯と堀松窯、加賀国に加賀窯と作見窯の計４カ所の中世窯跡が確認されている。珠洲窯は珠洲市・鳳珠郡能登町（旧珠洲郡内浦町）域で生産された須恵器系陶器で、これまでに約40基の窯が確認されており、12世紀中葉～15世紀代にかけて甕・壺・鉢の三器種を中心とした生産が行われている。堀松窯は志賀町小浦地内で灰原とみられる散布地が確認されている瓷器系陶器で、窯本体は未発見であるが、出土陶片から知られる製作技術や押印の意匠から加賀窯との関連が指摘されている(1)。甕・壺・鉢の三器種が出土しているが、壺・鉢は少なく、甕を中心とした生産が行われていたと推定され、窯の稼動時期は13世紀後半代の短期間とみられる。加賀窯は小松市戸津町から那谷町周辺で生産された瓷器系陶器で、12世紀後半に常滑窯の生産技術を導入して開窯し、14世紀後半に至るまでの14群46基の窯が確認されている。窯体構造が判明しているものは分焔柱を備えた地下式の窖窯である。生産器種は甕・壺・鉢を中心とし、中でも甕を量産している。作見窯は加賀市作見町に所在した窯で、備前窯の生産技術を導入して開窯したと推定され、16世紀末の１四半期程度の短期間の操業と想定される。生産器種は甕・壺・鉢を中心とする。

流通の様相

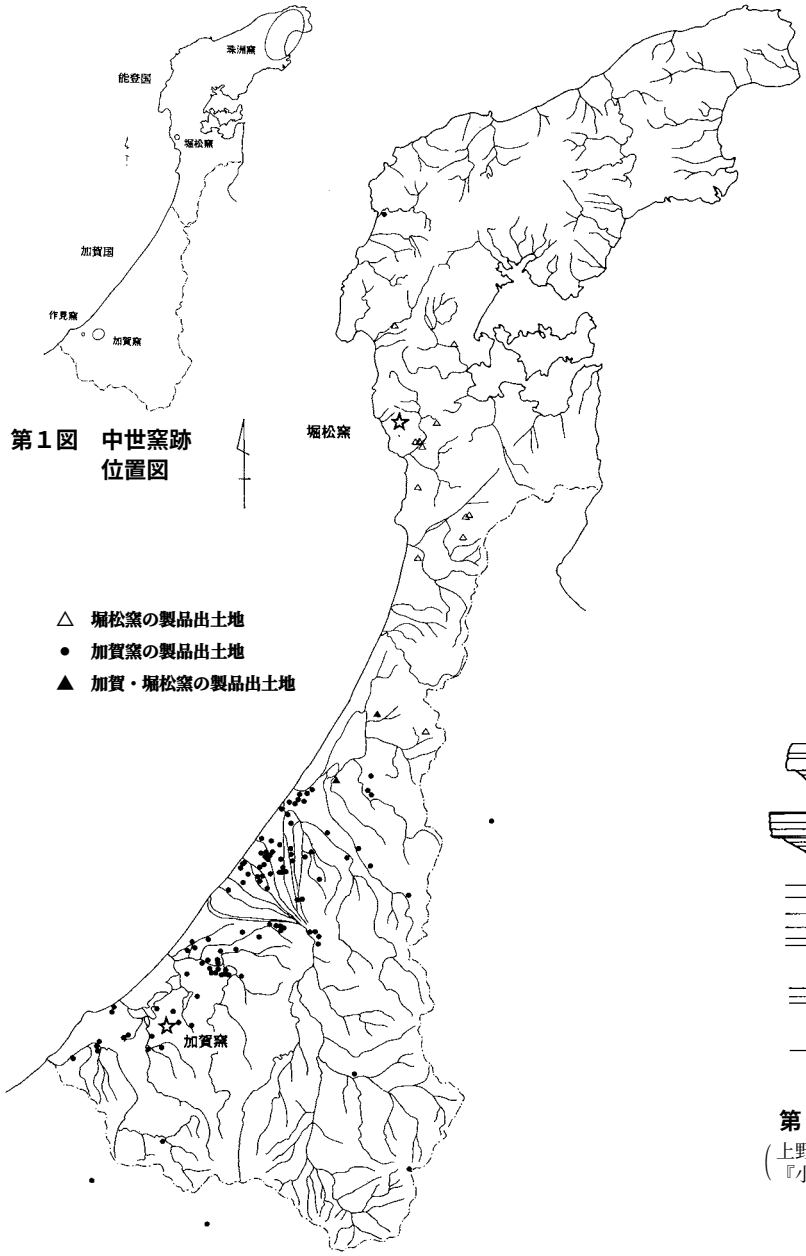
中世前期では、珠洲窯開窯以前とみられる12世紀第２四半期（常滑編年１ｂ型式期）から能登・加賀を通じて常滑焼広口壺等の東海産瓷器系陶器が少量流通しており(2)、12世紀後半になると珠洲焼が能登・加賀の広範囲に多量かつ一気に流通する。開窯後まもなくは窯場近くの南加賀を中心とした地域を主な流通圏とし、生産の増大を図って次第に越前や越中に流通圏を広げていく加賀焼が能登には流通しないことと対照的である。能登では12世紀後半以降、珠洲焼が甕・壺・鉢ともに100%に近い割合で使用される。同じく国内で生産された堀松窯の製品は中能登を中心に出土が確認されるものの、短期間の操業であるためか流通量は極めて少ない。加賀では南加賀と北加賀で様相が異なっており、南加賀では加賀焼を主体としつつも珠洲焼や越前焼が定量流通し、器種によっては珠洲焼が上回る様相を呈す。北加賀では能登と南加賀の中間的様相を示すが、三器種とも珠洲焼が主で、北加賀の北部で少量の堀松窯製品の流通も確認される。越前焼は南加賀では12世紀後半から確認されるが、北加賀での流通が確実視されるのは13世紀代に入ってからであり、13世紀代に加賀国全体が越前焼の流通圏に組み込まれたと推定される。能登においては12世紀後半～14世紀前半の越前焼の出土が散発的に確認されるものの、現時点では当該期において普遍的に流通していたとまでは言い難い。

中世後期になっても能登では14世紀後半～15世紀代は前代と大差なく、15世紀中葉以降に越前焼の流通量が甕・鉢ともに増加する。加賀では15世紀代にすでに甕は越前焼が主体となるが、鉢に関しては南加賀ですでに越前焼が卓越するのに対し北加賀では依然として珠洲焼が多くを占めることから、南加賀から徐々に甕そしてすり鉢の順に流通量を拡大していった越前焼の様子が窺える。16世紀になると能登・加賀とも三器種全てにおいて越前焼が大半を占め、16世紀後半には新たに鉢を中心とした備前系の製品が少量確認される。実見し得た陶片の殆どは備前窯の製品と判断され、南加賀や北加賀南部で数点の作見窯の製品とみられる陶片が確認されたことから、作見窯の流通圏は窯周辺のごく狭域で、流通量も極めて少量であったと推定される。

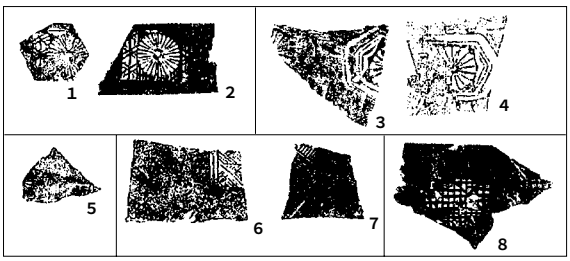
(注1)垣内光次郎　2005 「北陸西部の諸窯－加越能の瓷器生産－」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集

(注2)県内出土の東海産瓷器系陶器については中野晴久氏に実見していただき、ご教示を賜った。

第１図　中世窯跡
位置図

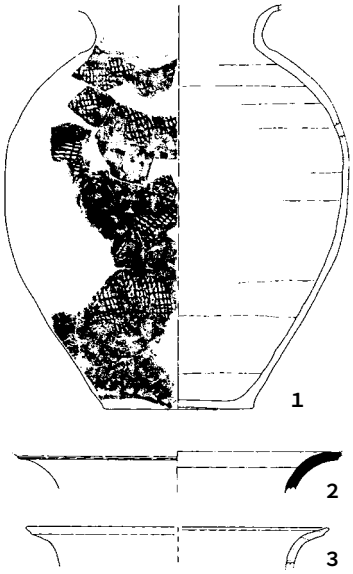


第２図　加賀・堀松窯出土遺跡分布図
（S＝１／1,000,000）



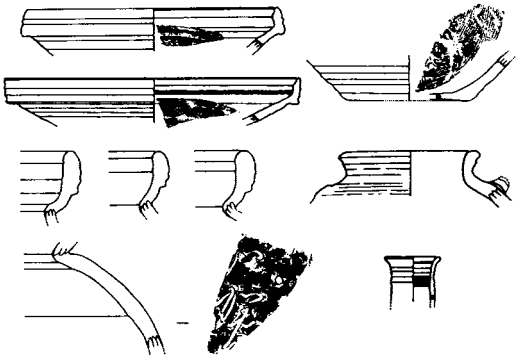
１・２：菊花文と斜格子　　６・７：幾何学文
３・４：菊花文と六角形枠　　８　：正格子と×印
５　：花文のみ

第５図　消費地出土堀松窯の押印集成（S＝１／６）

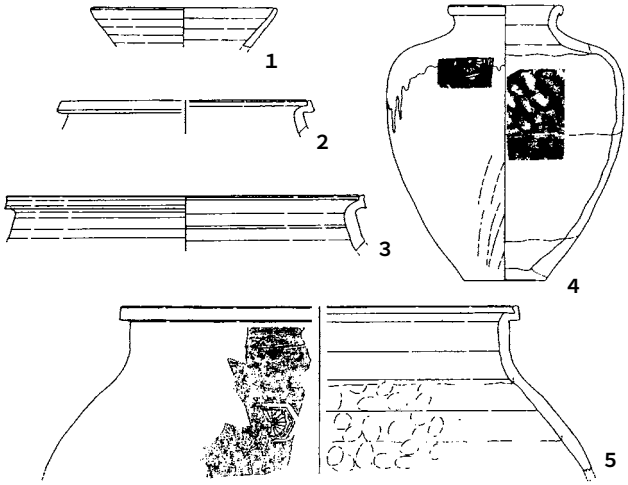


１：水白モンショ遺跡　２：東小室ボガヤチ遺跡
３：小川新遺跡

第３図　県内出土の常滑焼（S＝１／10）

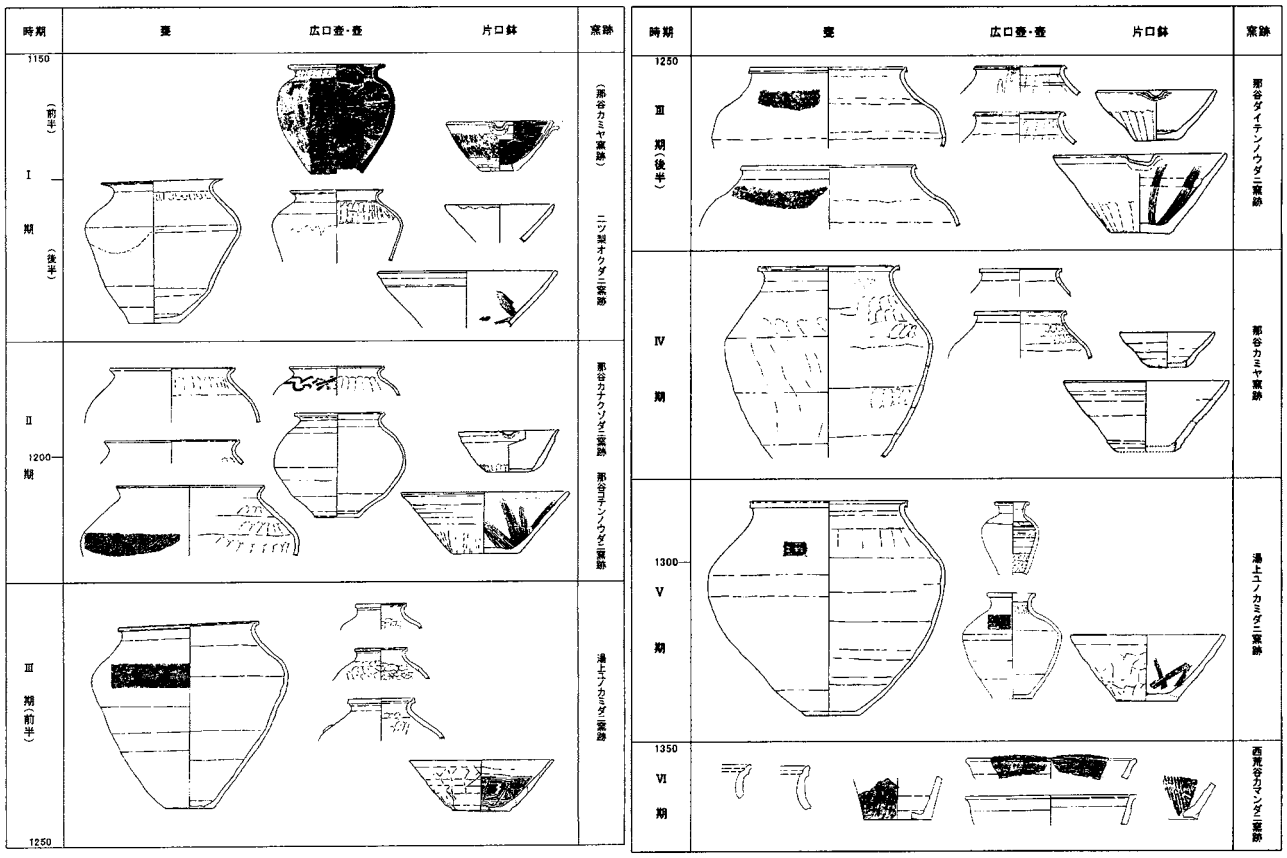


第４図　作見窯灰原出土遺物実測図（S＝１／10）
（上野与一・宮下幸夫　1982「作見窯について」
『小松市立博物館研究紀要第19集』小松市立博物館より転載）

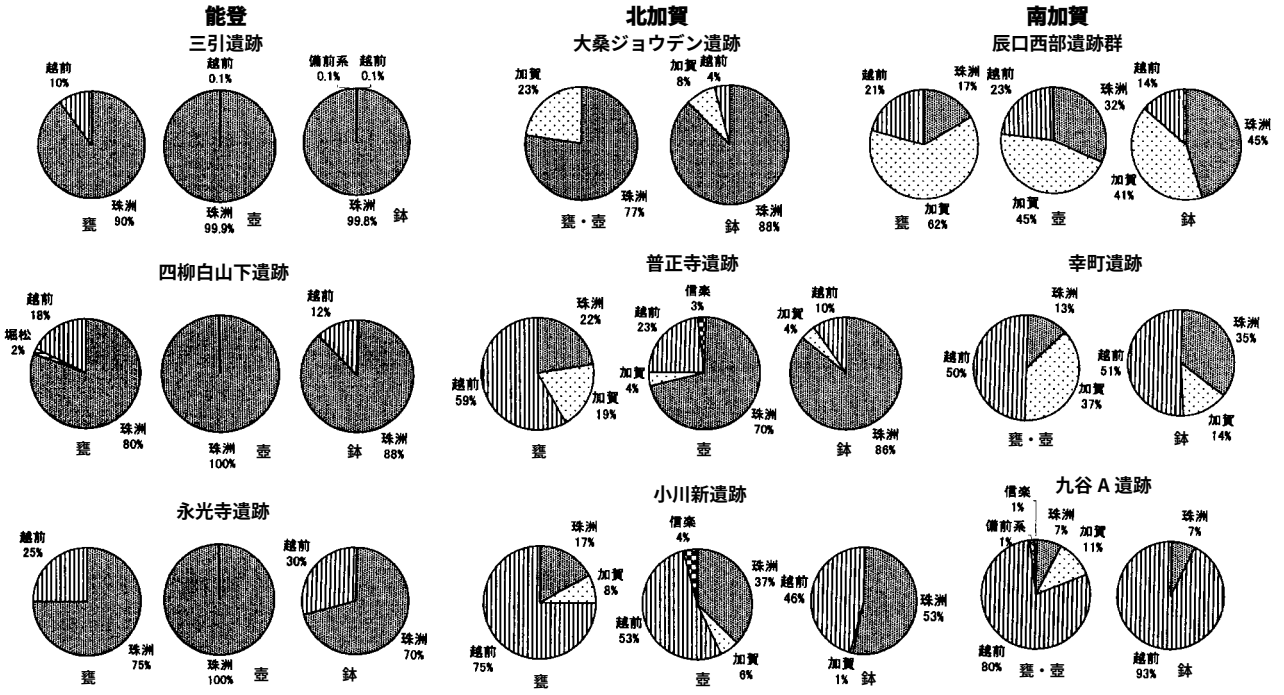


１・３：長者川遺跡　２：指江Ｂ遺跡　４：刈安野々宮遺跡
５：木越光琳寺遺跡

第６図　消費地出土堀松窯遺物実測図（S＝１／10）



第７図　加賀焼略編年図（甕・壺 S＝１／24、片口鉢 S＝１／16）（注１文献より転載）



三引遺跡
（12～14C 中心）

	甕	壺	鉢
珠　洲	386	728	670
越　前	44	1	1
備前系	0	0	1

四柳白山下遺跡
（15C 後半中心）

	甕	壺	鉢
珠　洲	95	40	113
堀　松	2	0	0
越　前	21	0	16

永光寺遺跡
（15～16C 中心）

	甕	壺	鉢
珠　洲	162	37	92
越　前	54	0	39

辰口西部遺跡群
（13C 前半～14C 前半中心）

	甕	壺	鉢
珠　洲	55	7	82
加　賀	205	10	74
越　前	68	5	25

幸町遺跡
（15C 前葉～中葉中心）

	甕・壺	鉢
珠　洲	67	35
加　賀	198	14
越　前	266	51

九谷 A 遺跡
（15C 後半～16C 中心）

	甕・壺	鉢
珠　洲	38	13
加　賀	58	0
越　前	412	167
備前系	6	0
信　楽	5	0

大桑ジョウデン遺跡
（12C 中葉～14C 前葉中心）

	甕・壺	鉢
珠　洲	17	21
加　賀	5	2
越　前	0	1

普正寺遺跡
（14C 後半～15C 中葉中心）

	甕	壺	鉢
珠　洲	321	216	191
加　賀	273	12	10
越　前	834	69	22
信　楽	0	8	0

小川新遺跡
（15C 中葉～16C 後半中心）

	甕	壺	鉢
珠　洲	35	26	63
加　賀	16	4	1
越　前	154	37	55
信　楽	0	3	0

第８図　甕・壺・鉢組成図

富山県における中近世の土器・陶磁器流通
－甕・壺・擂鉢を中心にして－

宮田　進一（富山県文化振興財団）

1　はじめに

富山県における中世の甕・壺・擂鉢は、珠洲、越前、それに在地陶器である八尾と瀬戸美濃がわずかである。単純な様相である。発表資料では、各時代の様相を詳しく述べたので、ここでは、陶器生産である八尾について、取り上げる。

2　八尾の生産

①窯の概要と器種

富山県の中央部、東の神通川と西の井田川に挟まれた丘陵裾の富山市（旧八尾町）深谷地内に立地する。県内唯一の中世窯である。窯は４基で、長さ10m、幅２ｍの半地下式窖窯である。窯下方に長さ50m、幅25mの灰層が拡がる。灰層の北西尾根に７箇所、南側斜面に１箇所のテラス状遺構があり、作業場と考えられる（八尾町教委1984）。

採集された器種には、甕・広口壺・小壺・擂鉢・蓋がある。大多数が甕・広口壺である。無釉の瓷器系製品で、器面外面を板状工具でカキアゲ、ナデ仕上げを基本にしている。板の木口でハケメ状調整痕を残すものがあり、この調整は加賀に類似する。

甕・広口壺は、未発達や発達した「N」字状口縁部で、押印・ヘラ記号などの加飾がわずかに見られる。壺には広口壺以外に玉縁状口縁の壺がある。擂鉢は高台が付かなく、オロシメのあるものとないものがある。押印の種類は少ない。

②時期

八尾の時期を検討するときに、八尾と加賀の類似点は共通認識されているが、常滑編年か加賀編年のどちらかを用いるかによって、年代観が少しずれてくる。13世紀前半～14世紀前後の酒井重洋氏（酒井1997）・13世紀後半の中野晴久氏（中野1996）、13世紀前半～14世紀初めの垣内光次郎氏（垣内2005）がある。加賀との比較から外反する三角形状の口縁部（Ⅰ期）、N字状口縁部（Ⅱ期）とその発達した口縁部（Ⅲ期）という垣内氏の３区分に従って、図化された消費地資料の口縁部形態から検討してみると、Ⅱ・Ⅲ期のものが多いが、Ⅰ期も40%ほどある。そのことが、八尾の時代差を表しているとすれば、やや古い形態を残しながら八尾は13世後半に中心があり、遅くとも14世紀初めには終焉したと推測される。

③流通

八尾の遺跡出土例は、60箇所以上を数える。その範囲は酒井氏が指摘したように県内一円に及び、県外では飛騨市江馬氏館跡に分布を見る。県内の出土遺跡では、陶磁器に占める八尾の割合が１%以下のものが大部分である。このことは、窯数の少なさと焼成技術の脆弱さとよるもので、八尾の競争力の弱さと生産能力の限界を示し、やがて珠洲に対抗できず、八尾が自然消滅していった原因になったとされている（酒井1990）。ただし、窯から直線で32km離れている岐阜県江馬氏館跡で八尾が３%を占めていることは、山間部に販路を求めて、海運への依存の強い珠洲の交易に対抗した結果であろう（吉岡1994）。

ところで、八尾の流通を考える場合、窯から10km以内で、神通川流域にある富山市道場Ⅰ遺跡や中名Ⅰ遺跡などが参考になる。ヘラ描き文字（「界方」？）のある中名Ⅰ遺跡出土擂鉢は特注品と考えられ。また、この地域の八尾が２～３%台を示していることは、この地域が八尾の主な流通圏であるがわかる。更に、遺跡の立地状況から拠点的遺跡である道場Ⅰ遺跡では、八尾が20%を占めている（富山県文化振興2004）。このことは、八尾流通の集積地と考えるよりも、珠洲に対抗するために八尾窯の近辺にある拠点的な遺跡を中心に流通していた実態を示すものと推測される。このような中核的な遺跡が他の陶磁器指向を替えたりやその遺跡の衰退が、八尾の生産消滅の一因になったことも想像される。

中世前期の様相(富山県)

１２世紀後半

瓷器系

須恵器系

常滑

珠洲

中世前期の様相(富山県)

１３世紀前半

珠洲

１３世紀後半

珠洲

八尾

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

１４世紀前半

珠洲

中世後期の様相(富山県)

１４世紀後半

珠洲

越前

１５世紀前半

珠洲

１５世紀後半

珠洲

越前

土師質擂鉢

中世後期から近世初期の様相(富山県)

１６世紀前期

越前

瀬戸美濃

１６世紀後期

越前

土師質擂鉢

１６世紀末から１７世紀前半

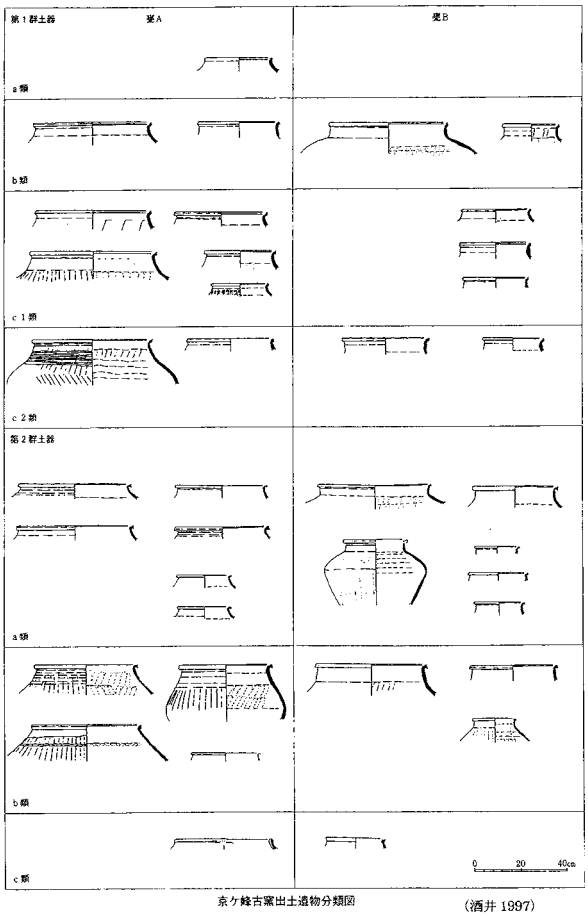
越前

越中瀬戸

肥前

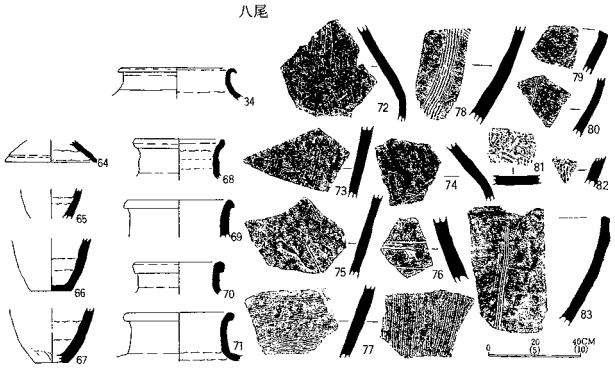
備前

八尾

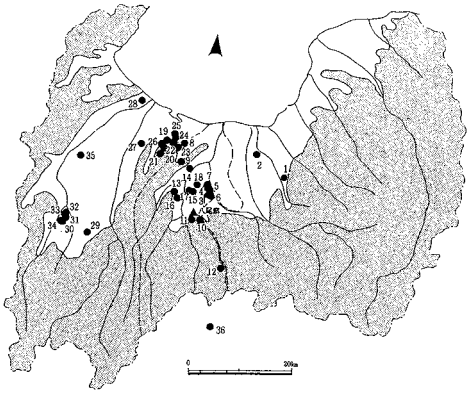


京ケ峰古窯出土遺物分類図　（酒井 1997）

八尾



第24図　土器実測図（1/8）　67～82(1/4)、82は〔酒井他1984〕より　（八尾町教委 1984）

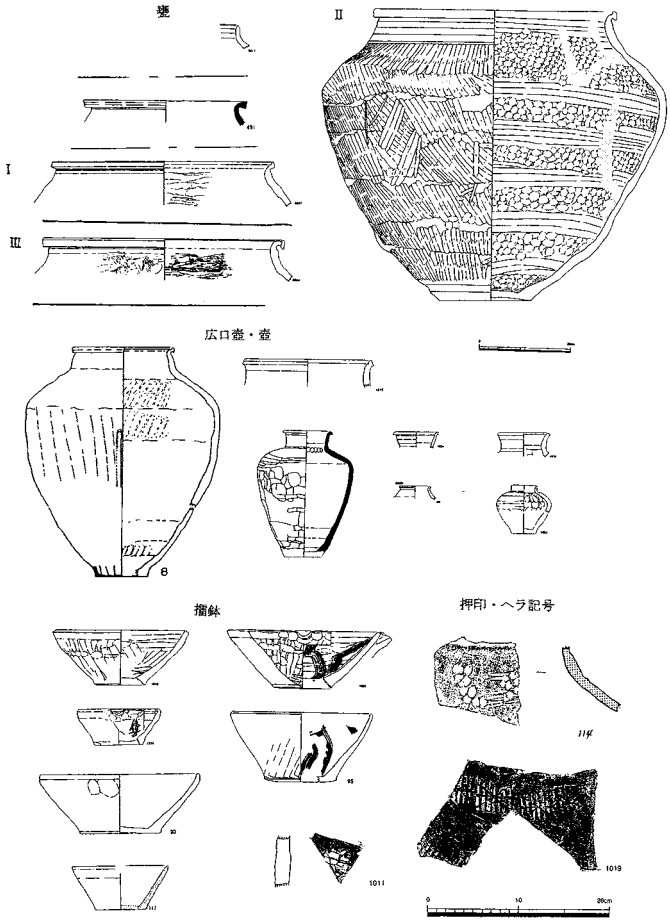


第300図　八尾出土遺跡

1 弓庄城跡、2 竹内天神堂古墳、3 吉倉A遺跡、4 吉倉B遺跡、5 南中田C遺跡、6 南中田D遺跡、7 任海鎌倉遺跡、8 中老田C遺跡、9 室住池廃跡、10 城生城跡、11 紙樹寺墓、12 片井屏遺跡、13 富崎遺跡、14 友坂遺跡、15 堀I遺跡、16 小倉中稲遺跡、17 清水島II遺跡、18 中名II遺跡、19 上野遺跡、20 上野南I遺跡、21 上野南IIA遺跡、22 三谷遺跡、23 塚越貝塚遺跡、24 針原東遺跡、25 白石遺跡、26 流団No.18A遺跡・流団No.15A遺跡、27 布目沢北遺跡、28 越中国府関連遺跡群、29 井口城跡、30 梅原胡摩堂遺跡、31 梅原加賀坊A遺跡、32 田尻遺跡、33 梅原安丸遺跡、34 梅原上村遺跡、35 石名田木舟遺跡、36 江馬氏館跡

（酒井 1997）

集落遺跡・墓跡出土の八尾



富山県の中近世の様相

器種	種類	12世紀後半	13世紀前半	13世紀後半	14世紀前半	14世紀後半	15世紀前半	15世紀後半	16世紀前半	16世紀後半	17世紀前半
甕	珠洲	●	●	●	●	●	●	●	●		
	八尾			●	●						
	加賀			●	●						
	越前						●	●	●	●	●
	瀬戸美濃								●		
	肥前										●
壺	珠洲	●	●	●	●	●	●	●			
	八尾			●	●						
	加賀			●	●						
	越前						●	●	●	●	
	越中瀬戸										●
	信楽										
擂鉢	常滑	●									
	珠洲	●	●	●	●	●	●	●	●		
	八尾			●	●						
	越前								●	●	●
	瀬戸美濃					●	●	●	●	●	
	瓦質・土師質					●	●	●	●		
	越中瀬戸									●	●
	肥前									●	
	備前										●

越後北部の中世陶器窯

鶴巻　康志（新発田市教育委員会）

１．はじめに

新潟県の北部、阿賀野川の北側は「阿賀北（あがきた）（揚北）地方」と呼ばれ、中世の有力在地領主が割拠し、国府からも離れているため、独自性の強い文化を持っていた。この地方で中世陶器窯が営まれていたのも、その歴史的な背景が影響しているとみられる。

２．研究史

1980年の吉岡康暢氏による珠洲焼編年提示以来、東北地方の須恵器系の中世陶器の様相が徐々に明らかにされ、これらはいずれも「珠洲系」として捉えられ、個々の地域で出土する須恵器系の中世陶器が「珠洲焼」か、地元産なのかで議論が続いた。胎土分析の結果や、地方窯の編年研究の進展により、東北地方日本海側には珠洲Ⅰ期～Ⅲ期に並行する須恵器系中世陶器窯が認められるものの、消費地遺跡で出土する製品の多くは珠洲焼であるという評価が定着した。

３．新潟県の中世陶器生産と流通

新潟県北部の中世窯跡群は「北越窯」・「五頭山麓窯」・「笹神窯」と呼ばれ、遅くとも13世紀前半には須恵器系窯として成立した後、13世紀の中頃に瓷器系窯へと転換する。陶器窯は、新発田市から阿賀野市にかけて連なる五頭連峰の前山にあたる丘陵地帯に分布する。中世陶器窯は須恵器系２、瓷器系５遺跡がある。

a）須恵器系中世陶器窯

北沢１～５号窯・背中炙（せなかあぶり）窯がある。製品は片口鉢の内面に鋭利な櫛状工具によって施された振幅の大きい擂目から、珠洲Ⅱ期に並行する年代が与えられている。北沢窯→背中炙窯の時期差を想定でき、いずれも大枠では珠洲Ⅱ期に対比できるため、13世紀前半頃に比定される。

珠洲の片口鉢・壺Ｔ種、壺Ｒ種に対応する器種が主体である。北沢窯では、ほかに浄瓶・陶硯が生産されている。片口鉢は珠洲と異なり、陶片を挟んで重ね焼きするため、内外面に目痕が残る場合がある。

b）瓷器系中世陶器

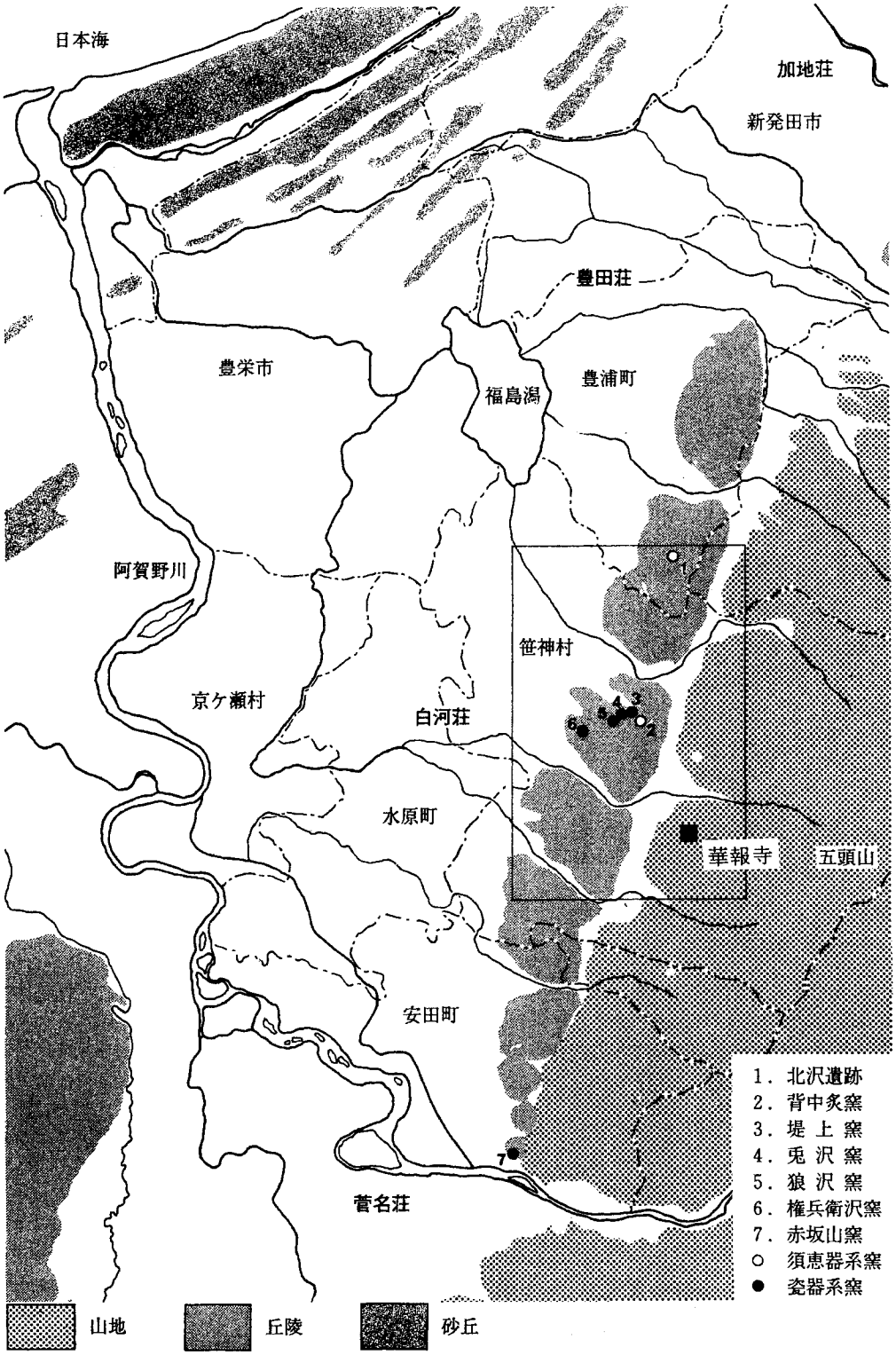
権兵衛沢１号窯、狼沢１号窯、兎沢窯・堤上窯・赤坂山１号・２号窯がある。甕類の口縁形態が受口状、Ｎ字状で、押印の施文位置が肩から胴にかけて多段に施される権兵衛沢段階（権兵衛沢１号・赤坂山２・１号）と、甕の口縁部がＮ字状のみで、押印は肩もしくは胴部に１段のみ施される狼沢段階（狼沢１号窯・兎沢窯・堤上窯・赤坂山２号窯の窯体埋土）に区分される。器種は甕・壺・鉢が主体である。前者は常滑５型式、後者は常滑６a 型式に対応している。

c）製品の流通

製品は新潟県北部を中心に分布するが、消費地遺跡での陶器組成に占める割合は低い。また、近年の研究では、山形県内の内陸部の遺跡で瓷器系の製品が確認され、越後国外にも流通していたことが判明した。

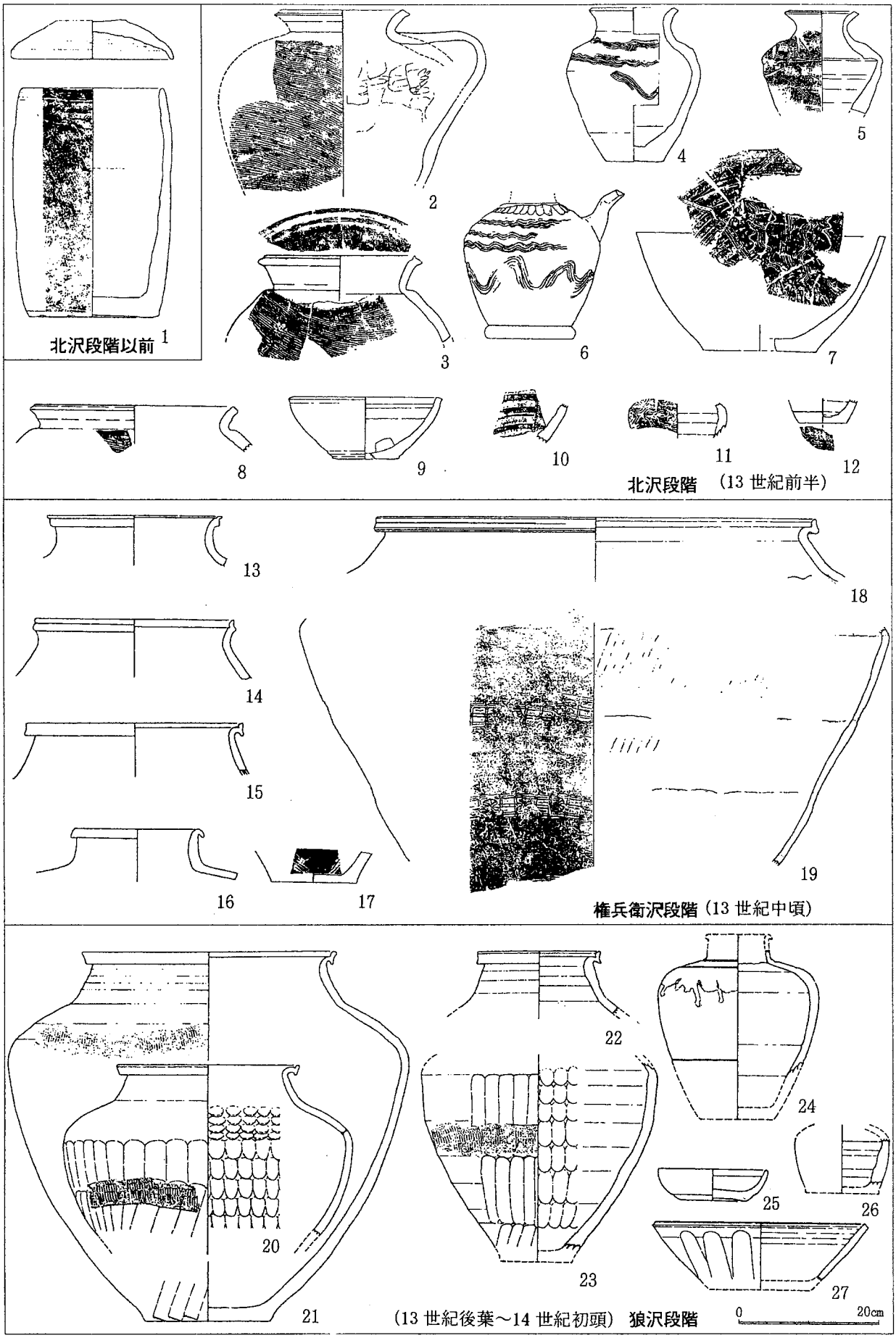
参考文献

鶴巻康志2005「新潟県北部の中世陶器窯」『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

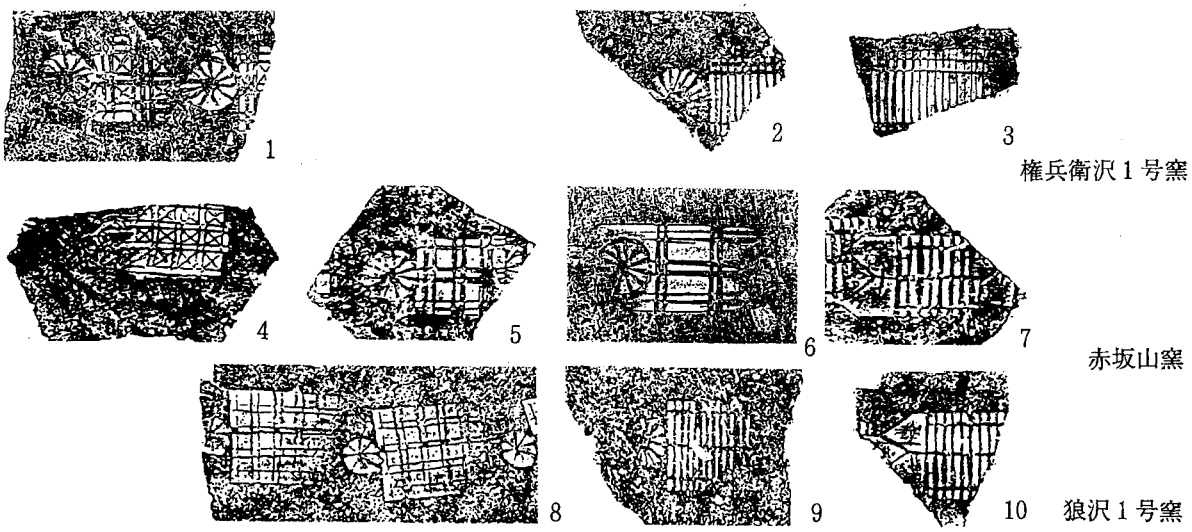


第１図　陶器窯の分布と周辺の地形（１／15万）（鶴巻　1996）

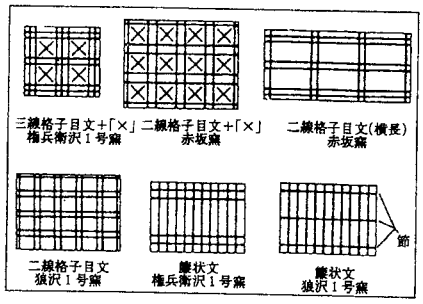
次ページ編年表で使用した実測図の出展は以下の通りである。１安田町横峯１号経塚〔安田町教育委員会1979〕、２～７豊浦町北沢１号陶器窯〔豊浦町教育委員会1992〕、８～12笹神村背中炙窯〔吉岡1994〕、13～17笹神村権兵衛沢１号窯〔中川ほか1970〕、18安田町赤坂山窯〔渡辺1978〕、19安田町六野瀬遺跡１号井戸出土赤坂山窯製品〔安田町教育委員会1992〕、20～27笹神村狼沢１号窯〔中川ほか1973〕



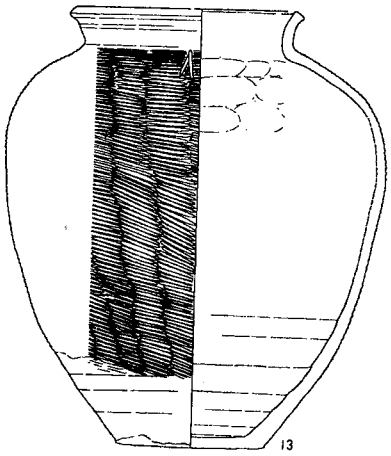
第2図 北越窯編年図（鶴巻 1997）



第３図　各窯の押印（鶴巻　1996）



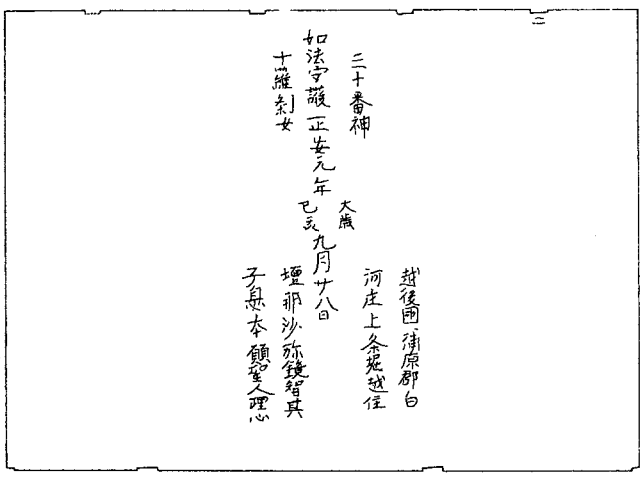
押印文の基本パターン（鶴巻　1991）

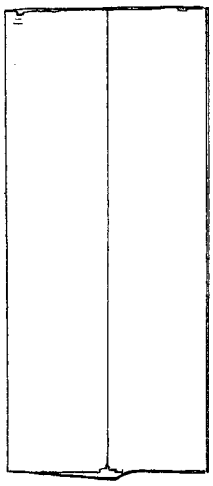


華報寺　目洗沢出土中世陶器

0　20cm

（珠洲壺Ｔ種はⅣ１期基準資料・瓷器系鉢は狼沢段階）





銅製経筒

0　10cm

第４図　記年銘資料（吉岡　1994）

東北地方日本海側の陶磁器の様相

山口　博之（山形県埋蔵文化財センター）

中世出羽国の陶磁器の様相について概観したい。地域的には現在の行政区分のほぼ秋田県と山形県の大部分がこの地域にあたる。十二世紀代の陶磁器と奥州藤原氏の関連、東北地方の陶器生産の様相、十五世紀から十六世紀の陶磁器の様相などを中心として扱う。

十二世紀代の陶磁器と奥州藤原氏

この時期の陶磁器は、中国を産地とする陶器や白磁を中心とする陶磁器と、出羽国在地産の陶器、広域に流通している珠洲などの国産陶器、そして土器であるかわらけが存在する。８世紀から11世紀までの貿易陶磁器の数量は非常に少ない。増加するのは12世紀代の後半になってからである。白磁碗Ⅳ類を代表とする白磁の碗皿類、白磁四耳壺、劃花文青磁椀などの組成が見られる。この様相は、岩手県平泉町の平泉藤原氏に関係する平泉遺跡群の組成に似る。

平泉遺跡群から見いだされる主要な陶磁器の器種構成を八重樫忠郎は「平泉セット」と呼び、その分布から平泉藤原氏との深い関係を読み取ろうとしている。しかし「平泉セット」を、出羽国の中で見いだすことは多くはない。平泉では多用される東海系陶器はほとんど持たず、わずかの手づくねかわらけや白磁、日常的な甕・壺・擂鉢は須恵器系陶器で構成されるセットが、十二世紀の日本海側出羽地域の特質をよく表している。こうしたセットこそが出羽国では一般的な組成をなすものとなる。

東北地方の陶器生産

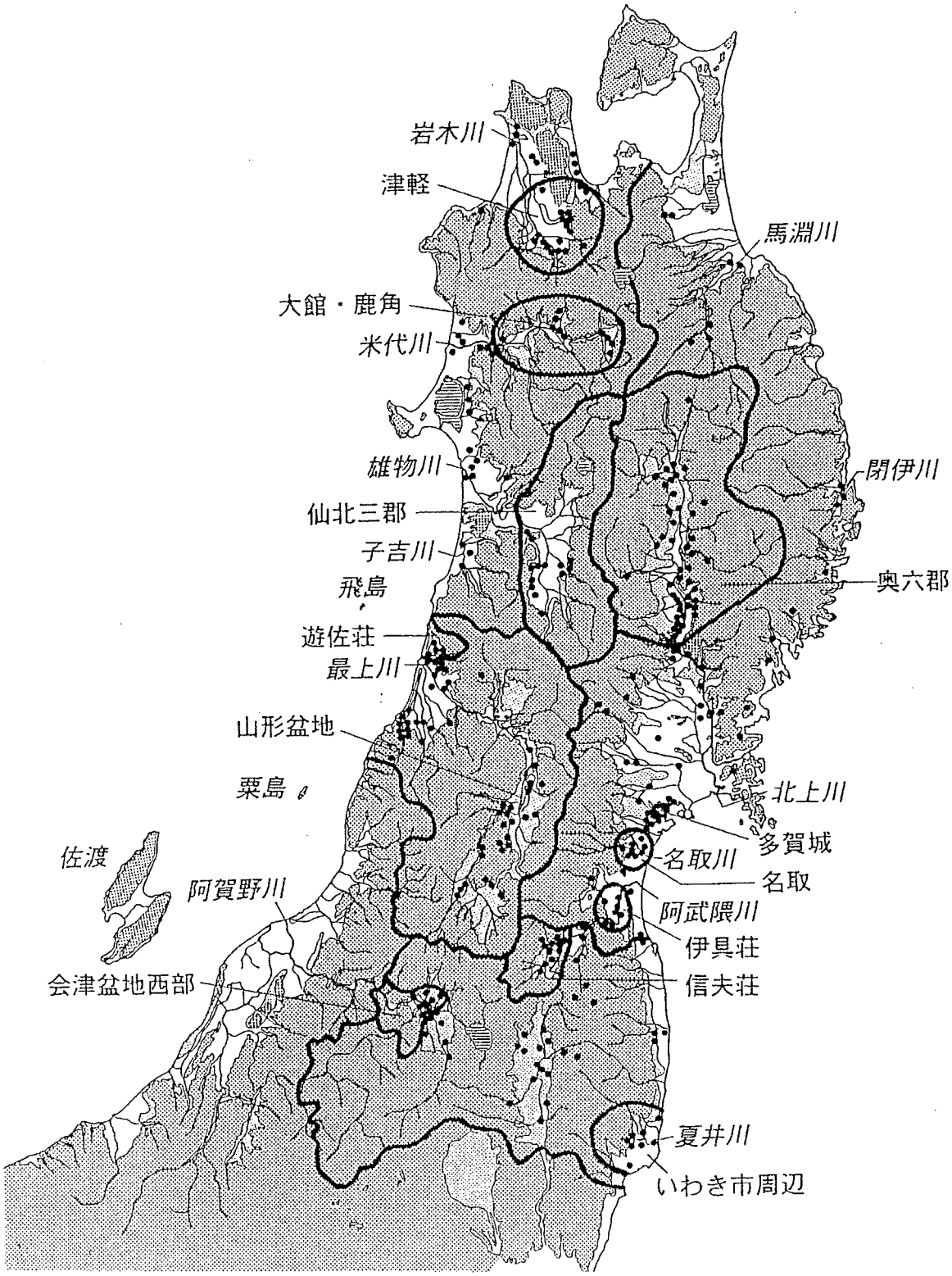
奥羽の陶器窯跡では、大きく分けて11の窯跡群を見いだすことができる。この地域の陶器生産はやや断続的にではあるが、12世紀半ば前後から14世紀前後までの約150年間にわたって営まれている。列島の中の中世陶器窯の動向とこの地域は無縁ではない。奥羽の陶器窯の主な供給先は、数郡規模のものと数国規模のものとに分類することができる。宮城県地域の瓷器系窯は分布が狭い。数郡規模といっても過言ではない。基本的には、常滑の卓越地域でありこの製品と同種のものを作成しているのであるから、補完的な意味が強い。対照的に日本海側の須恵器系陶器窯製品の分布が数国規模と大きな分布圏を形成するのは、この地域の経済活動の範囲がもともと大きいことを示している可能性がある。

脇本城出土の貿易陶磁器群とその周辺世界の様相

脇本城の出土遺物は大きくは国産土器・陶器と貿易陶磁器から組成される。小型の碗・皿さらには特殊品などに貿易陶磁器が多く組成され、大型の甕や日常用品である擂鉢には国産の陶器が組成されるというおおまかな傾向を知ることができる。遺物相は、ほぼ十五世紀～十六世紀後半を主体とする遺物組成と見ることができる。小野正敏は非日常的な遺物が陶磁器群に組成されることについて、これらを「威信財」と見て、領主権力の様相が遺物に反影しているものとしている。この時期、貿易陶磁器の潤沢な供給量が保証され、流通の円滑化が保証されていることを示している。こうした遺物相に在地要求の事実を見いだすことができる。15世紀前半ころを中心とした時期に、交通の要衝などに、在地勢力の城館が営まれ初め、それは戦国期を通して営まれ続けてゆくということになる。それらの勢力は様々なレベルで相互に影響を及ぼし合っていた。遺物組成からみれば、興味深いことにある程度共通する遺物組成を持つことから、物あるいはそれが飾られる空間をも含めての価値観も共通していたのである。無論こうした状況には宗教勢力も無縁ではない。

酒田を出、赤間関を経由し品川を目指す幕府領米積出船の所要日数は、早い船便で約１カ月であった。北陸と東北地方日本海側とは、海上交通を介して深い結び付きがあり、陶磁器の様相にもその一端が現れているのである。

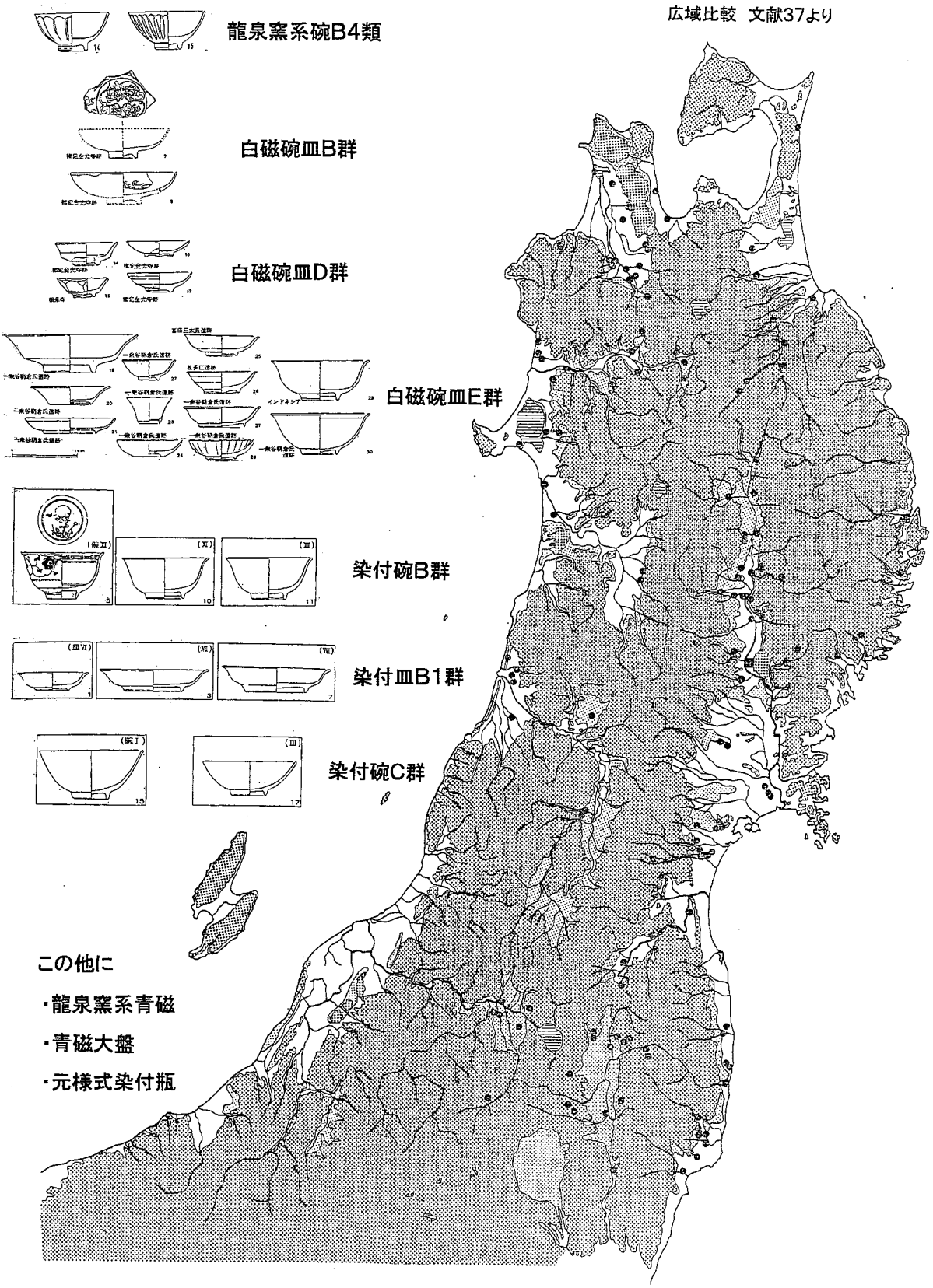
12世紀を中心とする東北地方の遺跡



脇本城出土遺物の広がり

脇本城　文献96より

広域比較　文献37より



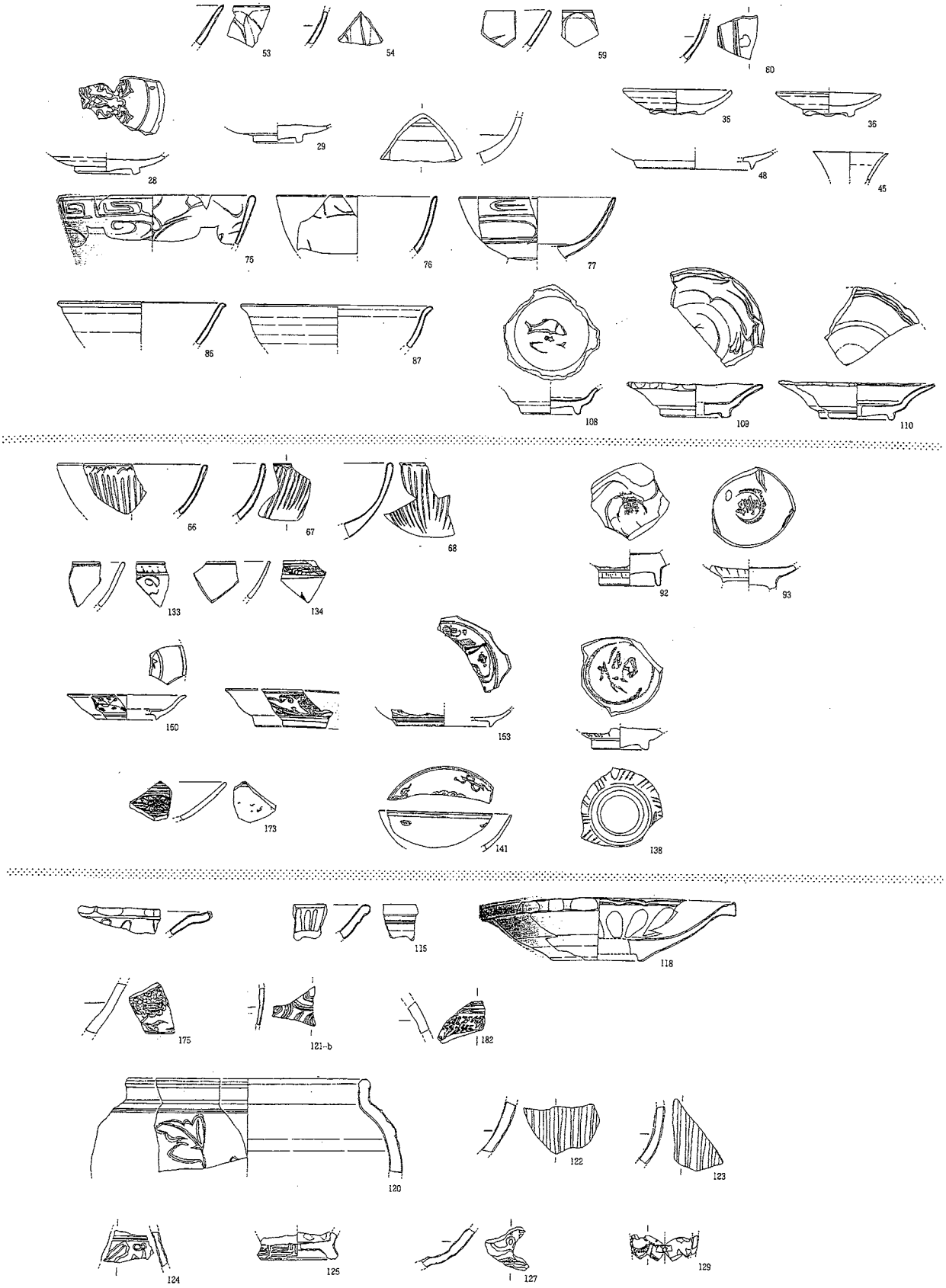
この他に

・龍泉窯系青磁

・青磁大盤

・元様式染付瓶

鶴ヶ岡城の主な出土遺物



討論風景

討論と展望

横山　誠（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

討論にあたって、まず司会の藤田邦雄氏は「中世土器・陶磁器の流通経路の復元へ向かう」という方向性を示した。その上で、「技術系譜の確認」、「主に中世前期における産地から消費地までの流通経路はどのようなものであったか」というテーマを中心に討論は進められた。

まずは、技術系譜の確認であるが、徳永貞紹氏（佐賀県）・榊原博英氏（島根県）の報告により、基本的に須恵器系の窯が九州・中国・四国地方のほとんどを占めている状況が確認され、岩田隆氏(福井県）による宮谷窯の報告例があるものの、積極的に若狭湾を越え純粋な東播系の窯が東へ行くことはないという共通認識が得られた。北陸から東北地方について、鶴巻康志氏（新潟県）は、北越窯において技術は珠洲、窯構造は東播と二つの影響を受けていると報告された。山口博之氏（山形県）は東北地方の須恵器系の技術は西日本とは少し異なるとして、器種の類似や生産年代などから珠洲系と言えると述べられた。特に北陸以北の日本海側は珠洲窯の影響が大きいと言える。

藤田氏はこのような技術系譜から、若狭湾以西にあたる九州・中国・四国地方、窯場が瓷器系のみである知多・渥美半島周辺地域、須恵器系と瓷器系の窯場が混在する北陸地方、太平洋側に瓷器系・日本海側には須恵器系の窯場が多い東北地方といったようなグループ分けを提言した。

次に流通経路の問題であるが、まず水路と陸路があることを理解した。水路では日本海・太平洋・瀬戸内海などにおける「港」を基点とした広域流通があり、さらにそこから河川・湖沼などの内水面を利用し展開するという経路がある。陸路については岩瀬由美氏（石川県）が加賀窯から越中方面の流通に関して、能登廻りの水路よりも陸路の利便性を述べられるなど、その他多くの報告者からも提言された。さらに山口氏は東北地方の流通が奥州藤原氏の影響を受けていることなどから流通と支配者の関係も述べられた。

また流通範囲についても多く意見が出された。宮田進一氏（富山県）は八尾窯について海運の依存の強い珠洲窯との関係から山間部へ販路を求めたと述べ、鶴巻氏は製品の胎土や押印資料などからもその広がりを報告されている。さらに珠洲焼について大安尚寿氏（石川県）は若狭湾以西には一次流通していないと述べられており技術系譜についてもそうであったが流通に関しても中世の段階では若狭湾を挟んで異なった様相が確認できる。しかし徳永氏の報告の中で14世紀後半から15世紀前半に若狭日引製の石塔が肥前西部沿岸部などに多数搬入されたという例もあり、非常に興味深く今後検討していく必要性があろう。

このことを踏まえ、藤田氏は若狭湾の東西の壁を越え東北から九州まで広域流通する近世初頭の肥前窯の陶磁器について各地の状況を確認したが、九州を除いて碗・皿類は早い段階から流通していることが確認できたものの、甕・壺・擂鉢については調査・出土例が少ないという認識であった。

討論の最後に吉岡康暢氏が総括として指摘されたが、生産地・消費地に物資の「集散地」を加えた流通システム、広域窯と在地窯の消長や密接な関わりなども検討することが、今後の課題である。また生産・流通のコスト、担い手の関わりや時期（画期）による変化なども合わせて考えていく必要がある。まだまだ問題は山積であるが今回の研究集会では、人々の日常生活を支えた甕・壺・擂鉢を中心に流通経路、システムの復元・解明に向けて前進できた事は非常に有意義であった。

北陸地域における渡来系遺物群の集成

新村いづみ　松尾　実

はじめに

近年の古墳時代研究は、東アジアからの視点で日本の社会像に迫った研究成果が多く発表されている(注1)。従来から、古墳の主体部から出土した武具、装身具、威信具等の個別研究等から朝鮮半島への系譜や政治的交流・交易が指摘され、さらに、韓式系土器研究等の成果(注2)からも、陶質土器の系譜、軟質土器の動向、須恵器の生産・流通等の研究が行われてきた。一方、北陸地域(注3)での研究状況は、数少ない研究者によって古墳研究が深化されているが、集落等については低調といえよう。ただし、南加賀地域を中心に発見されたＬ字形竈を付設する建物の発見を契機に中国大陸や朝鮮半島へも目を向けられ、韓式系土器等が注目されつつあるが、それらの基礎作業が行われておらず、社会的動態等について言及されていないのが現状である。そこで、本稿では北陸地域における現時点での状況を把握・整理するため、渡来系遺物群を中心に集成を行うことを主目的として、基礎データの提示と、若干の検討を行いたい。

渡来系遺物の名称については、渡来人(注4)によってもたらされた多様多種な土器の総称とし、主に土師器の移動式竈・甑・朝鮮系軟質土器、須恵器の甑・角杯形土器等の特徴的な遺物を集成する。なお、渡来人と密接に関わるＬ字形竈を付設した建物も検討対象に含めた。また、須恵器生産の拡散期に多大な影響を与えたと考える初期須恵器(注5)にも注目し、それらとの関係性等の検討を試みるために集成の項目に入れている。検討の対象時期については、古墳時代（前期・中期・後期・終末期）とし、主に田辺編年(注6)に準拠する。

本稿は、新村いづみと著者が幾度と勉強会を行い、その成果をまとめたものである。本文中の構成や内容については両者で協議を行った。各文の終わりには名前を記して文責とする。　　（松尾）

１．研究略史

管見であるが、北陸地域における渡来系遺物群の中では、福井県三方市獅子塚古墳出土の角杯形土器を研究の端初となす(注7)。その後、研究は低調になりつつも、1990年代から活発に議論が行われるようになる。以下では、北陸地域での個別に研究成果をまとめてみたい。

ⅰ）陶質土器

陶質土器の分布は一部能登地域に見られる他、古川登氏、入江文敏氏、川本紀子氏の集成(注8)により、越前・若狭地域に集中することが指摘されている。初期須恵器との区別が難しいことから、未だ未確定の遺物も少なくない。

ⅱ）初期須恵器

田嶋明人氏は共伴した須恵器による土師器編年の視点から初期須恵器の供給状況と地域相について言及した(注9)。吉岡康暢氏は加賀・能登地域においてその移入時期・遺跡・器種別に出土傾向を試みた。その結果、①主に集落・古墳から出土し、出土頻度はほぼ同等、②古墳祭式で多用される傾向があり、集落での使用に先行する、③用途に応じた器種の選択が行われた、④陶邑産が大半を占める、等を指摘した。さらに、分布状況から在地生産の前段階における流通機構の存在を示唆した(注10)。以降、初期須恵器の研究は、流通の問題に関連付けて行われる傾向にある。

ⅲ）移動式竈

田嶋明人氏は５世紀末～６世紀初頭を中心に、古墳時代に比定できるものは能登に集中し、７世紀からは北陸全体に分布する傾向を指摘した(注11)。また、樫田誠氏は能登一帯で５世紀末に集中する特異な状況について、同時期に盛行する製塩と王権への貢納に関わる儀式に関連するものとした(注12)。田中昌樹氏は竈形土製品として集成し、①日常的に使用されたものではないこと、②肩部が張る、凸帯をもつ、煙孔、把手孔をもつ等の役割や具体的な形態的特徴をまとめた。８世紀の出土品については、都城の律令祭祀とは異なる、火に係わる祭祀として使われた可能性を指摘した。また、額見町遺跡等の渡来系集団に関連した遺跡出土のものに関しては、二世、三世による製作を指摘している(注13)。

ⅳ）角杯形土器

６世紀を中心に美濃、若狭、加賀、能登等の地域に集中することから、継体伝承と結びつける説や、「日本書紀」垂仁紀にみえる渡来人説話との関連(注14)で考えられている。興道寺窯産の角杯が獅子塚古墳から出土したことについて、田辺昭三氏は地方窯と地方首長の関係性を指摘している(注15)。なお、具体的な用途については、朝鮮半島や大陸等の資料から類推した論考が見られる(注16)。建物からの出土例があることから、集落内での特異性について検討する必要がある。

ⅴ）朝鮮系軟質土器

望月精司氏は額見町遺跡出土の朝鮮系軟質土器について北陸型煮炊具の祖型として評価し、７世紀前半の白山市北安田北遺跡や加賀市千崎遺跡等で「朝鮮系軟質土器」と認識できる資料があることを指摘した。また、７世紀後半にみられる在地型土器の画期について、前段階に渡来系集団の地域参入と朝鮮系軟質土器の影響を考えた(注17)。これに関連して、樫田誠氏は、横穴系埋葬施設成立の様相に注目し、渡来系集団をはじめとした工人を一括する一定層が、横穴系の墓制を携えて地域参入を行ったと推測している(注18)。川本紀子氏は、福井市和田防町遺跡出土の軟質土器を検討し、在地土器に対する割合が極めて少ないことと、５～６世紀の緊迫した国際状況からそれらを「特殊な位置」を示す可能性を提起した(注19)。　（新村）

２．渡来系遺物群の個別検討

北陸地域において、渡来系遺物群が出土した遺跡は、管見で124遺跡を数えることができた。総じて水系ごとの主要な古墳群が付近にある集落や海辺・山間部から出土していることが看取される。

今回、検討するのは、渡来系工人に関係する陶質土器、初期須恵器、生活する場のＬ字形竈を付設する建物（住居）、日常生活で使用される道具で、煮炊具の移動式竈・甑、朝鮮系軟質土器、特殊な用途の角杯形土器等を対象としたい。本来ならば、個別実証的な作業手続きが必要不可欠であるが、今回は集成を基に傾向と特徴を概観する。ただし、個々の時期等は訂正している。集成に際しては、遺跡の所在地、立地、層位・遺構、遺物の種類、時期などの項目を設定し、基礎データとした。遺跡の性格は集落の存在が想定できる遺跡もその範疇に入れている。

ⅰ）陶質土器・初期須恵器

陶質土器とは、朝鮮半島で製作され日本に舶載された還元焔焼成の焼物とされ、一方、日本で製作された初期須恵器は、陶質土器の技術系譜上にあり、窖窯による還元焔焼成の焼き物とに分けて考えられている。ここでは、須恵器が定型化されるまでのTK208型式以前の範

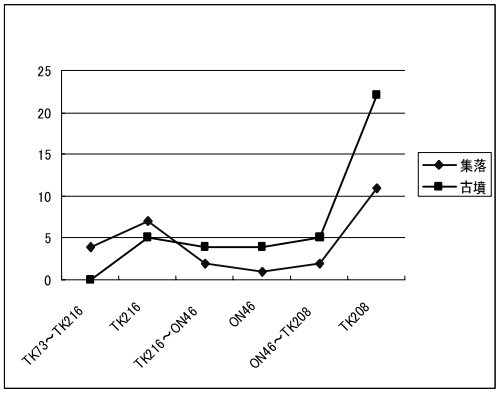


表１　初期須恵器　時期別量的変遷図

初期須恵器集成

遺跡名	性格	層位・遺構	時期(型式)	出土土器
相川中1号墳	古墳	墳丘	TK216	瓿、杯身、杯蓋
流通業務団地NO.7遺跡(5号墳)	古墳	墳丘	TK216	甕
流通業務団地NO.7遺跡(6号墳)	古墳	周溝	TK216	有蓋高杯身
上野1号墳	古墳	墳丘(採集)	TK216	大型瓿
向出山古墳2号墳	古墳	墳丘(採集)	TK216	壺、坩
和田山5号墳	古墳	墳丘	TK216～ON46	甕
和田山22号墳	古墳	周溝	TK216～ON46	甕
茶臼山1号墳	古墳	墳丘	TK216～ON46	台脚付短頸壺
茶臼山12号墳	古墳	墳丘	TK216～ON46	杯蓋、瓿、甕
二子塚10号墳	古墳	周溝	ON46	甕
二子塚19号墳	古墳	周溝	ON46	甕、杯身、器台
二子塚29号墳	古墳	周溝	ON46	壺
鳥越山古墳	古墳	不明	ON46	蓋、有蓋高杯、瓿、甕、器台
二子塚16号墳	古墳	周溝	ON46～TK208	甕
二子塚20号墳	古墳	周溝	ON46～TK208	甕
二子塚21号墳	古墳	周溝	ON46～TK208	短頸壺
二子塚33号墳	古墳	周溝	ON46～TK208	杯身
城光寺B2号墳	古墳	墳丘、周溝	ON46～TK208	瓿
イヨダノヤマ3号墳	古墳	墳丘	TK208	杯身、蓋、瓿、甕等
吸坂丸山5号墳	古墳	周溝	TK208	壺、瓿、蓋
国分高井山4号墳	古墳	周溝	TK208	杯蓋
赤浦古墳群	古墳	墳丘(採集)	TK208	有蓋高杯
小竹ガラボ山古墳	古墳	墳丘	TK208	甕、器台
茶臼山3号墳	古墳	周溝	TK208	大型瓿、瓿、甕
茶臼山6号墳	古墳	墳丘、周溝	TK208	有蓋高杯
和田山4号墳	古墳	周溝	TK208	杯、有蓋高杯、瓿
寺井山1号墳	古墳	墳丘(採集)	TK208	瓿、甕
二子塚23号墳	古墳	周溝	TK208	瓿、甕
二子塚36号墳	古墳	周溝	TK208	壺、甕
寺山古墳	古墳	墳丘(採集)	TK208	杯蓋、身、高杯
中川10号墳	古墳	墳丘(採集)	TK208	器台
西塚古墳	古墳	墳丘	TK208	高杯
村国山2号墳	古墳	古墳(採集)	TK208	瓿、壺
太田山古墳群6号方形周溝墓	古墳	墳丘表土	TK208	高杯
蟻子山古墳群	古墳	不明	TK208	大型瓿
飯綱山古墳群	古墳	不明	TK208	瓿
下山1号墳	古墳	石室内	TK208	大型瓿
下山3号墳	古墳	石室内	TK208	瓿
向出山古墳1号墳	古墳	石室	TK216～TK208	杯蓋、高杯、壺
矢田遺跡	集落	溝	TK73？	杯蓋、甕
中村畑遺跡	集落	住居、包含層	TK73～TK216	把手付椀、中型甕
道林寺Ⅰ遺跡	集落	住居	TK73～TK216	杯蓋、杯身、瓿
四柳ミッコ遺跡	集落	竪穴建物など	TK73～ON46	無蓋高杯、杯身、瓿
古府クルビ遺跡	集落	溝、住居	TK216	杯蓋
千崎遺跡	集落	住居	TK216	杯身
漆町遺跡	集落	溝	TK216	直口壺
高堂遺跡	集落	包含層	TK216	蓋杯
永町遺跡	集落	土坑	TK216	杯蓋
大菅波D遺跡	集落	溝	TK216	瓿、杯身等、甑
田伏遺跡	集落	包含層	TK216	杯身
上莇生田遺跡	集落	不明	TK216～ON46	大型瓿、瓿
犀川鉄橋遺跡	集落	不明	TK216～ON46	杯蓋、杯身、高杯
正友遺跡	集落	不明	ON46	把手付椀
二子塚遺跡	集落	住居	ON46	甕
北反畝遺跡	集落	包含層	ON46～TK208	杯身、甕、瓿、杷手付椀
永町ガマノマガリ遺跡	集落	土坑	ON46～TK208	杯蓋、甑
上河北遺跡	集落	不明	TK208	杯蓋、杯身、瓿
倉垣遺跡	集落	溝	TK208	杯蓋
若宮B遺跡	集落	住居、包含層	TK208	甕、杯蓋、身
草江丸山遺跡	集落	落ち込み	TK208	有蓋高杯、大型瓿
相神丸山遺跡	集落	不明	TK208	有蓋高杯、瓿
万行赤岩山遺跡	集落	住居	TK208	杯蓋
石塚遺跡	集落	不明	TK208	杯身
畑中遺跡	集落	不明	TK208	有蓋高杯、蓋
末町遺跡	集落	不明	TK208	高杯
畝田・寺中遺跡	集落	溝	TK208	杯身、無蓋高杯、瓿など
芦川八幡遺跡	集落	不明	TK208	大型瓿
中遺跡	集落	不明	TK73～TK208	杯身、高杯、器台等
竹生野遺跡	集落	包含層	TK216～TK208	把手付椀、杯身、杯蓋
高田遺跡	集落	包含層	TK216～TK208	樽型瓿、瓿、杯蓋、杯身、壺

陶質土器

遺跡名	性格	層位・遺構	時期	出土土器（種類）
剣神社隣接地遺跡	集落	不明	5C後～6C初	蓋、高杯
奥原遺跡	集落	包含層	6C	器台
当山美濃峠古墳	古墳	不明	6C前～前葉	高杯

表2　初期須恵器・陶質土器一覧表

移動式竈

遺跡名	性格	層位・遺構	時期	備考
柳田遺跡	集落	不明	5C末	
畝田・寺中遺跡	集落	溝	5C末～6C初	
高田遺跡	集落	土器溜(祭祀)	5C末～6C初(TK216～TK47)	
千崎遺跡	集落	住居	5C後～6C初	
水白モンショ遺跡	集落	包含層	5C末～6C前	
下開発遺跡	集落	包含層	5C末～6C前	
神代羽連遺跡	集落	不明	5C末～6C前	
中村畑遺跡	集落	溝	5C後～6C前	
矢田遺跡	集落	溝	5C末～6C	
久江C遺跡	集落	排水溝掘削	5C～6C	
曽福遺跡	集落	不明	6C	
指江B遺跡	集落	河道	6C	
中尾新保谷内遺跡	集落	不明	6C	
弓波遺跡	集落	川跡	6C	
奥原遺跡	集落	包含層	6C	
細口源田山遺跡	集落・古墳	包含層	6C後	
吉見浜遺跡	集落	不明	6C後～7C初	
浜禰遺跡	集落	不明	6C後～7C初	
利田横枕遺跡	集落	包含層	6C後～7C初	
麻生谷新生園遺跡	集落	溝、住居	6C末～7C初	
貝田C遺跡	集落	落ち込み	6C～7C	
松山C遺跡	集落	柱穴、溝	6C～7C?	
藤橋遺跡	集落	溝	7C前	
三室福浦B遺跡	集落	溝、包含層、鞍部	7C前	
額見町遺跡	集落	不明	7C前半、中葉	
薬師遺跡	集落	住居	7C中	
古府タブノキダ遺跡	集落	柱穴	7C	
末松A遺跡	集落	包含層	7C	
曽祢C遺跡	集落	河道、包含層	7C	
高畠テラダ遺跡	集落	不明	7C	
北安田北遺跡	集落	包含層、溝、住居	7C中～8C中	
寺家遺跡	集落	包含層、溝外、住居	7C～8C(TK47)	
末松ダイカン遺跡	集落	住居	7C末～8C初	
万尾遺跡	集落	不明	7C～8C前	

甑

遺跡名	性格	層位・遺構	時期	備考
二口かみあれた遺跡	集落	包含層、溝	4C	
千代・能美遺跡	集落	河道	4C	山陰系／小型
漆町遺跡	集落	溝	5C後半	
美岬・千崎B遺跡	集落	柱穴、土坑	5C後半	
潮津金場遺跡	集落	住居、土坑	5C後～末	
柳田遺跡	集落	不明	5C末	
谷内ブンガヤチ遺跡	集落	包含層	5C	
神野遺跡	集落	溝	5C	
神代羽連遺跡	集落	不明	5C末～6C前	
畝田・寺中遺跡	集落	溝	5C末～6C初	
曽福遺跡	集落	不明	6C	
指江B遺跡	集落	河道	6C	
弓波遺跡	集落	川跡	6C	
念仏林南遺跡	集落	住居	6C	
松山C遺跡	集落	柱穴、溝	6C～7C?	
額見町西遺跡	集落	住居	6C末～7C初	
柳田シャコデ遺跡	集落	住居	7C初	
四柳白山下遺跡	集落	包含層	7C初	
徳久荒屋遺跡	集落	包含層、柱穴	7C前	
下開発遺跡	集落	包含層	7C前	
額見町遺跡	集落	住居	7C前半、中葉	
田上西遺跡	集落	竪穴住居	7C	
犀川鉄橋遺跡	集落	不明	7C	
篠原遺跡	集落	土坑、包含層	7C	
春木黍谷遺跡	集落	土坑・包含層	7C後半	
北安田北遺跡	集落	包含層 溝、住居	7C中～8C中	
沢ソウダケ遺跡	集落	不明	7C～8C	
太田ツツミダ遺跡	集落	不明	7C～8C	
寺家遺跡	集落	包含層、溝外、住居	7C～8C	
赤浦やまあと遺跡	製塩	製塩遺構	8C	
武部ショウブダ遺跡	集落	包含層	8C	

表3　移動式竈・甑一覧表

疇で捉える(注20)。

陶質土器についての報告例は、北陸地域で３例を数えることができるが、確実な陶質土器とするには慎重になる必要がある。しかし、初期須恵器としても、技法、文様等の特徴から朝鮮半島の中でも系譜が追えるものもあり、類似品があることから、北陸地域でも特に若狭・越前地域では渡来系工人が移入し在地窯で製作した可能性が高い。

初期須恵器については、散見的に出土しており、古墳・集落に分けて量的変遷を検討する。まず、古墳ではTK208期に増加する傾向がある。各地域で形成された古墳群の中でもこの傾向は、捉えられ、従来の祭式に須恵器の供献具としての役割が高まったといえよう。それ以降となると、既往研究(注21)で示されたようにTK23～47期で、より増加することが認められる。器種は、杯、高杯、壺、甕、瓿等が出土しているが、甕、瓿の出土率が高い。中でも貯蔵具として機能性が優れている甕の有効性が認められていることを示す。一方、集落からはTK73期で散発的に出現する。TK216期からは低調であるものの、TK208期で増加する。特に、三湖台地域では該当時期に分布が密となる現象は、政治的基盤・その後の須恵器生産等を考える上で示唆的である。また、分布状況からは、若狭・越前地域で、新羅系の土器が出土している他、各地域の主な水系の流域ごとに構築された主要な古墳群と集落から出土していることが指摘できる。

ⅱ）建物

L字形竈を付設する建物は、北陸地域の中でも南加賀地域の特定できる地域で発見されている。この竈については、その系譜を高句麗等の朝鮮半島北部や朝鮮半島南部に求める論考がある(注22)が、いずれにせよ、系譜を辿れる渡来人の生活痕跡として認めることができる。当該遺構は現在のところ、特定の地域に６世紀末～７世紀初頭に出現し、建物形態を変えながらも構築され、短期間で終焉する状況が看取される。その事象はその地域における政治的・生産的動向を考える上で示唆に富む。

ⅲ）移動式竈

移動式竈は古墳時代中期に出現し、甑と甕（鍋）をセットとして使用する煮炊具の一つで、新しい生活様式の特徴的な土器といえよう。６世紀になると一定量存在する。形態的特徴を見ていくと、能登地域と加賀地域では地域性が認められ、加賀地域でもさらに小地域によって特性が見出される。また、底部の製作技法にも特徴があり、多様性が認められる。

ⅳ）甑

移動式竈と甕（鍋）をセットとして使用される煮炊具の一つである。前期には弥生土器の系譜を引いた底部に穿孔した甕を使用していた例が散見されるが、５世紀後半から筒状の体部をもち、底部に孔がある把手のついた土器が増加傾向を示す。特に、指江Ｂ遺跡出土の甑の把手には切り込みが認

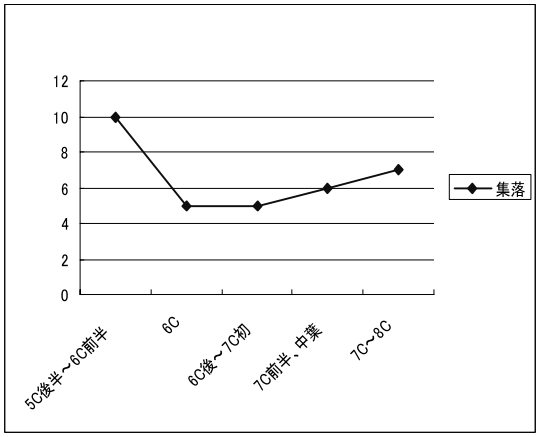


表４　移動式竈　時期別量的変遷図

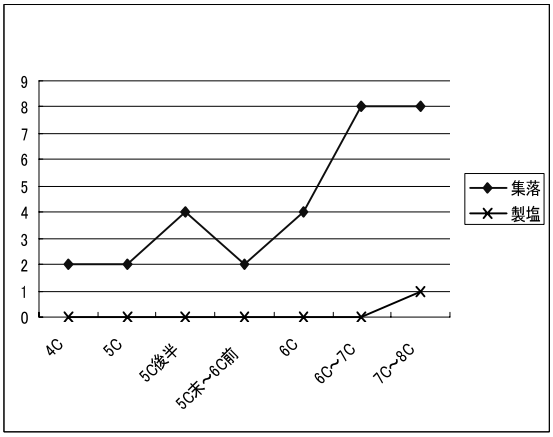


表５　甑　時期別量的変遷図

められ、その製作にあたっては渡来人が関わったと推測する。また、底部に注目すると、中能登町谷内ブンガヤチ遺跡、金沢市神野遺跡、加賀市永町ガマノマガリ遺跡等では多孔が認められるが、他には底部がない形態が多いことが指摘でき、さらに口縁部の形態から各地域に特徴的な様相を捉えることができる。弥生時代からの甕底部を穿孔したものから把手のついた新しい形態の甑への導入期を４世紀から５世紀の中に認めることができよう。さらに、この甑の製作技法には須恵器製作技法を用いた６世紀後葉～７世紀前半にも認められる。

ⅴ）朝鮮系軟質土器

「軟質土器」(注23)、または「朝鮮系軟質土器」(注24)で呼称されているが、概念としては後者に相当する。近年、資料が増加しつつあり、再検討を行う必要のあるものも認められる(注25)。土器は在地で製作されつつも、技法は朝鮮半島に求めることができるため、直接・間接的に渡来人の移入が考えられる。傾向については、４世紀後半～５世紀前半頃に越前地域でみられ、５世紀後半以降、加賀地域に点在する状況が認められる。７世紀代には特定の地域に集中的に認められるが、短期間である。周辺の須恵器窯や古墳群の造営等の政治的・社会的な動向を考える上で示唆的である。

ⅵ）その他の特殊な遺物

特殊な須恵器としては、特殊器台や角杯形土器等がある。これらは５世紀後半から出現し、微量ながら広範囲に点在する。６世紀代の特殊器台は集落から出土しており、朝鮮半島での伝統的な儀式・儀礼を保持した渡来系集団の存在が想起される。一方、古墳からは百済系の壺や鈴付き高杯等が出土しており、被葬者の系譜を窺う資料が散見される。生産地は各地域にある須恵器窯であり、搬入品は現在認められず、須恵器窯の工人集団の出自や、それらを統括した首長層、消費地である集落の中の構成員との関係性が有機的であることが指摘できる。特筆すべきは、志賀町オハイノヤマＡ遺跡から出土した土師器の角杯形土器である。能登半島基部の海岸に立地しており、製塩に関係した集団の存在が示唆され、弥生時代後期から古墳時代前期前半頃において渡来人がその地域に移入していたことが窺える。なお、付記ではあるが、７世紀後半～８世紀前には、半瓦当が出土している例が散見される。その周辺には寺院の存在が示唆される。これらは在地で製作されたと考えられ、渡来系専門工人とそれを統括（庇護）する支配者層の存在が想定でき、階層集団の性格も窺える。　　（松尾）

３．まとめにかえて

上記の検討を基に渡来系遺物群の動態をまとめ、考察を行いたい。性格別に傾向を窺うと、集落からの出土が多く、ついで古墳となる。前者からは初期須恵器、移動式竈、角杯形土器が５世紀後半になると散見される。海辺や山間部に分布することは周辺にある材料を基とする生産に関係していることが推測され、生産基盤・手工業生産を考える上で示唆的である。一方、後者では初期須恵器が５世紀後半（特にTK208段階）から増加する傾向(注26)にあるのは、副葬品として須恵器が供献具としての役割を担ったことで理解できる。各地域での葬送儀礼や祭式に変化が生じたと推察されるが、汎的とはいえないことに往時の状況を示していると考えられよう。また、北陸地域における初期須恵器の移入が即渡来人とはいえなくとも、各地域における出土状況を考慮すると無関係とは言い切れない。６世紀代になると、須恵器窯が越前、南加賀、能登、越中の各地域で点在して操業されるようになり、供給が始まる。それまでの葬送・祭式に伴う供献具から供膳具としても機能変化の移行が行われるようになり、各地で生活様式の変移が認められる。７世紀では、須恵器技法でもって土師器の食膳具が製作されるようになり、集落でも量が増加し、分布密度も高くなる。

これらの５世紀後半から各段階にわたって渡来系遺物が生産に関わる遺跡から出土している現象

は、断続的に渡来人の工人が須恵器生産等の手工業生産に関与していたと考えられ(注27)、生産組織の再編とそれらに影響された生活様式の変化が窺える。

また、初期須恵器と他の遺物群との関係性は注意でき、生活様式の先導役を担っていた可能性を示唆する。初期須恵器の動態と拡散については、断続的かつ継続的に渡来人が移入してきた可能性があり、これらの具体的な検証が課題となる。

以上、渡来系土器群を検討すると、それぞれの時期的変移が重なることが指摘できる。つまり、社会的な変革があったことが認められる。中でも、須恵器の導入と各地域での拡散、土師質土器への須恵器技法導入は、工人や技術の再編（整理・統合）が段階的かつ断続的に行われ、経済的にも政治的介入が強化されたと考えられる。小地域ごとの断続的な渡来系遺物群の移入は政治的支配下における組織の再編・強化を具現化した事象の一側面として考えられよう。

遺物・遺構	時期	集落	古墳	窯跡	製塩	合計
陶質土器	5C後～6C初	1	0	0	0	1
	6C	1	0	0	0	1
	6C前～前葉	0	1	0	0	1
初期須恵器	TK73～TK216	4	0	0	0	4
	TK216	7	5	0	0	12
	TK216～ON46	2	4	0	0	6
	ON46	1	4	0	0	5
	ON46～TK208	2	5	0	0	7
	TK208	11	22	0	0	33
	TK216～TK208	2	1	0	0	3
L字形竈付設建物	6C末～7C初	1	0	0	0	1
	7C前半、中葉	3	0	0	0	3
移動式竈	5C後半～6C前半	10	0	0	0	10
	6C	5	0	0	0	5
	6C後～7C初	5	0	0	0	5
	7C前半、中葉	6	0	0	0	6
	7C～8C	7	0	0	0	7
甑	4C	2	0	0	0	2
	5C	2	0	0	0	2
	5C後半	4	0	0	0	4
	5C末～6C前	2	0	0	0	2
	6C	4	0	0	0	4
	6C～7C	8	0	0	0	8
	7C～8C	8	0	0	1	9
朝鮮系軟質土器	4C後～5C前半	2	0	0	0	2
	5C	1	0	0	0	1
	5C後～6C初	1	0	0	0	1
	6C	2	0	0	0	2
	7C前半、中葉	1	0	0	0	1
特殊須恵器	5C後半	1	0	0	0	1
	6C	2	3	0	0	5
	6C末～7C前半	2	2	1	0	5
角杯形土器	3～4C	1	0	0	0	1
	5C後半～6C前半	1	0	1	0	2
	6C～7C	2	1	0	0	3
瓦（半瓦当）	7C後半～8C	1	0	0	0	1
	8C前半	1	0	0	0	1
合計		114	48	2	1	165

表６　渡来系遺物群　時期／性格出土傾向表（新潟は除く）

今後の課題としては、詳細な個別実証的な検討を基に集落における構造の変化、鉄器生産・塩生産・玉生産・埴輪生産(注28)等の手工業生産の動向等といった社会的特質を個別研究から理解する必要がある。さらに、古墳群の趨勢や九州系・畿内系横穴式石室の段階的な影響(注29)・横穴墓の偏在性を包括した巨視的な政治構造も考えていかなればならない。　（松尾・新村）

おわりに

以上、渡来系遺物群として集成したが、本来ならば、個別に詳細に遺物の特徴を把握し、形式・型式を設定することにより、歴史の縦軸と横軸を明らかにする作業が必要であるが、型式設定や分類を行うには、さらなる資料の増加を待たなければならず、個別実証的な作業までいたらなかった。今後の課題としたい。また、集成したデータの不統一が生じたことや今回、林氏から貴重なデータを提供して頂き、また望月氏から貴重なご教示を頂いたのにもかかわらず、活かしきれなかったのは反省すべきである。今後の自戒としたい。本稿が北陸地域における古墳時代研究の一視点となる契機になれば幸甚である。また、ご批判・ご教示いただけば幸いです。

最後になりましたが、以下の方々にご教授・ご教示頂きました。氏名を記して感謝の意とします。

荒川和哉、大西　顕、立原秀明、津田隆志、林　大智

久田正弘、松尾洋平、宮川勝次、望月精司、安中哲徳

【補注】

1．鈴木靖民編2002『倭国と東アジア』吉川弘文館　その他参考文献を参照。

2．韓式系土器研究会『韓式系土器研究Ⅰ～Ⅶ』

3．本稿では、「北陸地域」を便宜的に旧若狭・越前・加賀・能登・越中（糸魚川以西）を一範囲として設定する。

4．湊哲夫2003「渡来人と古代国家形成」『渡来人』津山郷土博物館

5．山田邦和1999「須恵器生産系譜論の現状」『考古学に学ぶ―遺構と遺物―』同志社考古学大学シリーズⅦ　森浩一・松藤和人編　同志社大学考古学シリーズ刊行会

6．田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

7．福井県1986『福井県史』資料編13　考古

8．川本紀子2003「越前・若狭における韓半島系土器の一様相」『北陸古代土器研究』第10号　北陸古代土器研究会

9．田嶋明人1987「在地窯の成立と土師器～越前、加賀、能登、越中の状況」『第８回三重シンポジウム　東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第Ⅲ分冊北武蔵古代文化研究会

10. 吉岡康暢1991『日本海域の土器・陶器（古代編）』六興出版

11. 和歌山県埋蔵文化財研究会1992『古代の竈を考える　第３冊』

12. 樫田誠1999「北陸における古墳時代中・後期の様相－南加賀地域における事例を中心として－」第46回埋蔵文化財研究集会実行委員会『渡来人の受容と展開－５世紀における政治的・社会的変化の具体相－』

13. 田中昌樹2003「北陸地域の「竈形土製品」について」『富山考古学研究－紀要第６号』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

14. 石川県立埋蔵文化財センター1982『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　志賀町中村畑遺跡・志賀町女郎塚遺跡』

15. 同注６文献

16. 入江文敏1988「角杯形土器小考」『網干善教先生華甲記念考古學論集』網干善教先生華甲記念会

17. 望月精司1999「北陸型煮炊具の出現と成立過程－加賀地域及び小松市額町遺跡の事例検討を中心として－」『北陸の考古学』石川考古学研究会

18. 同注12文献

19. 同注８文献

20. 同注６文献

21. 同注９文献

22. 合田幸美1995「朝鮮半島の竈」『研究紀要』Vol. 2（財）大阪文化財センター

23. 植野浩三1987「韓式系土器の名称と分類」『韓式系土器研究』１　韓式系土器研究会

24. 今津啓子1994「渡来人の土器」『ヤマトの王権と交流の諸相』古代王権交流５　荒木敏夫編　名著出版

25. 加賀市弓波遺跡出土例では、所属時期が４世紀代に比定されるが、出土状況から５世紀後半の須恵器杯身が付近で出土しており、時期設定についてはこの時期に相当すると考える。また、金沢市二口六丁遺跡出土例には、朝鮮系軟質土器として認められるものもあり（林大智氏ご教示）、今後、検証が必要となる。

26. 同注14文献

27. 同注16文献

28. 三浦俊明2006「北陸における須恵器系埴輪の生産」『考古学ジャーナル』No. 541　ニューサイエンス社

29. 伊藤雅文1993「北陸地方」『季刊考古学』第45号　雄山閣
伊藤雅文2002「北陸の終末期古墳の特質」『シンポジウム　前方後円墳以後の古墳と週末』第10回東北・関東前方後円墳研究会大会実行委員会編集　東北・関東前方後円墳研究会

（３・４含む）５世紀後半（３・４世紀含む）			
番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	相神丸山遺跡	35	古府クルビ遺跡
2	高田遺跡	36	神野遺跡
3	貝田Ｃ遺跡	37	相川中１号墳
4	草江丸山遺跡	38	寺井山１号墳
5	中村畑遺跡	39	下開発遺跡
6	オハイノヤマＡ遺跡	40	和田山古墳群
7	赤浦古墳群	41	茶臼山古墳群
8	国分高井山４号墳	42	高堂遺跡
9	矢田遺跡	43	漆町遺跡
10	万行赤岩山遺跡	44	千代・能美遺跡
11	小竹ガラボ山古墳	45	潮津金場遺跡
12	水白モンショ遺跡	46	大菅波Ｄ遺跡
13	久江Ｃ遺跡	47	二子塚古墳群
14	谷内ブンガヤチ遺跡	48	吸坂丸山５号墳
15	四柳ミツコ遺跡	49	二子塚遺跡
16	倉垣遺跡	50	永町ガマノマガリ遺跡
17	二口かみあれた遺跡	51	永町遺跡
18	竹生野遺跡	52	千崎遺跡
19	正友遺跡	53	千崎Ｂ遺跡
20	イヨダノヤマ３号墳	54	中川10号墳
21	柳田遺跡	55	和田防町遺跡
22	城光寺Ｂ２号墳	56	上河北遺跡
23	寺山古墳	57	上荻生田遺跡
24	神代羽連遺跡	58	太田山古墳　６号方形周溝墓
25	加納横穴	59	中角遺跡
26	上野１号墳	60	末町遺跡
27	北反畝遺跡	61	剣地神社隣接地遺跡
28	道林寺Ⅰ遺跡	62	畑中遺跡
29	石塚遺跡	63	村国山２号墳
30	流通業務団地 NO.7遺跡(5･6号墳)	64	中遺跡
31	若宮Ｂ遺跡	65	向出山古墳群
32	畝田寺中遺跡	66	三生野遺跡
33	二口六丁遺跡	67	西塚古墳
34	犀川鉄橋遺跡	68	鳥越山古墳

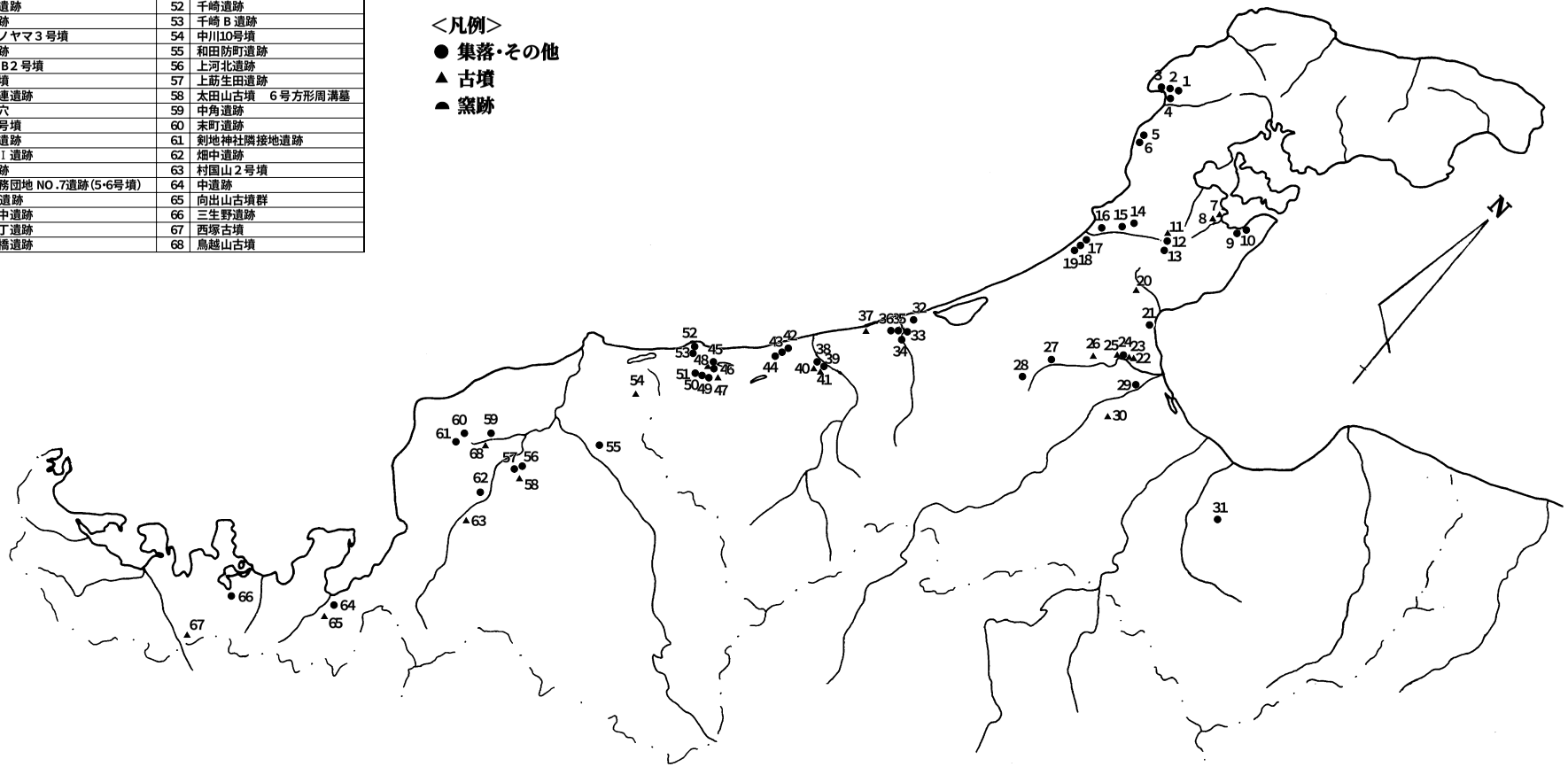


図１　渡来系遺物群遺跡分布状況（３～５世紀）

６世紀	
番号	遺跡名
1	高田遺跡
2	貝田Ｃ遺跡
3	曽福遺跡
4	白馬ナブラ山１号墳
5	矢田遺跡
6	水白モンショ遺跡
7	久江Ｃ遺跡
8	中尾新保谷内遺跡
9	上久津呂中屋遺跡
10	神代羽連遺跡
11	麻生谷新生園遺跡
12	利田横枕遺跡
13	指江Ｂ遺跡
14	畝田寺中遺跡
15	古府クルビ遺跡
16	旭遺跡
17	下開発遺跡
18	矢田野エジリ古墳
19	林タカヤマ窯跡
20	額見町西遺跡
21	念仏林南遺跡
22	松山Ｃ遺跡
23	弓波遺跡
24	千崎遺跡
25	当山美濃峠古墳
26	剣地神社隣接地遺跡
27	興道寺窯跡
28	獅子塚古墳
29	吉見浜遺跡
30	浜禰遺跡
31	二子山３号墳

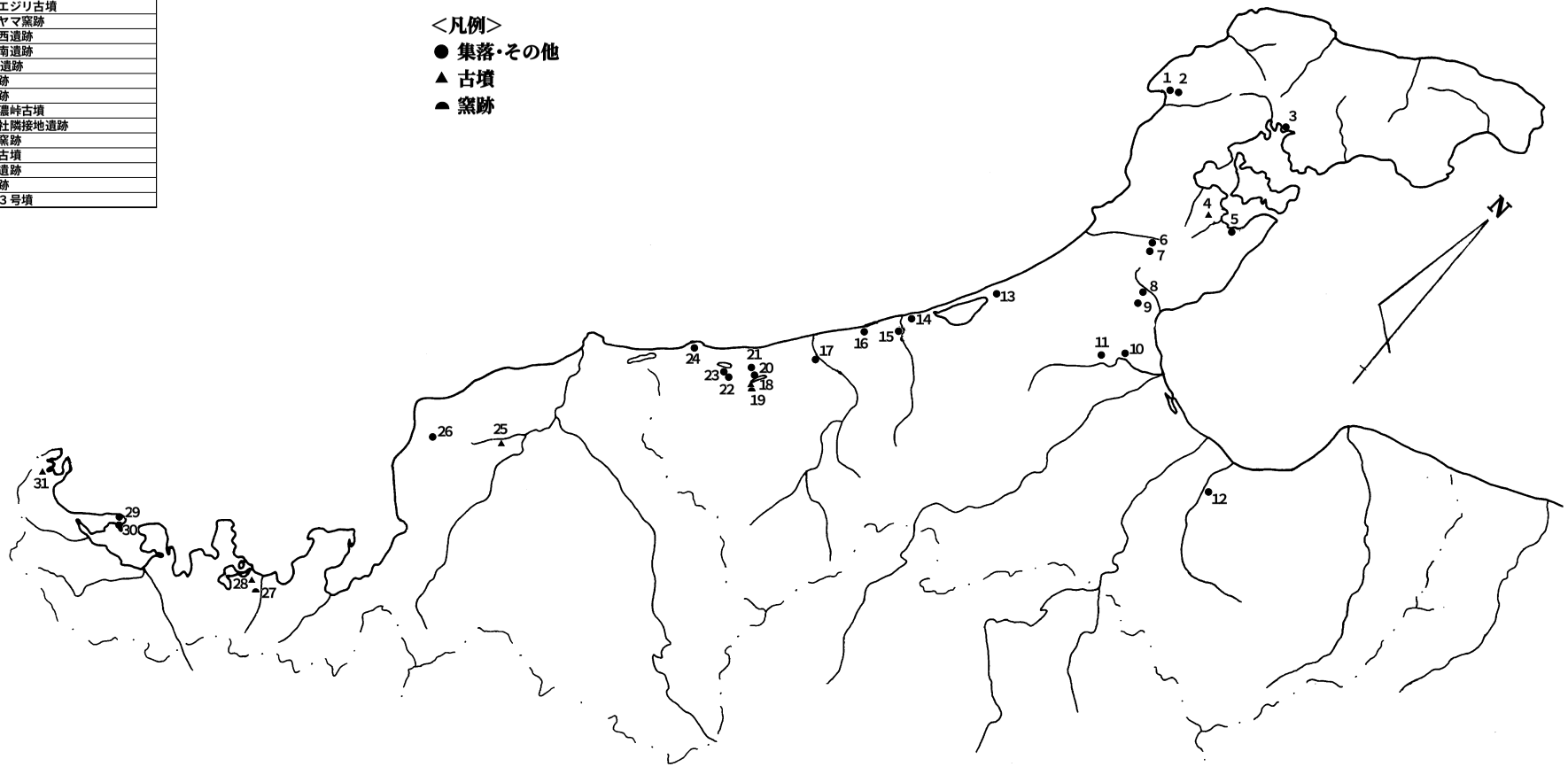


図２　渡来系遺物群遺跡分布状況（６世紀代）

７世紀	
番号	遺跡名
1	貝田Ｃ遺跡
2	三室福浦Ｂ遺跡
3	古府タブノキダ遺跡
4	藤橋遺跡
5	白馬ナブラ山１号墳
6	青木黎谷遺跡
7	沢ソウダケ遺跡
8	四柳白山下遺跡
9	太田ツツミダ遺跡
10	寺家遺跡
11	柳田シャコデ遺跡
12	武部ショウブダ遺跡
13	高畠テラダ遺跡
14	曽祢Ｃ遺跡
15	万尾遺跡
16	上久津呂屋遺跡
17	麻生谷新生園遺跡
18	利田横枕遺跡
19	塚崎８号横穴
20	高岡町遺跡
21	田上西遺跡
22	末松ダイカン遺跡
23	末松遺跡
24	北安田北遺跡
25	徳久荒屋遺跡
26	下開発遺跡
27	薬師遺跡
28	額見町西遺跡
29	額見町遺跡
30	矢田野遺跡
31	林タカヤマ窯跡
32	松山Ｃ遺跡
33	篠原遺跡
34	敷地天神山遺跡
35	吉見浜遺跡
36	浜禰遺跡

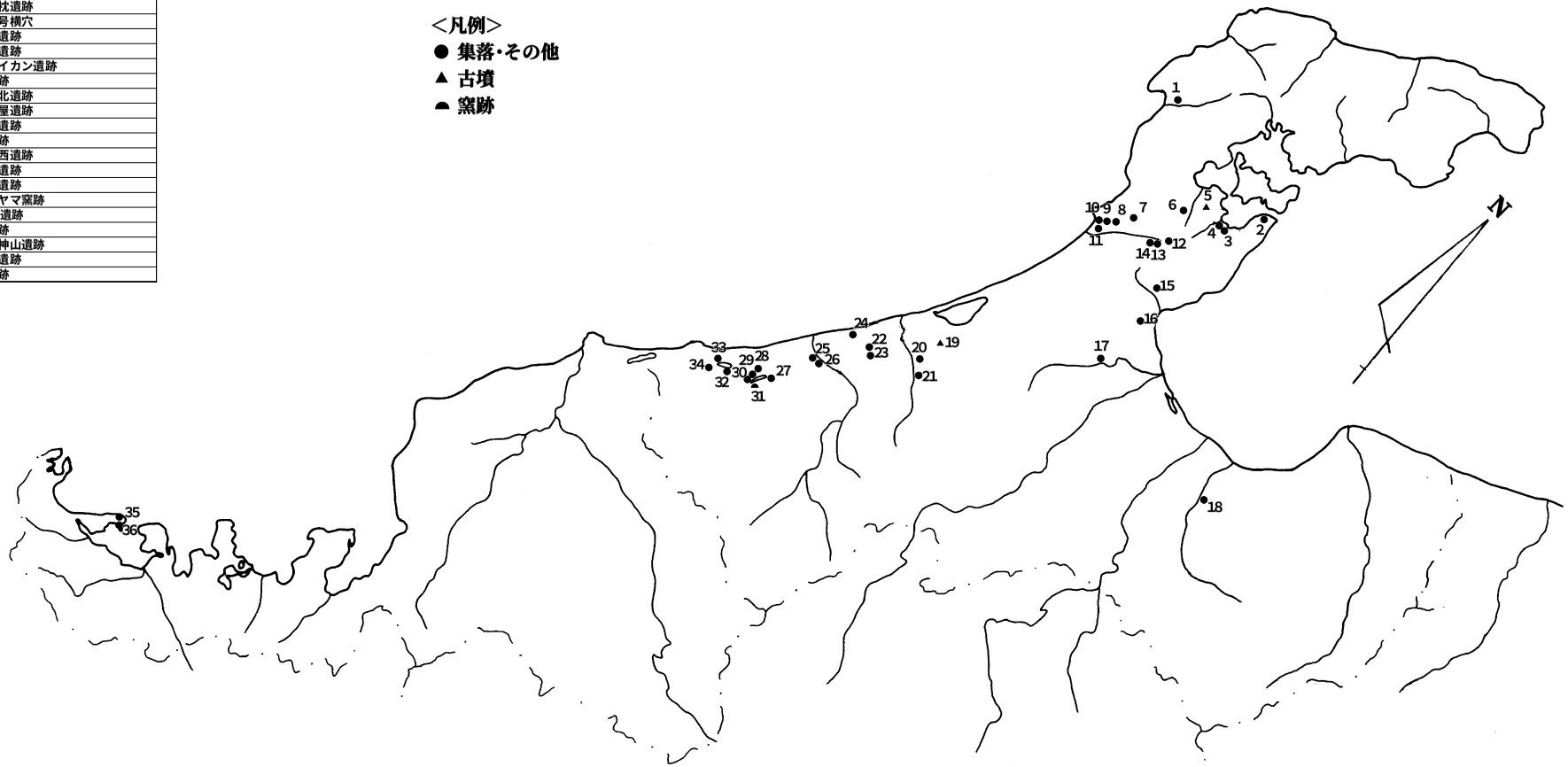


図３　渡来系遺物群遺跡分布状況（７世紀代）

No.	地域	遺跡名	所在地	新市町村名	立地	性格	出土層位・遺構	器種（遺物）	時期	備考	文献
1	若狭	吉見浜遺跡	大飯郡大島	おおい町	砂丘	集落	不明	土師器　移動式竈	6C 後半～7C 初		田中晶樹2003「北陸地域の竈形土製品について」『富山考古学研究紀要』第6号富山県埋蔵文化財調査事務所
2		浜禰遺跡	大飯郡大島	おおい町	砂丘	集落	不明	土師器　移動式竈	6C 後半～7C 初		福井県1966『若狭大飯－大飯郡大飯町考古学調査報告』
3		獅子塚古墳	三方郡美浜町郷市	美浜町	沖積平野	古墳	墳丘	須恵器　角杯	6C 初～6C 代	興道寺窯跡産 ベンガラ使用	福井県1986『福井県史資料編13－考古』 上田三平1922　『福井縣史蹟勝地調査報告』
4		興道寺窯跡	三方郡美浜町郷市	美浜町	丘陵	窯跡	窯内	須恵器　角杯（MT15）	6C 初～6C 代	興道寺窯跡産	美浜町教育委員会1980『興道寺窯跡発掘調査概報』 福井県窯業誌編纂委員会1983『福井県窯業誌』
5		織田遺跡	丹生郡織田町	越前町	沖積地	集落	不明	陶質土器　有蓋高杯	5C 代	検証の必要あり	石川県郷土資料館1981『須恵器』
6		剣神社隣接地遺跡	丹生郡織田町	越前町	沖積地	集落	不明	須恵器　杯蓋、高杯	5C 後半～6C 初		川本紀子2003「越前・若狭における韓半島系土器の一様相」 『北陸古代土器研究』第10号北陸古代土器研究会
7		中川10号墳	坂井郡金津町中川	あわら町	丘陵	古墳	墳丘（採集）	須恵器　器台（TK208）	5C 後半		福井県教育委員会1975『太田山古墳群』 福井県郷土誌懇談会1976『太田山古墳群と糞置庄』
8		西塚古墳	遠敷郡上中町脇袋	若狭町	丘陵	古墳	墳丘	須恵器　高杯（TK208）	5C 後半		吉岡康揚1991「北陸の初期須恵器」 『日本海域の土器』（古代・中世編）六興出版
9		三生野遺跡	遠織郡上中町	若狭町	沖積地	集落	不明	須恵器　台付長頸壺	5C 後半		川本紀子2003「越前・若狭における韓半島系土器の一様相」 『北陸古代土器研究』第10号北陸古代土器研究会
10		二子山3号墳	遠織郡高浜町	高浜町	丘陵	古墳	不明	須恵器　百済系平底壺	6C 初		川本紀子2003「越前・若狭における韓半島系土器の一様相」 『北陸古代土器研究』第10号北陸古代土器研究会
11		畑中遺跡	鯖江市	鯖江市	沖積地	集落	不明	須恵器　杯蓋、有蓋高杯（TK208）	5C 後半		福井県教育委員会1975　『太田山古墳群』 福井県郷土誌懇談会1976『太田山古墳群と糞置庄』
12		村国山2号墳	武生市村国	越前市	丘陵	古墳	古墳（採集）	須恵器　壺、𤭯（TK208）	5C 後半		吉岡康揚1991「北陸の初期須恵器」 『日本海域の土器』（古代・中世編）六興出版
13		向出山古墳　1号墳	敦賀市吉河	敦賀市	丘陵	古墳	石室	須恵器　高杯、壺、杯蓋（TK216～TK208）	5C 後半		吉岡康揚1991「北陸の初期須恵器」 『日本海域の土器』（古代・中世編）六興出版
14		向出山古墳　2号墳	敦賀市吉河	敦賀市	丘陵	古墳	墳丘（採集）	須恵器　坩、壺（TK216）	5C 後半		吉岡康揚1991「北陸の初期須恵器」 『日本海域の土器』（古代・中世編）六興出版
15		中遺跡	敦賀市中町	敦賀市	扇状地	集落	不明	須恵器　高杯、器台、杯身（TK73～TK208）	5C 前半～中頃	検証の必要あり	川本紀子2003「越前・若狭における韓半島系土器の一様相」 『北陸古代土器研究』第10号北陸古代土器研究会 （未報告資料に多数の初期須恵器有り）
16		太田山古墳群 6号方形周溝墓	福井市帆谷他	福井市	丘陵	古墳	墳丘表土	須恵器　高杯（TK208）	5C 後半	陶邑産	福井県教育委員会1975『太田山古墳群』 福井県郷土誌懇談会1976『太田山古墳群と糞置庄』
17		末町遺跡	福井市末町	福井市	沖積地	集落	不明	須恵器　高杯（TK208）	5C 後半		福井県教育委員会1975『太田山古墳群』 福井県郷土誌懇談会1976『太田山古墳群と糞置庄』
18		上莇生田遺跡	福井市上河北町・ 上莇生田町	福井市	沖積平野	集落	不明	須恵器　𤭯、大型𤭯（TK216～N46）	5C 後半		福井市1990『福井市史』資料編考古 川本紀子2003「越前・若狭における韓半島系土器の一様相」 『北陸古代土器研究』第10号北陸古代土器研究会
19		上河北遺跡	福井市上河北町	福井市	沖積地	不明	不明	須恵器　杯身、𤭯、杯蓋（TK208）	5C 後半		吉岡康揚1991「北陸の初期須恵器」 『日本海域の土器』（古代・中世編）六興出版
20		和田防町遺跡	福井市和田中町	福井市	沖積平野	集落	不明	朝鮮系軟質土器　甕	5C 前半		福井市1990「和田防町遺跡」『福井市史』資料編考古 川本紀子2003「越前・若狭における韓半島系土器の一様相」 『北陸古代土器研究』第10号北陸古代土器研究会
21		当山美濃峠古墳	丹生郡清水町	福井市	丘陵	古墳	不明	陶質土器　高杯	6C 前半	検証の必要あり	川本紀子2003「越前・若狭における韓半島系土器の一様相」 『北陸古代土器研究』第10号北陸古代土器研究会
22		中角遺跡	福井市中角町	福井市	沖積地	集落	不明	朝鮮系軟質土器　甕	4C 後半～ 5C 後半	口縁は布留系 頸部に格子叩きあり	川本紀子「越前・若狭における韓半島系土器の一様相」 『北陸古代土器研究』第10号2003北陸古代土器研究会
23		鳥越山古墳	松岡町	永平寺町	丘陵	古墳	不明	須恵器　甕、有蓋高杯、𤭯、 器台、杯蓋（ON46）	5C 後半	副葬品に馬具あり	松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会2005 『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳』
24	加賀	指江B遺跡	宇ノ気町	かほく市	丘陵裾	集落	河道	須恵器　特殊器台 土師器　移動式竈、甑、特殊器台 朝鮮系軟質土器　把手	5C 後半～6C 代	在地産 切り込みあり	石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002 『宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡』

表７　渡来系遺物一覧表

No.	地域	遺跡名	所在地	新市町村名	立地	性格	出土層位・遺構	器種（遺物）	時期	備考	文献
25	加賀	大根布砂丘遺跡	内灘町大根布町	内灘町	砂丘	集落	不明	土師器　杷手付椀	5～6C 代		内灘町1982『内灘町史』
26		畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西	金沢市	沖積平野	集落	溝	須恵器　無蓋高杯、甕、杯身（TK208）など 土師器　移動式竈、甑	5C 後半～6C 初	鉄滓あり	金沢市2004『金沢市史』資料編9考古
27		古府クルビ遺跡	金沢市古府町	金沢市	沖積平野	集落	溝、竪穴建物	須恵器　杯蓋（TK216）	5C 後半～6C 初		石川県教育委員会1972『金沢市古府クルビ遺跡（第1･2次）』
28		犀川鉄橋遺跡	金沢市大豆田本町・本江町	金沢市	洪積台地	集落	不明	須恵器　杯身、高杯、杯蓋（TK216～ON46） 土師器　甑	5C 中～後半・7C 代		（財）石川県埋蔵文化財センター1982『犀川鉄橋遺跡』
29		神野遺跡	金沢市神野町	金沢市	沖積平野	集落	溝	土師器　甑	5C 代	底面は多孔	金沢市教育委員会･金沢市埋蔵文化財センター2001『金沢市神野遺跡』II
30		田上西遺跡	金沢市田上町	金沢市	沖積平野	集落	竪穴建物	土師器　甑	7C 代	把手に切り込み有り	金沢市教育委員会･金沢市埋蔵文化財センター2000『金沢市田上西遺跡－田上遺跡群Ⅰ－』
31		二口六丁遺跡	金沢市二口町	金沢市	沖積地	集落	不明	朝鮮系軟質土器　甕	5C 代	口縁部は受口頸部は格子叩き	金沢市教育委員会･金沢市埋蔵文化財調査委員会･金沢市建設部駅西開発課1983『金沢市二口六丁遺跡』
32		塚崎8号横穴	金沢市塚崎町	金沢市	沖積平野	横穴墓	横穴墓	須恵器　平底短頸壺	7C 前半		金沢市1999『金沢市史』資料編19考古
33		高岡町遺跡	金沢市高岡町	金沢市	台地	集落	包含層	半瓦当	7C 後半	非在地産？検証の必要あり	（財）金沢市埋蔵文化財センター2003『高岡町遺跡』II 金沢市
34		相川中1号墳	松任市北相川	白山市	沖積地	古墳	墳丘	須恵器　杯身、杯蓋、甕（TK216）	5C 後半	古墳は現在消滅	松任市教育委員会1967『加賀三浦遺跡の調査』
35		北安田北遺跡	松任市北安田町	白山市	沖積地	集落	包含層 溝、竪穴建物	土師器　移動式竈、甑	7C 中頃～8C 中頃	鉄滓あり	松任市教育委員会1992『北安田北遺跡』Ⅳ
36		旭遺跡	松任市一塚町	白山市	沖積地	集落	竪穴建物	土師器　杷手付椀	6C 代		松任市教育委員会1995『旭遺跡群』II
37		末松A遺跡	野々市町末松・中林	野々市町	扇状地	集落	包含層	土師器　移動式竈	7C 代	鞴の羽口あり	石川県教育委員会･（財）石川県埋蔵文化財センター2005『野々市町末松遺跡』
38		末松ダイカン遺跡	野々市町末松	野々市町	扇状地	集落	竪穴建物	土師器　移動式竈	7C 末～8C 初		石川県教育委員会･（財）石川県埋蔵文化財センター2000「末松ダイカン遺跡」『野々市町末松遺跡群』
39		下開発遺跡	辰口町下開発	能美市	扇状地	集落	包含層	土師器　移動式竈、甑	5C 末～6C 前半・7C 前半	竈は未報告	（財）石川県埋蔵文化財センター1988『辰口西部遺跡群』I
40		徳久荒屋遺跡	辰口町下開発	能美市	扇状地	集落	包含層 柱穴	土師器　甑	7C 前半		（財）石川県埋蔵文化財センター1988『辰口西部遺跡群』I
41		茶臼山1号墳	辰口町下開発	能美市	丘陵	古墳	墳丘	須恵器　台脚付短頸壺（TK216～ON46）	5C 後半		辰口町教育委員会1982『辰口町下開発茶臼山古墳群』I 辰口町教育委員会2004『辰口町下開発茶臼山古墳群』II
42		茶臼山3号墳	辰口町下開発	能美市	丘陵	古墳	周溝	須恵器　甕、甕、大型甕（TK208）	5C 後半		辰口町教育委員会1982『辰口町下開発茶臼山古墳群』I 辰口町教育委員会2004『辰口町下開発茶臼山古墳群』II
43		茶臼山6号墳	辰口町下開発	能美市	丘陵	古墳	墳丘 周溝	須恵器　有蓋高杯（TK208）	5C 後半		辰口町教育委員会1982『辰口町下開発茶臼山古墳群』I 辰口町教育委員会2004『辰口町下開発茶臼山古墳群』II
44		茶臼山12号墳	辰口町下開発	能美市	丘陵	古墳	墳丘	須恵器　甕、甕、杯蓋（TK208～TK23） 土師器　杷手付椀	5C 後半		辰口町教育委員会1982『辰口町下開発茶臼山古墳群』I 辰口町教育委員会2004『辰口町下開発茶臼山古墳群』II
45		和田山4号墳	寺井町和田	能美市	丘陵	古墳	周溝	須恵器　甕、有蓋高杯、杯身（TK208）	5C 後半		石川県寺井町･寺井町教育委員会1997『加賀能美古墳群』
46		和田山5号墳	寺井町和田	能美市	丘陵	古墳	墳丘	須恵器　甕（TK216～ON46）	5C 後半		石川県寺井町･寺井町教育委員会1997『加賀能美古墳群』
47		和田山22号墳	寺井町和田	能美市	丘陵	古墳	周溝	須恵器　甕（TK216～ON46）	5C 後半		石川県寺井町･寺井町教育委員会1997『加賀能美古墳群』
48		寺井山1号墳	寺井町寺井	能美市	丘陵	古墳	墳丘（採集）	須恵器　甕、甕（TK208）	5C 後半		石川県寺井町･寺井町教育委員会1997『加賀能美古墳群』
49		額見町遺跡	小松市額見町	小松市	台地	集落	包含層、竪穴建物 ＊L 字形竈	土師器　甕移動式竈、甑、 朝鮮系軟質土器　甕	7C 前半～中頃	鉄滓あり 竪穴建物23棟	小松市教育委員会1998『額見町遺跡（額見町遺跡 A 地区）』
50		額見町西遺跡	小松市額見町	小松市	台地	集落	竪穴建物 ＊L 字形竈	土師器　甑	6C 末～7C 初	竪穴建物3棟	（財）石川県埋蔵文化財センター2002『額見町西遺跡』

表８　渡来系遺物一覧表

No.	地域	遺跡名	所在地	新市町村名	立地	性格	出土層位・遺構	器種（遺物）	時期	備考	文献
51	加賀	矢田野遺跡	小松市月津町	小松市	台地	集落	竪穴建物 ＊L 字形竈	須恵器　有蓋高杯、甕 土師器　甕、甑	7C 前半	竪穴建物2棟	荒木麻理子2005「矢田野遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第13号 （財）石川県埋蔵文化財センター
52		矢田野エジリ古墳	小松市月津町	小松市	台地	古墳	周溝	須恵器　鈴台付高杯	6C 前半	円筒埴輪（倒立技法） 人物埴輪、馬形埴輪等	小松市教育委員会1992『矢田野エジリ古墳』
53		念仏林南遺跡	小松市月津町	小松市	台地	集落	竪穴建物	土師器　甑	6C 代	鉄滓あり	小松市教育委員会1999『念仏林南遺跡Ⅱ』
54		薬師遺跡	小松市矢崎町	小松市	台地	集落	竪穴建物 ＊L 字形竈	土師器　移動式竈	7C 中頃		小松市教育委員会2003『薬師遺跡』
55		島遺跡	小松市島町	小松市	台地	集落	竪穴建物	土師器　移動式竈 須恵器　甑	5C 後半～6C 代	鉄滓あり	小松市教育委員会1998『島遺跡』
56		高堂遺跡	小松市高堂	小松市	沖積平野	集落	包含層	須恵器　杯蓋（TK216）	5C 後半		石川県立埋蔵文化財センター1981『高堂遺跡』
57		漆町遺跡	小松市漆町・金屋町 白江町・若杉町	小松市	沖積地	集落	溝	須恵器　直口壺、甑（TK216）	5C 後半	鉄滓あり	（財）石川県埋蔵文化財センター1989『漆町遺跡Ⅳ』
58		千代・能美遺跡	小松市能美町	小松市	沖積平野	集落	河道	土師器　甑	4～5C 代	山陰系	林大智2002「千代・能美遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第7号 （財）石川県埋蔵文化財センター
59		林タカヤマ窯跡	小松市林	小松市	丘陵	窯跡	窯内	須恵器　平底短頸壺（百済系？）、有蓋三足壺 土師器　甑	6C 末～7C 初	甑は把手に切り込み有り	小松市教育委員会1999『林タカヤマ窯跡』
60		千崎遺跡	加賀市美岬町千崎	加賀市	洪積台地	集落	竪穴建物	須恵器　杯身（TK216） 土師器　移動式竈 朝鮮系軟質土器　甑	5C 後半～6C 初		石川県教育委員会1972『加賀市千崎・大畠遺跡』
61		美岬・千崎B遺跡	加賀市岬町浜山	加賀市	洪積台地	集落	柱穴 土坑	土師器　甑	5C 後半		（財）石川県埋蔵文化財センター1998『美岬・千崎遺跡』
62		弓波遺跡	加賀市弓波町・ 七日市町・八日市町	加賀市	沖積平野	集落	川跡	土師器　移動式竈、甑 朝鮮系軟質土器　把手付鍋、長胴甕	6C 代	軟質土器の甕体部に格子目タタキあり	石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2003『弓波遺跡』
63		松山C遺跡	加賀市松山町	加賀市	沖積平野	集落	柱穴 溝	土師器　移動式竈、甑	6C～7C 代	鞴羽口、鉄滓 鉄製品あり	（財）石川県埋蔵文化財センター2001『加賀市松山C遺跡』
64		敷地天神山遺跡	加賀市敷地寺岡町	加賀市	洪積台地	集落	竪穴建物	須恵器　角杯 土師器　把手付椀	7C 初	角杯は在地産	石川県立埋蔵文化財センター1987『敷地天神山遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター1982『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ（志賀町中村畑遺跡・志賀町女郎塚遺跡）』
65		篠原遺跡	加賀市篠原町	加賀市	洪積台地	集落	包含層 土坑	土師器　甑	7C 代		石川県立埋蔵文化財センター1987『篠原遺跡』
66		潮津金場遺跡	加賀市潮津町	加賀市	平野	集落	竪穴建物 土坑	土師器　甑	5C 後半		（財）石川県埋蔵文化財センター1997『潮津遺跡群』
67		永町遺跡	加賀市大聖寺永町	加賀市	沖積地	集落	土坑	須恵器　杯蓋（TK216）	5C 後半		吉岡康揚1991「北陸の初期須恵器」 『日本海域の土器』（古代・中世編）六興出版
68		永町ガマノマガリ遺跡	加賀市大聖寺永町	加賀市	沖積地	集落	土坑	須恵器　甑、杯蓋（ON46～TK208）	5C 後半		石川県立埋蔵文化財センター1987『永町ガマノマガリ遺跡』
69		二子塚遺跡	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	集落	竪穴建物	須恵器　甕（ON46）	5C 後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』
70		二子塚10号墳	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	古墳	周溝	須恵器　甕（ON46）	5C 後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』
71		二子塚16号墳	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	古墳	周溝	須恵器　甕（ON46～TK208）	5C 後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』
72		二子塚19号墳	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	古墳	周溝	須恵器　杯身、器台、甕（ON46）	5C 後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』
73		二子塚20号墳	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	古墳	周溝	須恵器　甕（ON46～TK208）	5C 後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』
74		二子塚21号墳	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	古墳	周溝	須恵器　短頸壺（ON46～TK208）	5C 後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』
75		二子塚23号墳	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	古墳	周溝	須恵器　甕、甑（TK208）	5C 後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』

表９　渡来系遺物一覧表

No.	地域	遺跡名	所在地	新市町村名	立地	性格	出土層位・遺構	器種（遺物）	時期	備考	文献
76	加賀	二子塚29号墳	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	古墳	周溝	須恵器　壺(ON46)	5C後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』
77		二子塚33号墳	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	古墳	周溝	須恵器　杯身(ON46～TK208)	5C後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』
78		二子塚36号墳	加賀市二子塚	加賀市	沖積地	古墳	周溝	須恵器　甕、壺(TK208)	5C後半		石川県教育委員会1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』
79		吸坂丸山5号墳	加賀市吸坂町丸山	加賀市	丘陵裾	古墳	周溝	須恵器　瓿、壺(TK208頃)	5C後半	金製細環 人物埴輪、鳥形土製品	加賀市教育委員会1990『吸坂丸山古墳群』
80		大菅波D遺跡	加賀市大管波	加賀市	沖積平野	集落	溝	須恵器　杯身、甑、瓿(TK216)	5C後半	甑は把手に切り込み有り	加賀市教育委員会1991『大管波D略報』
81	能登	武部ショウブダ遺跡	鹿島郡鹿島町武部	中能登町	扇状地	集落	包含層	土師器　甑	6C～7C代	鞴羽口、鉄滓あり	石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002『武部ショウブダ遺跡』
82		小竹ガラボ山古墳	鹿島郡鹿島町小竹	中能登町	低丘陵裾部	古墳	墳丘	須恵器　器台、甕(TK208)	5C後半		鹿島町教育委員会1985『小竹ガラボ山古墳・小竹平遺跡』
83		水白モンショ遺跡	鹿島郡鹿島町水白	中能登町	扇状地	集落	包含層	土師器　移動式竈	5C後半～6C前半		石川県立埋蔵文化財センター1989『水白モンショ遺跡』
84		久江C遺跡	鹿島郡鹿島町久江	中能登町	山地斜面	散布地	包含層	土師器　移動式竈	5C～6C代		(財)石川県埋蔵文化財センター2000「久江C遺跡」『鹿島町久江遺跡群』
85		曽祢C遺跡	鹿島郡鹿島町曽祢	中能登町	扇状地	集落	包含層 河道	土師器　移動式竈	7C代		(社)石川県埋蔵文化財保存協会1995『曽祢C遺跡』
86		高畠テラダ遺跡	鹿島郡鹿島町高畠	中能登町	平地	集落	不明	土師器　移動式竈	7C代		(社)石川県埋蔵文化財保存協会1994『藤井サンジョガリ遺跡・高畠テラダ遺跡・高畠カンジダ遺跡』
87		芦川八幡遺跡	鹿島郡鹿島町芦川	中能登町	沖積地	集落	不明	須恵器　大型瓿(TK208)	5C後半		鹿島町1966『鹿島町史』
88		大槻バス停遺跡	鹿島郡鳥屋町大槻	中能登町	沖積地	集落	採集	土師器　移動式竈	5C～7C代		埋蔵文化財研究会1992『第32回　埋蔵文化財研究集会　古墳時代の竈を考える』第2分冊
89		春木黍谷遺跡	鹿島郡鳥屋町	中能登町	丘陵裾	集落	包含層 土坑	土師器　甑	7C後半	把手に切り込み有り	鳥屋町教育委員会1995『春木縄文遺跡・春木黍谷遺跡』
90		沢ソウダケ遺跡	鹿島郡鹿西町金丸	中能登町	扇状地	集落	不明	土師器　甑	7C～8C代		鹿西町教育委員会2003『沢ソウダケ遺跡・宮地遺跡』
91		谷内ブンガヤチ遺跡	鹿島郡鹿西町 金丸谷内・杉谷	中能登町	丘陵裾	集落	包含層	土師器　甑	4～5C代	底面は、多孔	(財)石川県立埋蔵文化財センター1995『谷内・杉谷遺跡群』
92		寺家遺跡	羽咋市寺家町・柳田町	羽咋市	砂丘	集落	包含層 溝、竪穴建物	須恵器　移動式竈(TK47) 土師器　甑	7C～8C代	移動式竈は検証の必要あり 鉄製品、鞴の羽口あり	(財)石川県立埋蔵文化財センター1997『寺家遺跡』 (財)石川県立埋蔵文化財センター1988『寺家遺跡発掘調査報告書』II
93		柳田シャコデ遺跡	羽咋市柳田町	羽咋市	台地	集落	竪穴建物	土師器　甑	7C初	把手に切り込み有り	(財)石川県立埋蔵文化財センター1984『柳田シャコデ遺跡』
94		四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町	羽咋市	扇状地	集落	包含層	土師器　甑	7C初	鉄滓、鞴の羽口あり	石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2005『四柳白山下遺跡』I
95		四柳ミッコ遺跡	羽咋市四柳町	羽咋市	扇状地	集落	竪穴建物	須恵器　無蓋高杯、瓿(TK73～TK208)、瓿、杯身(ON46)	5C中頃	鞴羽口(専用・転用) 鉄滓、臼玉	林大智1999「四柳ミッコ遺跡(第2次調査)」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 (財)石川県埋蔵文化財センター
96		太田ツツミダ遺跡	羽咋市太田町	羽咋市	沖積地	集落	不明	土師器　甑	7C～8C代		羽咋市教育委員会1995『太田ツツミダ遺跡』
97		長者川遺跡	羽咋市兵庫町 松ヶ下・御坊山	羽咋市	沖積低地	集落	包含層	土師器　移動式竈	6C～7C代	鉄滓あり	羽咋市教育委員会1997『長者川遺跡』I 羽咋市教育委員会2005『長者川遺跡』II
98		正友遺跡	押水町正友	宝達志水町	丘陵	集落	不明	須恵器　把手付椀(ON46)	5C後半		石川県郷土資料館1981『須恵器』
99		竹生野遺跡	押水町竹生野	宝達志水町	丘陵	集落	包含層	須恵器　杯蓋、把手付椀(TK216)、杯身(TK208)	5C後半	鉄製品あり 甑底面は多孔	石川県立埋蔵文化財センター1980『竹生野遺跡』
100		二口かみあれた遺跡	志雄町二口	宝達志水町	沖積地	集落	包含層 溝	土師器　甑	4C代		志雄町教育委員会1995『二口かみあれた遺跡』I 志雄町教育委員会1999『二口かみあれた遺跡』(第2次) II
101	越中	開ヶ丘中遺跡	富山市開ヶ丘	富山市	丘陵	集落	不明	土師器　移動式竈	不明	竈は未報告	富山市教育委員会2003『富山市開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷III遺跡発掘調査報告書』
102		伝福居古墳	富山市福居	富山市	沖積地	古墳	不明	陶質土器　台付壺	5C～6C代		石川県郷土資料館1981『須恵器』

表10　渡来系遺物一覧表

No.	地域	遺跡名	所在地	新市町村名	立地	性格	出土層位・遺構	器種（遺物）	時期	備考	文献
103	越中	若宮B遺跡	富山市立山町若宮	富山市	扇状地	集落	包含層 竪穴建物	須恵器　杯蓋、杯身、甕（TK208）	5C後半		富山県教育委員会1982『北陸自動車道遺跡調査報告』（立山町　土器・石器編）
104		流通業務団地NO.7遺跡（5号墳）	射水郡大門水戸田小杉町青井谷	射水市	丘陵	古墳	墳丘	須恵器　甕（TK216）	5C後半		富山市教育委員会1982『小杉流通業務地内遺跡群第３・４次概要』
105		流通業務団地NO.7遺跡（6号墳）	射水郡大門水戸田小杉町青井谷	射水市	丘陵	古墳	周溝	須恵器　有蓋高杯（TK216）	5C後半		富山市教育委員会1982『小杉流通業務地内遺跡群第３・４次概要』
106		道林寺Ⅰ遺跡	小矢部市道林寺	小矢部市	沖積地	集落	竪穴建物	須恵器　杯身（TK73）、 杯身、甑、杯蓋（TK216）	5C後半		富山市教育委員会1978『日の宮遺跡発掘調査報告書』
107		中尾新保谷内遺跡	氷見市大野・中尾	氷見市	沖積平野	集落	包含層	土師器　移動式竈	6C代		富山市文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2004『埋蔵文化財調査概要－平成15年度－』 富山市文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2005『埋蔵文化財調査概要『埋蔵文化財調査概要－平成16年度－』
108		中谷内遺跡	氷見市中谷内	氷見市	沖積平野	集落	包含層	土師器　移動式竈	5C～6C代	鞴の羽口あり 鳥形土製品あり	富山市文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2004『埋蔵文化財調査概要－平成15年度－』 富山市文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2005『埋蔵文化財調査概要『埋蔵文化財調査概要－平成16年度－』
109		上久津呂中屋遺跡	氷見市上久津呂	氷見市	沖積平野	集落	包含層	須恵器　角杯	6C～7C代	在地産 海綿骨針を多く含む	富山市文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2004『埋蔵文化財調査概要－平成15年度－』 富山市文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2005『埋蔵文化財調査概要『埋蔵文化財調査概要－平成16年度－』
110		イヨダノヤマ３号墳	氷見市上田	氷見市	丘陵	古墳	墳丘	須恵器　杯蓋、甕、甑、杯身（TK208）	5C後半		大野究1998「イヨダノヤマ３号墳」『氷見市立博物館年報16号』 氷見市2002『氷見市史』資料第５考古
111		神代羽連遺跡	氷見市神代	氷見市	沖積地	集落	不明	土師器　移動式竈、甑	5C末～ 6C前半		氷見市2002『氷見市史』資料第５考古
112		柳田遺跡	氷見市柳田	氷見市	砂洲	集落	不明	土師器　移動式竈、甑	5C末		氷見市2002『氷見市史』資料第５考古
113		麻生谷新生園遺跡	高岡市麻生谷	高岡市	沖積平野	集落	竪穴建物 溝	土師器　移動式竈	6C末～7C初	鞴の羽口、ミニチュア土器あり	高岡市教育委員会1997『麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡調査報告』
114		城光寺B２号墳	高岡市城光寺	高岡市	丘陵	古墳	墳丘 周溝	須恵器　甑（ON46～TK208）	5C後半		高岡市教育委員会1958『高岡市埋蔵文化財概報』
115		寺山古墳	高岡市城光寺	高岡市	丘陵	古墳	墳丘（採集）	須恵器　杯身、高杯、杯蓋（TK208）	5C後半		高岡市教育委員会1958『高岡市埋蔵文化財概報』
116		加納横穴	西砺波郡福岡町加納	高岡市	丘陵	横穴墓	墳丘	須恵器　杯身、杯蓋、台付長頸壺、 高杯、提瓶	6C後半～ 7C代		富山県1972『富山県史』考古編
117		上野１号墳	西砺波郡福岡町上野	高岡市	丘陵	古墳	墳丘（採集）	須恵器　大型甑（TK216）	5C後半		富山県1972『富山県史』考古編
118		利田横枕遺跡	立山市利田横枕	立山市	沖積平野	集落	包含層	土師器　移動式竈、把手付椀	6C後半～ 7C初		富山県1972『富山県史　考古編』 立山町教育委員会2001『利田横枕遺跡』
119	越後	蟻子山古墳群	南魚沼郡六日町余川	南魚沼市	丘陵	古墳	不明	須恵器　大型甑（TK208）	5C後半		金子拓男1977「伊予郡の古墳」『南魚沼』
120		飯綱山古墳群	南魚沼郡六日町余川	南魚沼市	丘陵	古墳	不明	須恵器　甑（TK208）	5C後半		金子拓男1977「伊予郡の古墳」『南魚沼』
121		余川中道遺跡	南魚沼郡六日町余川	南魚沼市	沖積地	集落	竪穴建物 土坑	須恵器　杯蓋・杯身、甕、壺、高杯、 甑、甑（TK216～TK208）	5C後半	集落内祭祀場あり	新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2005『余川中道遺跡』Ⅰ
122		下山１号墳	南魚沼郡大和町浦佐	南魚沼市	丘陵	古墳	石室内	須恵器　大型甑（TK208）	5C後半		中川成夫1963『新潟県魚野川流域古墳群の調査』立教大学
123		下山３号墳	南魚沼郡大和町浦佐	南魚沼市	丘陵	古墳	石室内	須恵器　甑（TK208）	5C後半		中川成夫1963『新潟県魚野川流域古墳群の調査』立教大学
124		田伏遺跡	糸魚川市田伏	糸魚川市	沖積地	集落	包含層	須恵器　杯身（TK216）	5C後半		糸魚川市教育委員会1972『田伏玉作遺跡』

表11　渡来系遺物一覧表

参考文献

中司照世1977「加賀における古墳時代の展開」『古代文化』224号（29―９）（財）古代学協会
西谷正1979「日本における韓式土器・陶器」『世界陶磁全集』17韓国古代　小学館
帝塚山考古学研究所1982帝塚山考古学研究所設立記念『日・韓古代文化の流れ』
段熙麟1986『渡来人の遺跡を歩く（山陰・北陸編）』六興出版
今津啓子1987「大阪湾岸地域出土の朝鮮系軟質土器」『東アジアの考古と歴史』下　岡崎敬先生退官記念事業会　同朋舎
江浦洋1988「日本出土の統一新羅系土器とその背景」『考古学雑誌』第74号第２号　日本考古學会
田嶋明人・小島芳孝1989「加賀・能登における古代手工業生産の様相」『北陸の古代主工業生産』北陸古代手工業生産史研究会　真陽社
北野博司・池野正男1989「北陸における須恵器生産」『北陸の古代主工業生産』北陸古代手工業生産史研究会　真陽社
石川県考古学研究会編1998石川県考古資料調査・集成事業報告書『祭祀具』
都出比呂志1991「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』343日本史研究会
木下亘1991「陶質土器とその分布」『古墳時代の研究』第６巻石野・岩崎他編　雄山閣
亀田修一1993「考古学から見た渡来人」『古代文化談叢』第30集　九州古文化研究会
堀田啓一1993「渡来人―大和国を中心に―」『古墳時代の研究』第13巻　石野博信・岩崎卓也他編　雄山閣
荒木敏夫編1994『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版
富山県埋蔵文化財センター1994『古代の須恵器―新技術の伝来―』
松原弘宣編1995『瀬戸内海地域における交流の展開』名著出版
石川県立歴史博物館1996『波濤をこえて―古代・中世の東アジア交流―』
宮島了誠編1997『季刊考古学―渡来系氏族の古墳と寺院―』第60号　雄山閣
林大智1999「石川県における農具の鉄器化と手工業生産の導入について『石川県考古資料調査・集成事業報告書　農工具』」石川考古学研究会
石川県立歴史博物館2000『飛鳥の王権と加賀の渡来人』日韓国際シンポジウム報告書
望月精司2000「小松市額見町遺跡の調査」『日本歴史』２月号　吉川弘文館
まつおか越の国伝説実行委員会2001『古墳時代の伽耶と倭―継体大王時代の日韓交流―』
亀田修一2001「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器―古墳時代資料を中心に―」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ―蟹沢遺跡・上沢Ⅲ遺跡・古志本郷遺跡Ⅲ』　国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・島根県教育委員会
花田勝広2002『古代の鉄生産と渡来人―倭政権の形成と生産組織―』雄山閣
亀田修一編2003「古墳時代中期・後期の土器」『考古資料大観』第３巻　小学館
林大智2004「鉄製品」『八里向山遺跡群』石川県小松市教育委員会
白石太一郎・上野祥史編2004『古代東アジアにおける倭と伽耶の交流』国立歴史民俗博物館研究報告第110集　国立歴史民俗博物館
福岡町教育委員会2005『ふくおかの飛鳥時代を考える～富山、能登の横穴墓からのアプローチ～』ふくおか歴史文化フォーラム資料集
亀田修一2005「地域における渡来人の認定方法―豊前上毛地域を例として」『九州における渡来人の受容と展開』第８回九州前方後円墳研究会実行委員会
小林昌二・小島芳孝編2005『日本海域歴史体系』第一巻古代編Ⅰ　清文堂
坂野和信2005「畿内と東国の古墳中期における韓半島系食器―丸底と平底食器の系譜―」『考古学雑誌』第89巻第三号　日本考古學会
田中史生2005『倭国と渡来人―交差する「内」と「外」―』　吉川弘文館

図版出典

表１～６：新規作成　集成データを基に修正・調整。表７～11：新規作成：主に新村が集成し、各文献を基に修正・加筆。図１～３：新規作成　木内信蔵・山口恵一郎監修1992「日本地図帳」第31版　昭文社「福井県」、「石川県」、「富山県」を基に新村・松尾が修正・加筆。

新村いづみ（創価大学文学部人文学科卒業生）、松尾　実（（財）石川県埋蔵文化財センター）

石川県埋蔵文化財情報
第15号

発行日　2006(平成18)年３月31日

発行　財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731

URL　http://www.ishikawa-maibun.or.jp/
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　株式会社　橋本確文堂

Ⓒ ㈶石川県埋蔵文化財センター